
ニューウェーブ

京理義高

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニューウェーブ

【Nコード】

N0044G

【作者名】

京理義高

【あらすじ】

リストラされた僕はホスト、引きこもり、ソープ嬢、昔の彼女と共に、バンで東京から九州へと旅をすることとなる。売れないバンドがバンで全国を旅するように、現実社会で挫折を味わった僕は何かを取り戻そうとした。

友が光に見える日（前書き）

New Wave

1970年代の終わりから1980年代頃にかけて世界的に流行したロックの一ジャンルである。パンク・ムーブメントだったものの1977年のイギリスで生まれた。パンクと同時代的な気分を共有しつつ、音楽的な洗練度を高め、メジャーで成功したバンドも多い。

本小説は上記題材の基に作成しました。

改行等の推敲により、若干の修正しております。（最後まで行う予定）

友が光に見える日

ヘッドホンから流れてくるラジオのDJは、ハイテンションでビル・ネルソンの『RED NOISE』を紹介した。それを聞きながら、地下鉄のホームから地上に上がっていくと、案内掲示板を見て出口を探し、日比谷公園を目指した。皇居の近くは張り詰めた空気が流れている。そう思ったのは警官の姿が多数見受けられ、何か良からぬことが発生しているのではないかという不安も入り混じっているからだ。

だが、そこにはぼくの感じた日常が繰り広げられているだけだった。不安にさせていたのは寒風のせいだと自己満足で片付けた。流れてくる音楽は1979年のアルバム、斬新な音楽を世界に配信しようとするバンドの音楽、それは非日常を演出し、日常がめっちゃくちゃになってくれとせがんでいるようだ。と、英語の歌詞もわからない僕は、演奏だけで想像した。

季節としては早すぎるぐらいの落ち葉、裸の木々と花壇のブルーゲンビリアの彩りがミスマッチだった。光と闇は揃って仲良く存在している。年寄りの夫婦が仲良く手をつないで歩いている。いくつかの困難を超えてきた熟成された木々そのものだった。スプレーで落書きされた壁と、パントマイマーの作りだした架空の壁と綱を自然画として捉えた。サックスの練習をしていた大学生と、日比谷音楽堂から流れてくる聞いたことがないバンドのサウンドのジャムを耳にしながらぼくはベンチに座った。見上げた先に、太陽が心地よい陽気を提供していた。

東京の中心に位置する場所であっても、どこかの地図に載っていない場所であっても、時間の流れは変わらないのだ。特に、人口密

度が最大とされた場所に居る自分が感じたのは、雑多な物事も、多くの人々も、ぼくにとっては無臭であり、何かを強制する圧迫感はないもないという真実だけだった。雑念を取り入れなければとても優しい街である。

丁度こんな平和に見えた日から時間は三十日程遡ることとなる。

「菅野智也君、申し訳ないが、十月いっぱい会社を退職してほしい」

上司である課長の言葉は優しかった。長年の付き合いで考えた末の決断であることはわかっていた。

「はい。残務はどうしましょうか？」

酷く冷静であるけれども、ぼくの自然な対応であった。リストラに対する怒りがなかった。元々後になって雑念を考え抜いて、結果的に見返してやるという熱はなく、すべてを都合の良い解釈で消化してしまう性格があった。

「今の製品はそのままQ主任に引き継いでほしい」

「わかりました」

決められたルールを外れることなく過ごしていた日常、慣れ過ぎていささかも足りないところもありつつ、満足していた。黙々と書類作成を行っている合間に、課長から珍しく単独でぼくを指名した呼び出しがあったのだ。決して会社が不利益になる働きぶりはないと来なかったと自負する。飛び抜けて仕事が出来たわけでもないが、与えられた仕事はそこそこの業績として残っていたし、毎年入る有

給休暇は最大値である四十日を超えた。意識的に休まなかったのではなく、有給休暇を取っても休んでいる間に、上司が、同僚が頑張って働いている状況を想像して休んだ気にならなかった。

給料に不満もなく、当たり障りのない人間関係を構築した。人のパーソナリティーを的確な言葉で表現できる同僚の営業は、ぼくのことを癒し系と褒めてくれた。自身の事をいまいち理解できなかった時期に聞いたことだけに非常に嬉しかった記憶がある。

逆説的に言うのなら、自分の意見と呼べるものが希薄だった。良い奴だけれども、自分のやりたい事が分からないと言った具合だ。もちろん、自分自身がわかっていない位だから、他の人に伝わるわけなかった。例えば、ぼくが主体で動くプロジェクトがあったとする。会議を開催し、各部門の人達と協力してプロジェクトを遂行する必要があるので、その人達を集めて協議する。開発テーマ及び開発スケジュールを自分の実力に沿った予定を立てプレゼンテーションする。そこで役割を明確しなければならぬのに対し、各部門の人達にこうして下さいという指示も出せぬ状態であり、上司がフォロワーを入れる。結果的にその中でぼくの意見と呼べる言葉は存在しなかった。意見がなければ、やらなくてもよい業務もやることになる。意欲が伝わらなければ、やる気があるのかと欺瞞を持たれる。すべて他人事のようだった。今となっては、それらの要因がリストアップの原因のすべてであったと思う。

今回の人件費削減は課長より上の存在である役員クラスの命令だと言う。各個室を設けられていて、近い場所にありながら遠い存在の人々。偶然食堂で見る姿は、同じ空気を吸っているのかと思いたくなるような威厳があった。いくら頑張っているのかと仕事の結果が役員に対して好ましい状況であるかわからない（少なくとも役員クラスにまでぼくの名前と業績が知れているかさえも不明）

であり、この会社に絶対必要な人材であると評価されている社員のレッテルを貼られるまでの時間が絶望的に足りなかった。ぼくの同期社員でも何人かは会社に残る話があったのだが、さして嫉妬もなかった。会社の評価は的確であったし、納得していた。課長とぼくを取り巻く小さな会議室は、激論が飛び交っていた日々を物語らない程静かであった。ひんやりとしていて、密会に使う秘密の場所を思わせた。

「会社の経営方針であればしょうがないですよ」

ぼくは無表情で答えた。課長が責任を感じてもしょうがないと思う状況だった。中間管理職の宿命なのだと同情した。但し、ありがたいことに世間はぼくの状況について同情してくれた。

「本当に申し訳ない」

課長は体に害のある薬品を混入させて市場に売っていた会社の社長が、問題発覚してマスコミを通じて謝罪しているかのように真剣だった。罵声を浴びさせられても仕方がないと腹を括っていた。ぼくはどうして良いかわからずに持て余していた。目上の人に謝罪される状況に慣れていないのだ。

上司がそこまで部下に対しで謝罪するものだとは思ってもみなかった。いつでも的確な指示をし、時には命令口調で強勢し、ぼくの仕事の未来を開拓していく雲の上の人物という固定概念があったからだ。いつかは自分もその立場になっていく。そう、ぼくはこの会社で定年になるまで働くことを疑ってはいなかった。ぬるま湯に漬かっている状況で安堵し、実はかなり業績が悪くなっていることさえアンテナを張っていなかったのだ。

会社から解雇を先刻された時は居すわったつもりでいたが、いざ会社を後にする最終日は、自分が自分に思えない程放心していたし、別れの挨拶を言う場面では、長年勤めていた会社に対する恩恵はなかった。心は置き去りになっていて、時間だけが過ぎていくような状況だった。近くの飲み屋で開かれた送別会は、ぼくにとって朝礼のように義務的な形式で終わった。喪失感を表に出さないよう必至だったからだ。送り出す側の社員は、葬式じみた空気を出さないよう、いつもより多くアルコールを摂取して盛り上げてくれた。涙を流して止めて行く社員なぞ今まで誰もいない。ぼくはたばこを吸い過ぎた喉で、お世話になりましたを何十回も言っていた。

道を走る車が、街を歩く人々が、ぼくの先を追い越していくようだった。

数人社員が抜けても、会社はなにも変わらず経営されていく。ぼくより遥かに会社に対する業績を残して転職した先輩を見ると、紛れもない真実だった。ぼくと共に解雇された社員は、社会全体の不景気による人件費削減対策の現象として、交友関係に唯一、言い訳できる手段になった。リストラされた中年男性の気持ちを察することができた。後になって悩まされる精神状態は、燃え尽き症候群だった。

スイッチを切り替えるべきだと思う。後を振り向いても誰も喜ばない。マイナス思考になれば誰もついてこない。明日からフリーターになる。社会に出て以来、経験できなかった空白の時間を使いまくってやる。絶対楽しんでやる。心の中で高揚しても、今後のイベント予定は特になかった。

十月で三十歳になった。中途半端な技術とプライドを持った、中

だるみ的な時期だった。世間では方向性を決めてひたすら仕事を極めて行き、出世を意識する時期であろうが、ぼくは少し出遅れていた。

フリーターとなった一日目、日比谷公園から携帯で連絡を取り、友人と渋谷でお酒を飲むことになった。沢村武史はぼくより三つ年下で、十年前、ファミリレストランのアルバイトで知り合ってから頻繁ではないにせよ、たまにお酒を飲んでいる間柄だ。とにかく人を楽しませ、自分を演出することに長けていた。将来は誰よりも大きな家に住んで遊びまわるといった豪快な夢はまだ続いている、今はホストをやっている。景気が良い時は、ぼくの給料の倍以上は軽く稼いでいるし、お客からのプレゼントでファッション及び生活費にかかる出費をある程度カバーし、貯金もコンスタントにしているので、見かけによらずしつかりとしていた。

武史と渋谷駅ハチ公前で待ち合わせし、センター街に向かった。細身のダークスーツと、ポールスミスのワインレッドのシャツにノーネクタイ姿は、武史の体の一部のようにさり気なく、カルバンクラインの香水で魅力を引き立てていた。ホストにしては珍しく、アッシュ色の短髪を立ち上げている。スクランブル交差点には自動車の存在自体を否定しかねない圧倒的な人がいた。人込みは嫌いではない。余計なことを悩んでいる場合、人を観察する行為と、人を避けて進む行為と最先端の情報が其処らに溢れている為、そちらに意識を向けることが出来るからだ。

武史は街ゆく女の子を熱い視線で観察しながら歩いた。道玄坂の居酒屋で立ち止まった。

「もっとお洒落な店じゃなくていい?」

「いつもアフターで行っているから、居酒屋の方がいい」

後輩である自覚からか、武史のぼくに対する敬語は長い間続いた。上下関係を重んじる精神が強かった。距離を縮めたいが理由で、ぼくが幾度も敬語は使うなと言いつつ聞かせようやく折れてくれた。

チェーン店の居酒屋は酔っ払い客で騒がしかった。店員の案内が聞き取りにくかった。関に案内される途中に、大きなトレーナーにベースボールキャップ、黒人ラッパーのような太いジーンズを履いた若者は際立って声を張っていて、熱が入り過ぎているのか、手でジェスチャーをし、身を乗り出していた。周りの客の声で聞こえなくなる声を、無意識に負けじと大声で返す。どの席でもそのような連鎖反応があった。

ぼくは逸脱したペース配分でアルコールを摂取していた。ホストでも嫌気が挿す程の愚痴と、一寸先は闇であるとかネガティブな話ばかりをしながらワインボトル二本を知らない間に開けてしまった。体内の血液と神経が悲鳴を挙げていることすら気が付かなかった。会社の方針から社会悪態を付き、発言に矛先ばかりが際立ったぼくの酷評は、冷静であれば誰もが顔を背けるゴミ同然の代物だった。

冷静な判断をするならば、武史にはいつも明るい話題を提供してもらっているから、ぼくの方も必ず元気をもらっていた。固い話さえも二人の間ではしないと暗黙の了解があったから、ぼくは自ら鉄の掟を破っていたのだ。

泥酔状態のぼくに対し、武史はシャンペンと水割りウイスキーを同量飲んでいられるにも関わらず、浅黒い顔色はまるつきし変化がない。それどころか、話を湿っぽい雰囲気盛り上げる心遣いもありつつ、アルコールの入ったグラスを、正面から見ていかにかっこよく飲む

仕草も心のゆとりがぼくとは正反対だった。武史は悪酔い客の扱いにも慣れていた。何せホストクラブに来店する客は女性ばかりではなく、泥酔状態の男も含まれているのだ。

「俺のクラブも、喧嘩が絶えないからな」

「喧嘩ってホスト同氏の？」

「それも有るけど、それ以外の闇商売屋もからんでくる」

住んでいる世界が違うにせよ、話を聞いた内容から武史のいうホストの世界は弱肉強食だった。指名客を取るもの、派閥に入らない一匹狼、場の空気を読めない新人、数々の理由で時にはリンチに合い、夢破れて止めてしまう人間もいるとのことだ。それらを比較すると、ぼくのリストラは何だかくだらな悩みだと錯覚できそうだ。

「イケメンってだけでもだめ。会話が上手ってだけでもだめ。酒が強いってだけでもだめ」

「腕っ節が強いだけでもだめ。金儲けが目的だけでもだめ」

気分が幾分前向きになった。たばこに火を付けると、気持ちが落ち着いてきた。

「そうそう、最近はだれでもホストになれば楽しんで稼げるなんて思っているけど、そんな甘い仕事ではない」

おおよそ感付いていたものの、クラスの人気もので、いつも女の子にモテていた男でも、クラブで成功するかといえば否だという。

「武史はホストになったきっかけは何だっけ？」

「忘れたの？　しょうがないな。バイトじゃあ稼げないと思ったからだよ。俺って親が離婚して母さんについたから、生活費はかなりきつかった」

「思い出してきた気がする」

ぼくの脳細胞は半分以上が停止していたのだ。相手のことをあまり考えないからかもしれない。少なくとも今は、厭なメモリを消去しようと体も必至なのだ。武史は苦労した生活も家族のせいにはしなかった。アルコールの作用で、心の闇を露呈するのに抵抗がなくなっていた。

「で、自分から面接を受けてホストをやり出した。売れるまではつまらなかったけどな。ハングリー精神というの？　すごい大切だと思うぜ。なんせ近くに信じられないような金額を稼ぐ先輩がいるわけよ。その人を超えたいって思ったからさ。マネから入ったよね。もちろん整形とか仕草とかではなく、売れるためのやり方になるんだけどさ。見ているだけでもわかるんだ。どうすればいいのかって」

「意図的に後輩へ示していたのかな？」

「役者みたいなものだからな。大袈裟なんだけどカッコイイみたいなさ。それでもわからない奴は多いんだ。イケメンなんて街に腐るほどいるからな。俺らがスカウトしても、消えていく奴は沢山いる」

「女の子にモテていたいだけの奴だから消える？」

「まあ、いろいろだ。理想と現実のギャップとかな」

飲んでいる最中も幾度か武史の携帯の着信音があった。悪いなど
いって電話に出た。こうやって飲んでいる時も、女の子からの電話
で話す時も、臆なく会話を展開できる武史はある種の才能である。
ぼく自身で飲むワインをグラスについでくれることや、料理を取り
わけてくれることは、ぼくに対して何かの見返りを求めているわけ
でもなく、武史の好意だった。それはなぜぼくと友達でいてくれる
のかと疑問に思うほどさり気ない気遣いだった。金のある客にだけ
優しくする男であれば、誰も付いてはこないのだ。ぼくは目の前の
カリスマを帯びた友達を見て、幾分自分の発した言葉を改めようと
した。

武史の出勤時間が近付くと、口臭をカットするためにレモン味の
ブレスケア錠剤を三粒飲みこみ、きつくない香水を手首から首筋に
こすり付けると、武史と居酒屋の外で別れた。

「また相談したくなったら連絡くれよ。俺からもするから」

生返事をするだけで精一杯だった。何もかもを破壊したい。急速
に武史が話した裏の事情を思い出し、影響されていた。

街ゆく人を睨み付けながら歩いた。

そこで弱肉強食の世界に溺れたいと思った。

太古の時代、狩猟と自給自足で生活が成り立っていて、ぼくは大
型の肉食動物を仕留める役目があったとする。日々狩猟と自己鍛錬
でかなりの強靱な体を得ている。ぼくの住んでいる村は、他の地域
に比べてもお洒落で、裸同然の人間など存在しない。その内、近い
場所で集落は点在していて、会社が合併するように、お互いの長が

同意の上に合体し、大きな村となる。それらの規模クラスの大きな村がさらに点在していて、合体の話があり、村民の同意を求めた後、ぼくの住んでいる村長が裸同然の野蛮人の村とは合体できないと言う。見た目とダンディズムを非常に意識する人物である。そこでもう片方の村長が宣戦布告して、ぼくの住んでいる村は突然大量の裸同然男たちによって責められる。武器はお互い持っていない。正々堂々拳での戦いで、ぼくらの村は大量な裸同然男をノックアウトしていく。

結果的に村は結局合体するようになり、裸同然男も、村を陰ながら支えていた裸同然女も服を着るようになり、お洒落が浸透し流行する。ぼくは村で英雄となり、あまりぱっとしなかったぼくがお洒落な女性にモテるようになり、お洒落な男性に慕われるようになる。生活は他の人からの貢物で賄えるようになり、ぼくは天狗にならずにストイックに自己鍛錬を忘れない。強靱な体は食欲や性欲や物欲を増幅させていき、それらを満足できる生活を送る。時代錯誤が多用されている想像にピリオドを打った。

渋谷から随分歩いて行くと、住宅街に出た。場所の特定が困難な酔いが襲ってきた。体の組織全体が、別の何かに憑依されているようだった。千鳥足で唯一分かったことは、人の気配が全くないということだけだ。道路の中心に描かれている菱形の標識を踏んだ状態で立ち止まっていると、木枯らしが吹いた。空が綺麗になる季節、ぼくの体には冷気が応えた。

目にとまった電柱に拳を叩きつけた。皮膚がさけて、右手拳から赤い液体が浮き出た。熱を持ったそれが緩やかに手を伝ってアスファルトに落ちていく様は、唯一意識が現実と繋がっていると思わせた。左手の拳も、電柱に叩き付けた。右手のように血液が流れるまでに三度叩きつけた。

痛くない。

強靱な体の組織を手に入れた。

電柱を破壊できる気がした。

高揚した心は誰にも止められない。

男三人に囲まれても勝てる気がした。

暴力だけではなく、どんな状況においても冷静になれる。

自分の言葉が大きな組織を動かす。

何でもできる。

万能感は長続きしなかった。

酒の影響で血流の良くなった体内から流れ出す血は、直には止まらない。ぼくは公園に入って、水道で血を流した。さすがに今の状態では電車に乗れない。ふと、体をズタズタに切られて、血だらけになっても相手に向かっていく映画の主人公を思い出した。なぜあれほどタフになれるのか。ぼくは手から血を流しているだけで気持ちが悪く落ち込んでいる。これで献血をすれば貧血になりかねない。でも、血だらけになっても相手に向かっていかなければ映画にならない。そう判断した。血は冷水のお陰で完全に止まった。

歩いて部屋に付いて時計を見ると、ぼく自身の認識とずれがあった。時間の流れだけが遅い気がした。

次の日である日曜は酷い二日酔いに甞され、拳のケガと弱肉強食の世界にあこがれた感情がひどく自分らしくないと自己嫌悪していた。本来のぼくは喧嘩もしたくないぐらい気弱な平和主義者だった。アルコールで記憶が飛んでしまう神経が羨ましかった。アルコール依存症が主人公の小説を読んだ。主人公の性格は気が弱くて、別の人間になろうというも飲み過ぎる、今のぼくにぴったりだった。夜はお笑いのDVDを見た。星の数ほどの芸人のなかで、ぼくの好きな芸人は三組しかない。さらにそのなかでDVDを持っているのは一組だけだ。ほとんどのDVDを購入して、落ち込んだ時や、暇な時に見て頭をニュートラルにさせるのだ。

月曜は今後のことについて考え始めた。そもそも、解雇になった会社に対しては、皆が言うような恨みもないし、次の就職先が見つかるまでの時間及び金銭面はどうするか心配も希薄だった。浮かんでくるのは将来に対する不安ではなく、今後やりたいことが何もない事実だった。どこへ向かえば最良なのかという命題は目の前に存在するのに、付きつめて考える勇気が湧かなかった。気持ちを紛らわすようにテレビを見て、小説を読んでいると、あつという間に夕方になった。対人関係を断ってしまうと、どうしても困るのが性欲の処理と決まっていた。性欲を持て余していても、付き合っている彼女と会って話をしているだけで解消してしまう経験は幾度もあった。対人に労力を使わない分、エネルギーの供給が性欲に向いてしまう習性があった。

これは一般論なのだろう。

普通の人は気が付かないだけで、あるいはそういった類の話をしていないだけかもしれないが、よっぽどの理由がない限り対人を断つ状況に陥らないのだ。

ぼくはこれまでに微量の貯金をしていたものの、彼女がいなかった

し、コンパを開いてくれそうな女友達もいなかったから、文字通り性欲の処理方法がなかった。自由というものは、企業に組み込まれて形成された精神の人間にとっては、不自由でしかない。

部屋のラックに擦り切れるまで観たアダルトDVDを眺め、魅力を感じないと判断し、衝動に任せ池袋駅に向かった。

駅から大通りの信号を渡った。路上アンケートをしている人に声を掛けられ、こいつは詐欺師であると判断する前に無視して通り過ぎた。誘い文句がドップラー効果となって去っていった。武史と飲んだ時から何も食べ物を口にしていない状態の頼りない足取りで、車一台分ちよつとしかない住宅街の道路に入った。家を白紙から設計したような個性のある民家が多かった。ある家はベンツを二台所有し、ある家は屋敷のような建物だった。屋敷には、薄くなった頭を横わけて隠しているおじさんがハシゴに乗って植木を整えていた。ぼくと目が合うと、後方に目を逸らした。

まさか屋敷を立てた人物ではないだろうとなめていると、背後からクラクションが鳴った。心臓が張り裂けるような驚きを感じ、ぼくの神経は外的ストレスに弱くなっているのだと悲観した。判断力も低下している。ベンツに乗った中年男はゆっくり道を譲ったぼくを追い越しながら睨みつけ、その視線を無視した。

目的地は、ソーブランドだ。ファッションヘルスやピンサロでは満足しないような気がした。性的な処置と考えた時にキャバクラは問題外だ。入るのは大学生以来だというのに、何の躊躇もない。まるで羞恥心をぼくの部屋に置き忘れてきたように無心だった。そもそも彼女もいない男が風俗に躊躇いを持っていてもしょうがない。性犯罪を抑制している組織であると前向きに考えるべきだった。戸惑いを持つとしたら、一般女性からのイメージダウンに対するもの

だけだ。

ごくたまにぼくのことを男なんだねと関心する女性だっている。スープでのセックスも彼女とのセックスでも、即席ラーメンとフランス料理のコースを比較するのと一緒にだ。大差があるというのではなく、胃の中に入ってしまったえば同じなのだ。前工程にどれだけ時間と思いやりを掛けているかの違いが、結果的に思い出に強く残るか残らないかの差を生むだけだった。

繁華街から離れた場所にあるせいなのか、取締がきびしいせいか、客引きの黒服はいない。こういう静かな場所でないといりづらい。控え目な看板にソーブランドと入浴料金が記載された店内に入ると、若手のボーイと目が鋭い中年の黒服が話をしていた。ぼくを来客であると判断し、いらっしやいませと明るい声で出迎えた。顔写真でアスカという子を指名すると前金を払った。指名したアスカは人気があるようで、待たされる事になった。綺麗系で幾分目つきが厳しい感じだ。

待合室で出されたウーロン茶を直に飲み干し、マンガを読んでいると、番号で呼ばれた。案内された個室には各種のたばこが用意されていた。黒いネグリジェを着た女の子が入ってきて、土下座する形で自己紹介をした。明日香と名乗った女の子は、写真通り奇麗な顔をした二十代後半ぐらいに見える。浅黒い肌に、肩から腕にかけて、炎を象った入れ墨が入っていた。ぼくは彼女の何も知らないけれども、やや屈折した人生を歩んできた女性と考えた。性欲処理には何も影響ない。

個室に備え付けの浴槽に湯を注ぎ込んでいる間、タオルケットを二層に重ねた木製のベットに座わった。セブンスターのたばこをもらい、明日香はマルボロメンソールに火を付けた。たばこの煙と湯

気が部屋を漂い、換気扇が吸い取る構造をぼんやり見ていた。

「その手どうしたの？」

赤く変色した拳に眼を向けた。しっかりと回復の兆しが存在していた。とてもボクサーの作るパンチだこには見えない。何かと暴力事件の多い場所であるから、喧嘩でもしたのかと思ったに違いない。適当な言い訳を考えた。電柱を相手にした話は恥ずかしくて言えなかった。

「手を握ったままころんじゃって」

適當過ぎるいいわけだった。手汗をたっぷりかいていた。

「私にはお願いだから優しくしてね」

「女の子には優しいから大丈夫」

「彼女に手を挙げた経験はない？」

「ないよ。安心して」

幾分警戒しすぎるのは、サドの素質がある男の客がたまにいて、乱暴に扱われる可能性があるからだという。ホテルに呼ばれる場合はそういう犯罪率が倍増されるらしい。水知らずの男と対面するのはそれほど怖いと言った。ぼくは深く頷いた。

「小説とか読むの？」

「多少は読むけど」

「そうなんだ。そんな感じがしたの」

「どんな感だと、小説とか読む感じの人になるのかな？」

文学的な外見をしているのであれば、例えば顔色は青白く、髪の毛や髭を伸ばし放題で、難しい顔をしているのだろうか。そもそも言われた経験ない。

「なんとなく」

会話終了。なんとなくでも女の勘は鋭い。

明日香は同志を見つけて嬉しかったのか、好きなジャンルと作家を述べた。どれも純文学とエンターテインメントの中間に当たる小説が好きだろう。それにしても今の時代、好きな音楽や映画、テレビより優先して小説の好みを聞いてくる女の子は相当に変わっている。文学部に所属している大学生なら分かるのだけれども、彼女がアルバイトでソープ嬢をしているとは思えない。差別しては悪いと思うつつも、風俗で働く女性とあれば、さらに異質だった。

お湯が貯まると、明日香は衣服を脱ぎ始めた。上下黒の下着を身につけている明日香は、躊躇なくすべて脱いだ。下腹に若干脂肪が付き始めていることを除けば、バランスの取れた裸である。フルヌードになった明日香はこれが私だから文句あるといった自信さえあった。

明るい状態で異性の裸体を見るのは久しぶりなのに、ぼくは体の隅々まで見回し、審査員のように冷静だった。明日香も視線に慣れているのか、どこか冷めた表情をしている。

ぼくは、ボクサーパンツまで脱ぎ、明日香の手で体を洗った。浴槽で腰を上げ、下半身をお湯に付けない状態でキープする指示があると、明日香の口はぼくの肉幹を含んだ。頭を上下する姿を見ながら早く果ててしまうのではと緊張すると、口を離した。浴槽を出るとタオルで体を雑に拭いた。

「下着姿になってもらえないかな？ブラはしなくていいから。それの方が好きなんだ」

「要はパンツだけ履けばいいのね？」

黙って頷いた。

より興奮させるには、下着を吟味しながら脱がしていくのが一番だ。ガータベルトがないのは残念だった。明日香はわかったと言って、素早く黒のパンツを付けた。電気を薄明かりにセットした。空気が張り詰めた。ラブホテルで恋人とセックスをする前の雰囲気似ていた。ベットに仰向けで座るよう施されると、明日香が主導権を握るサービス開始だ。舌尖だけを絡めるキス、丹念に口だけで体を愛撫すると、ぼくの肉幹を口に含んだ。

果てる前に、ぼくは顔の上下運動を静止させた。主導権がぼくになると、マニュアル通りに明日香の上半身を舌と手を使って愛撫した。感触から、肌は乾燥しているようだった。明日香の性器に触れてもそれは変わらなかった。黒のパンツをずらして、割れ目に舌を使って潤いを与えた。無味無臭で、仄かに石鹸の香りがするぐらいだ。声を漏らしたのは、演技であるか判別できない。黒のパンツを脱がすと、明日香が口でコンドームをセットした。自分から仰向けとなった明日香に覆いかぶさって腰を動かした。果てるまでに時間

はかからなかった。精液の処理をして、再び浴槽で乾燥し切っている肌を洗うと、急に恥ずかしくなり、急いで服を着た。明日香は落ち着いた面持ちで下着を付けていた。セブンスターのたばこに火を付けて思いつき吸い込んだ。たばこが上手いと感じたのはどれぐらいぶりだろうか。二度目はできないか？という欲求もなくなった。

「さっきの話だけど、なんで小説が好きなの？」

「冒険ができるでしょ。映像ではなく自分の想像した舞台で、自分だけの冒険が。それってとても大切だと思うの」

的を得ていない表情のぼくを見て明日香は続けた。

「わたしにもいろいろあって、現実から逃げたいと思い続けていた。きっと今逃げないと精神的にやばいと思う時もあった。お客さまに私情は出せないでしょ？今日は気分が乗らないからセックスはできないとかさ。友達とどこかに旅行へ行っても、劇的な発見でないでしょ。予定を決めて、その通りにこなしていくのはなんかつまらないの。小説はそれを言葉で冒険として代弁し、最終的には読者に想像させてくれる」

ぼくにも何となくわかった。大学時代に貪って読んだ小説群の中に、宝物を発見した経験があった。社会に出て、仕事に追われるようになってからというもの、非現実な物語を読んでもまったく心に浸透してこなかった。単純に受け入れるだけの度量がなかったのだ。そういう内容も、こうして仕事を失った今では夢中になって読めるのではないだろうか。

「映画やドラマよりも小説だなんて珍しいよね」

「変わっているとは良く言われるわ。でも隠す気はないんだよね」

「変わっているとは思わないよ。悪口と思うならば言わせて置けばいい」

「気が合うのね」

明日香は微笑んだ。ぼくは明日香にキスをし、舌を絡ませようとした瞬間タイマーが鳴った。時間ねという明日香は備え付けの電話で何やら業務的な連絡をした。顔写真が小さくプリントされた名刺をもらい、個室から退場した。まだ話していたいという感情が芽生えていた。

「よかったら、又来てね。今度は好きな作品について内容を話そうよ」

黒服と一緒に見送った明日香の表情は、心なしか寂しそうだった。今度指名する時は、果てるまでに時間がかかるなと何となく思った。

池袋シャンク堂に立ち寄った。入口近くのレジに行列が出来ている風景だけで本選びが億劫となってしまう、近くの牛丼屋で生姜焼き定食をディナーとした。山の手線から中央線に乗り換えた車内で明日香について考えた。セックスの余韻はなかった。なぜお金で買った明日香が、これほど気になるのかと思考していたら、大学時代に付き合っていた清美という彼女のことを思い出した。彼女も同じように小説好きだった。

ぼくは数人の女の子と付き合った経験があったが、その中でも清美は飛びぬけて美人であったり、誰からもかわいいと言われる部類の子ではなかった。どこにでもいる、小柄で顔のパーツに突起が少

なく、薄化粧な普通の女の子で、清美との写真を友達に見せてもさして関心は持たれず、つきあっていた当時も一年間の間、お互いの友達を交えて遊んだことはなかった。取り巻く空間がそれらを必要としていなかったのだ。周りになんと言われようとも（実際何も言われなかった）関係無いぐらい、彼女の世界にのめり込んでいたし、実際よく自身が、誰よりもかわいいと思っていた。

初めて知り合った切掛けは、ぼくが大学二年の頃、理工学部 of 学生には珍しく、かつ遅咲きである小説の面白さに目覚め、文章への興味で、現役ライターが講師の文章教室に通い始めた時に遡る。

やる気から、 세미나室の教壇から一番近い位置に座っていた。恥ずかしながら、講習には五人参加していたことも、清美を除いて四、五十代の社会的地位の高い方々が参加していたことも、すべて終わってからわかったことではあるが、ぼくは兎に角、ライターの仕事と有名歌手の歌詞をテキストとして一語一句解体して解析していく説明を集中して聴いていた。理論的な説明に自分の意見を組み込んだ話は、ぼくにとって、どんな大学教授のよりもすばらしいと思った。

但し、内容としてはぼくが知りたかったものではなく、落胆もありつつ帰り支度をしていると、清美と目が合った。一目惚れではなかったものの、強く惹かれる感覚があった。ぼくは先に目を逸らしてしまったものの、東南アジアの民族衣装をアレンジしたようなワンピースと、スカート、サンダル姿は個性が際立っていた。講師と三人の受講者が雑談している中、ぼくは彼女の帰宅するタイミングを待ち、同時に清美もぼくの帰るタイミングを待っているようだった。

若かりし頃、気になっている彼女とは良く目が合う、他人に向け

る視線とは違った視線を自分には向けているという自信は、だいたいの自意識過剰な勘違いの部類で終わってしまうものである。結果論として、そのような楽観的な自信は普通に生きて年をとれば、いつしか消えてしまうものだ。

しかし、ぼくには根拠のない自信があった。その時は、とつくに帰宅する準備も完了しているし、雑談の話の輪に入るわけでもなく、不自然に突っ立っているぼくは不自然であると判断し、セミナー室から退室するとエレベーターに乗ると、清美も後を付けてきた状態で乗ってきた。インド産のリラックス作用のあるお香の匂いをほのかに漂わせていた。

沈黙を破ったのは清美の方で、帰りの東京駅から清美が住んでいるアパート最寄である吉祥寺駅まで話あった。清見は詩や絵本作家になるのが夢で、アルバイトをしながら執筆を続け、ちょっとした出版社に原稿を送っていた。ぼくは明確な夢がないものの、小説作家に興味があり、ジャンルや、好きな作家を挙げると、清美は驚く程自然に話を聞いてくれた。知らない作品に対しても、適当な面倒くさい対応も、わざとらしいあいづちもなく、ごく自然に興味を示し、それは付き合っている間変わることがなかった。世界平和が成立するとしたら、清美のような人間が大統領になるしかないと思われるほどの穏やかさは、人畜無害であり、誰からも愛される人格であると思いついていた。四回目のデートで、井の頭公園に行き、今度『三鷹の森ジブリ美術館』に入ってみようと約束すると、沈黙があり、自然な形で清美とのファーストキスをした。

「私には友達と呼べる人がいないの」

と告白され衝撃を受けた。

「友達のつもりではあるけど、実はそうではなかったということ？」

「つもりでもない。私は今、智也君との恋愛相談を誰かにしようとしても、誰もいない」

誰もが大学、サークル、アルバイトで交友関係を必至で広げ、友達の多さを話しのネタにすることが当たり前であった。特に女の子は孤立を嫌い、横の繋がりを何よりも大切にしていた。ぼくにとってはそれらの価値観さえも失っていた。

「今はたまたまいないだけじゃないの？」

「違うの。今まで十九年間ずっと」

「随分長い年月だね」

「とてつもない時間だった」

清美はそう言うのと、見たこともない悲しい顔になった。

「いつも年末に、一年があつと言うお母さんの言葉の意味が理解できなかったぐらい」

ぼくは聞いてはいけない質問をした罪悪感だけで、謝ることもできなかった。

「高校を卒業して働くようになってから楽になった。詩と絵本は私に生きる希望を与えてくれるの」

返す言葉が見つからなかった。どんな言葉も、発した時点で虚言

になってしまうのではないかと恐れていた。

「だから、こんな私と智也君が釣り合わないような気がして怖いの。ねえわかる？」

清美の毛先は震えていた。毛先だけではなく体全体が真冬に薄着の状態のようだった。繊細な鎖骨が愛おしかった。涙をこらえていたダムが、言ったことで解放された。ぼくは次の言葉を慎重に考えた。

「それが清美の考えている一般論だとすると、大きな間違えだよ。友達の多い少ないで人を判断はしないし、多ければ良いってものじや決してないんだ。いつも友達と遊ぶ約束をして、自分とは遊んできれない状態は悲しいよ。ぼくは清美の謙虚な姿勢には強く惹かれているんだ」

「本当に？」

「うん、後、ぼくは擦れている人が嫌いなんだ。人を利用して、本心を隠している人は嫌なんだ。純粹な清美に惹かれている」

「ありがとう」

清美の涙は頬を伝って地面に落ちた。ぼくは囁くと同時に清美を抱きしめた。体の熱と匂いが伝わってきた。とても安らぐ気持ちになった。清美の体の震えが収まると、清美のほうからもぼくの体を抱いてきた。涙が乾くと、清美の方からキスをしてきた。唇を離すと、ぼく達は照れた笑顔を見せ合った。穏やかだけれども、強い絆で結ばれた瞬間だった。

ぼくが今までに関わったことがない雰囲気の清美に溺れていくのは時間がかからなかった。

付き合って行く上で、清美がなぜ友達と呼べる人がいなかったのかという問いに対し、過去にいじめられた経験があり、或いは別のトラウマが人間不信として作用しているのではないとわかった。彼女自身の世界が、ぼくたちが若い頃に存在していた当たり前の、ありきたりな人間とリンクしなかったただけだった。言葉では説明し難いが、彼女には周りから害を受ける素質がなかったのだ。それを自慢するわけでもなかった。彼女の中では当たり前のように存在する世界を持っていて、それは自然過ぎて、回りが不自然過ぎると思う程のものであった。ぼくは彼女の世界に同調した。凡庸な人間とは退屈で付き合えないぐらいになった。

今まで以上に古今東西の小説を読み、詩に関心を持ち、お勧めの絵本を読んでは清美と話あった。ぼくが好きな作家の作品を、清美は徹夜で読んでからデートに来ることもあった。映画もよく見た。オールナイトでやっている映画館で、ペッティングをしているカッブルのマネもしてみた。清美は酷く恥ずかしがった。レンタルショップでお笑いのビデオを借りて、初めて訪れる清美のアパートを見た。ワンルームの部屋は太陽光が入らない間取りとなっていて、さらに人と像が描かれたモスグリーンベースの重厚なカーテンが、窓を覆い、バルコニーから見える外部を遮断していた。電球を茶色に塗り、低ワット仕様で、部屋全体が薄暗い。インド貴族のベツトを再現しているかのようだ。ぼくはその後何度も訪れることになるのだけれども、自分の部屋以外でこれほど落ち付ける場所は他になかった。リラックス方法を極めた場所なのではないかとさえ思えた。

そして知り合って二か月で彼女と寝た。ぼくがコンビニでコンドームを購入している姿を見て、清美は覚悟を決めたのだと思う。清

美は経験がなく、見せたことのない怯えた顔を見せたが、ぼくが意識しないようにした。いざそういう雰囲気になり、大切に愛撫すると力を抜いていった。清美の中に入っていくと、顔を歪ませて痛みを訴えたが、精液を出してしまうまで耐えていた。すべてが終わっても、出血はなかった。ベットで裸のまま、朝まで語りあった。ぼくが経験者であったことも気にせず好きと言ってくれたことが何よりも嬉しかった。ぼくは清美が今までに会ったことがないタイプの女の子で、明確な夢を持ち、着実に道を歩んでいる様子に尊敬している話をする、喜んでくれた。

密やかな付き合いは続いた。清美には何の不満もなかったし、日増しに眩しい存在になっていく程だった。清実の過去に応募した作品がある絵本大賞の候補に選ばれ、出版社からは次回がんばってくださいという手紙も届いていた。ぼくはというと、清美の影響から友達付き合いが少なくなり、大学に行く時間をデートで使う資金稼ぎの為アルバイトに時間を費やした。そんな中、今読み返せば鉄くずのような小説を書いていた。ぼくはそれを正当な道を歩んでいるのだと勘違いし、当たり前のように単位が危うくなった。自分の置かれている状況に客観視できるようになったのは、大学二年生を終える直前の成人式だった。ぼくは地元中学の同級性に思われはなく、久しぶりに対面した人として外見は皆成長していくものだと思えた。考えをもっていた。

二次会のお酒が入った席で、よくつるんでいたグループと近況を話していた。ぼくは皆が適当に楽しんでいるように見えて、将来を見据えている話を聞くと、嘘を付いて現状を話した。赤裸々に話すことが場の雰囲気壊し、結果的にぼくの生活が荒んでいることを展開したくなかった。皆から取り残される感覚は、カクテルを、清涼飲料水を飲んでいる錯覚まで起こし、まったく酔わない神経にまで変化させていた。

気持ちの切り替えができないぼくの心は、清美の心配の種となった。

「何か悩みでもあるの？ 私のせいだったら、できる限りは直すから言ってよ」

「悩みと呼べるものじゃないんだ。気にしないで」

「それならいいんだけど、いつもの智也じゃないような気がして」

初めて合った時と同じ姿勢で質問され、ぼくは初めて清美に嘘を付いた。清実の生き方に尊敬し、影響を受けたことで大学生活が厳かになり、それに怯えている自分の話など、正直に話せば二人が傷付き、関係が悪化してしまう。もし、清美と同等以上の強い意志があれば、大学の卒業のことは関係なく、回りに流されず夢だけを追っていく状況であると言えたのかもしれない。

大学三年が始まり、取れるだけの授業を取り、必至で勉強の感覚を取り戻し、アルバイトも変わることなくこなし、清美と会う時間だけが少なくなった。彼女がそれでもいいという言葉も、ぼくにとっては物足りなくなっていた。かなり自己中心的な考えではあるものの、もっと会いたいと言われれば清美との時間を作れたのではなにかと思う。状況の変化で、清実との会話は少なくなり、いつしか本心まで言えずにすれ違うようになると、清美との付き合いの終わり、出会った時と同じく自然だった。溺れて勝手に堕落していく自分が怖かった。夢に向かって進む姿に嫉妬し、作品が最終選考で落ちた時はほっとした。もし、対象に選ばれ、プロの道を歩んでいる姿を見て、ぼくは心から喜べなかっただろう。人間としての器が絶対的に欠けていた。そして、別れをぼくから告げた時の清美は、

今までありがとうと言ってくれた。そこには、友と呼べる存在がない弱い人間はなく、強い信念をもった女の子が存在していた。

ぼくはとても大切な存在を失ってしまった事実、別れてから時間を費やして気が付かされた。

先日まで勤めていた会社の技術職に内定が決まり、余った時間が取れるようになると、清美のことを良く思い浮かべた。

明日香の顔写真が小さくプリントされた名刺を見た。実物はこうだったと疑問に思い、それでも明確な実物を思い出せなかった。

まだ見ぬ地へ

奥田則之に失業したことをメールで連絡したら、直に返信が来た。

〽大変だね、社会人は。

〽不景気とはいっても、自分はフリーターだし、

〽株価急落のニュースでしか実感がわかないけど、気を落とさないでね。

〽とは言ってみたものの、自分も周りから就職しろとか言われて余裕がない。

〽ファンタジーのような世界に逃げ込みたいよ。

〽では

則之とは大学時代からの親友だった。ぼくは就職し、則之はしなかった。彼はそれでも自分の意思で生活を構築していたし、躊躇いもなかった。ぼくはそういう生き方を選択できる強い意志には惹かれていた。

則之は悩みを相談しても、最後にがんばれとは言わないタイプだ。ぼくは褒められて仕事のモチベーションが上がる性格ではあるが、がんばれと背中を押されると、素直にがんばれるタイプではない。まるで鬱病患者みたいだ。胸の奥に突っかかりが発生し、増大していく。そう言った意味では失業を告白する友人にもってこいだ。

則之のメールでファンタジーのような世界について、興味があり、具体的に聞いてみた。

〽大袈裟なものじゃないよ。

〽さすがに三十にもなってPCやゲームのような世界を夢見て逃避するのは

＜不可能だってわかるからね。といってしまおうと説明が難しいけど、
＜気の合う仲間どうしで、一ヵ月ぐらいの宛のない旅をするのだとか
さ。

＜そういうのって、僕らの年齢だと、出来るようで、現実を帯びない
だろ。

＜それってファンタジーなんだよ。

＜しがらみを忘れられるような旅をすれば、自分もまともになる気が
するんだよね。

＜自分がいうのも何だけど、そういうことって大人になればなるほど
出来ないでしょ。

＜同好会染みたところは規制があるだろうし、他人が気になる。

＜そういう場所って、旅というよりはツアーになりそうな気がする
し。

＜幹事という案内人がいて、空白の時間と近況を話しあって、それ
ってツアーだろ。

＜てか僕の頭の中がおめでたいファンタジー状態なのかもね。

＜読んでいて引かないようにね。

＜では

メールを読むと、則之との旅を思い描いた。どこか遠い土地へ行
って見る。

やはり心もとない。欲を言えば、移動手段はまず売れないインデ
ーズバンドが楽器類を詰め込んで全国のライブハウスを回ってい
るようなバンとする。メンバーは四、五人で、その中の一人か二人
は女の子が同席し、テントと寝袋等の荷物を詰め込み、行き当たり
ばったりの旅がいい。

とは言えこんな妄想を言えるのは失業したばかりぐらいで、期間を
一ヵ月と設定すると、その期間仕事を休めば則之もアルバイトをク

びになって失業してしまうかもしれない。一人で行く自信がないばくは、小説の主人公のような強さを持ち合わせていない。現に今一人旅を実行するにあたり必要な資質を考察し、メモ帳に記載した。

必要な資質1…一人でいる時が何よりも楽であり、孤独に耐えられる。

旅先である場合、寂しさの余り誰かに連絡しても、話を聞いてくれるような人はほとんどいないだろう。ぼくが考えている以上に周囲は忙しいので、逐一報告されても困るだけだ。

必要な資質2…精神的にタフでなければならない。

野宿をする際、茂みから音が聞こえてきたり、足音が聞こえてきた場合でも、その都度恐怖を味わっているのは精神がもたない。

必要な資質3…肉体的にタフでなければならない。

各地の温度差、環境の変化で体調を崩したとしても、運動できる身体でなければ、事故を起こすだけだ。

必要な資質4…旅の間だけは将来への不安を考えない。ネガティブでないこと。

現実から逃れようとした旅で、不安ばかりをため込んでしまっている意味がない。或いは、もし悩み始めたとしても、話をする相手がいないればいつまでも解消されずに、忘れるまで待つしかない。リラックスする必要がある。それが出来なければ、旅なぞやめて直に就職活動をすべきだ。

必要な資質5…どんな人に対しても臆することなく接することができる。

ハプニングが発生した場合や、旅先で思わぬ出会いのチャンスがあっても、自分が心を開かないと相手もついてはこない。

考えれば考える程出てきそうな気がした。今日一杯考えれば必要な資質10まで完成しそうだ。後ろ向きで理屈っぽくなってきたので、思考を停止させた。行く前から不安になっていては、どう考えても関東を出た当たりで自分に満足し、引き返してくるのが関の山だ。

ぼくの住んでいるアパートの、白くて特徴のない天井を見上げると、失業から九日目たっていることについて考えた。このままだと、虚ろな眼が動かなくなり、天井に染みを作ってしまうそうだ。時間が立てば労働意欲が戻ってくると信じたぼくの精神は、見事に無職という自由と同化していた。同時期に退社した仲間に転職情報を逐一教えてもらっていたのに対し、反応も見せずに放っておいた。ぼくのことを心配している余裕もないに違いない。迷惑をかけてはいないと判断するとそれ以上の連絡はなかった。他人事だった。

会社での仕事を振り返った。ぼくにとってそれがどれだけ意味のあるものであったかを考察すると、あまりにも乏しいボキャブラリーでしか説明が付かない。クビになった時点での考え方と明らかに差異があった。その差異の大部分は未練だった。ぼくを通り過ぎて行った時間なのだと思うと、すべてが不明慮になっていた。結局は仕事があまり好きになれていなかった。

朝、時には昼に起きたい時間に起き、テレビを付ける。外出する前にシャワーを浴び、適当な食糧をコンビニから買ってきて食す。

貯金と相談して自炊もするようになった。ぼくの料理はジャンクフードより酷い代物だったけれども、何もしない身体に栄養価は必要なかった。コエンザイムQ10もビタミンA、B、Cも、アミノ酸も、プロテインも、鉄分も、カルシウムも、コラーゲンも、脂肪も、タンパク質も、アルギニンも、アミノ酸も、タウリンも、塩分も、糖分も、働き人が計算して摂取するものだ。

テレビが面白くなければRPGゲームか小説を読む。気がついたら夜となり、ネットサーフし、時にはアルコールを摂取し、アダルトDVDで精欲処理をする。寝る前まで小説を読む。労働から完全に遮断され、あまりにも無機質で退屈な生活は、ぼくにとって馴染んでしまっていた。さらに救いがたいところは、それらの生活習慣が問題と思わないことだ。

歯止めが利かなくなっていた。社会から忘れられた存在となっているのだ。画期的な変化がなければぼくはこの生活にしがみ付くと思う。こんな悪況から救い出してくれる人さえも求めていなかった。

外出して、まともに街を歩くようになったのはそれからだいぶ後だった。筋肉が弱っているせいで、睡眠時間は申し分ないのに直に息が上がる。ぼくのなかでは日付けの感覚さえ失われつつあった。ちよつとした風邪を引くと、自然治癒に任せ、二日程なにもせずには寝ていた。風邪が治ってしまうと、健康であることがすごいと再確認した。

中古車取扱店でバンを購入した。ボディはブラックで、走行距離二万kmでも、手入れが良く、新品に見える。アパートの付属で五年以上使用してない駐車場にストックすれば問題ない。契約書には勤務地の記載欄があり、前の会社の住所を書いてごまかした。失業している事実を説明し、納得にまで漕ぎ着けるのは億劫だったから

だ。ローンを組まなければ、特に問題なく進行するはずだ。

バンが届いた翌日、目と鼻の先にある則之のアパート近くにバンを止め、則之を訪ねた。ぼくの記憶が正しければ、約束もなしに則之を訪ねるのは初めてだった。インターホンを三回ならしても出てくる様子がなかった。新聞の押し売り営業よりも粘着質に則之を待った。しびれを切らして出てきた則之は、目を丸くしていた。

「どうしたんだい急に？」

則之は無地のよれよれになったグレーのTシャツに、ミリタリのズボン姿だ。度がある眼鏡の奥から漸く見開いている目を伺うと、寝起きかもしれない。玄関のドアを全開にして、木製の衝立で固定した。

「ちょっと話しようかと思ってさ」

「メールか電話いれてくれればいいのに」

「それでは駄目なんだ、直接会って話すことで現実となるから」

よくわからない言うと、部屋に上がらせてもらった。パソコン四台をサーバ管理し、周辺機器や書籍、最小限の家具だけでも六畳ワンルームの部屋はそろそろパンクするのではと思った。人が動ける空間がない。部屋の他に、貸し倉庫へ私物を格納している。いくら小型化が進んだ機材も、物質量があれば場所を大きくとる。どこの企業でも、パソコンと情報を共有するサーバがあるのは当然ではあるが、個人でUNIXを駆使したサーバを所有している人はそういないだろう。簡単なゲームをC言語で作成し、秋葉原で売っている基盤と部品で無線を作成し、十年以上使用している初代のパソコン

はメモリの増設で賄っている。本人曰く、何十種類も内蔵したソフトを、新規購入したパソコンへ新たにインストールする作業の方が面倒なのだという。サーバにはバックアップファイルが五万とある。四日間、水だけで貫徹してゲームを作成するという武勇伝？ もある。

ぼくは空きスペースに胡坐をかいた。埃が付着しても気にならなかった。

「話ってなに？」

「そう急がない。ものには順序があるんだ」

「焦らすなよ」

「それよりUNIXでサーバ管理しているのはなんで？ 元々業務用のOSでしょ」

「どのパソコンでも取り扱えるファイル共有が主目的なんだけど、ツールが高いスペックを有する場合、例えば大規模のICと言語を取り扱う場合に使うんだ。ハードウェア言語で書いたものをコンパイルするにしても、長い周期でシュミレータをかける場合でも、普通のパソコンでは偉い時間がかかってしまう。そこで、サーバを使用するんだよ。どのパソコンにもリンクすることができるし。パソコンが複数なのは、一台目でネットからのファイルをダウンロードし、二台目でテレビを見て、三台目でDVDなりブルーレイに動画ファイルをやいて、四台目でアルバイトをして、五台目で違うプログラミングするといったパラレルで進行が可能になる。ちよつと大げさだけどさ」

「ちょっとまって。四台目でアルバイトをして、五台目で違うプログラミングするのは不可能でしょう？」

「そんなことはないよ。今はブログやサイトにアクセスするだけで稼げる時代だからね。所謂サクラなんだけど。ぼくの場合、アドレスを指定して目的のサイトに飛んで、戻るといったルーチンをパソコンに命令できるアプリケーションを作ったから、全自動で給料が貰える。安いけどね。プログラミングも簡単なものでアルバイトが成立したりするし」

「それで金が貰えるのか」

「簡単ではないよ。アプリケーションを作るにはそれなりの労力がある。僕の場合はC言語という比較的とっかかりの良いもので作成しているけどね」

「則之って実は人としやべるの好きなんじゃないの」

「まさか」

「相当な饒舌ぶりだよ」

「一人になると、頭にたまっていくんだ。それを吐き出しているだけ」

「そうですか。でも勉強になりますよ先生」

笑いかけても、則之は笑わなかった。大きな問題を抱えているようには見えないのだけれども、非常にナーバスだった。軽い冗談が逆効果になる。引きこもりは感情の一部をどこかに置いてきてしま

うのかもしれない。それに置き換え、ぼくの印象からすると則之ほどの技術があれば、それらに関係した業種の企業で重宝される。元々、自宅に仕事を持ち込む意欲がないぼくと比較しても、はるかに設計スキルはあるし、一つのシステムを作り上げた実績も多い。趣味の世界でストレスを感じないのであれば、身に付く速度も速く、持続力もある。他人とのコミュニケーション能力が培えれば、一人前の社員として君臨できるだろう。たばこに火を付けると、灰皿を用意してくれた。

「今日来た理由なんだけども」

「う、うん」

畏まった則之は、目を見開いていた。

「実は車を最近買ってさ」

「もしかして、それを自慢しにここへ？」

則之は信じられないといった表情をした。ぼくは首を横に振った。

「違うんだ。則之がメールでファンタジーのような世界に逃げたいって言っていたでしょ？　それでぼくは考えた結果バンを買った。バンはぼくたちの意思があれば、ファンタジーのような世界へ行く移動手段となる」

「つまり、バンで旅をするっていうこと？」

「ああ」

「行先とかは決まっているのか？」

「決めてないよ。ただ、季節を考えると、南下した方がいいって思っているけど」

顎に親指を付けて則之は考え込んだ。前向きな様子だった。

「京都は行って見たいな。古都の名所めぐりとかね」

「いいね。でもこの旅の目的は自分探しになると思う」

「自分探し？」

「そう。失業してから結構時間は経っているのだけど、就職探しだとか、次のステップに進むことを拒んでいるんだ。自分でもわからないぐらいに行動力がなくなっている。このままでは廃人になってしまうのではないかとさえ思えてきた。だから、仲間と一緒に現実を忘れると共に、旅の中で自分は何を考え、将来何がしたいのかを見つけるつもり」

則之は腕を組んで眉間に皺を寄せながら考えていた。

「則之は何だかんだで自分で稼いでいるでしょ。それだけのスキルがあれば、会社勤めだって出来る。それに引き替え、今のぼくには何もない。空なんだ。こんな感覚は大学にいた頃も味わったことのない空虚感なんだよ。ぼくはこのまま何もしないでいることにも耐えられなくなってしまうだろう。それで、旅に出ようと考えた」

則之はふーんと言った。

「理由はわかった。まるで、パソコン内を初期化したような状態ってことか」

「初期化した状態では、新たに入力される情報で無限の可能性が出てくる」

パソコンのメール着信音が鳴った。則之は気にせず続けた。

「その旅は、一緒に行く仲間ってのはいるの？」

「まずはぼくと則之と」

言われてみれば答え憎かった。考えていなかったわけではなく、まず友達であり、候補としていた武史は則之とは面識がない。それに加え、勤めているホストクラブでも売上が上位であるから、仮に予定の一ヵ月をまるまる拘束するのは、給料、信用、プライド、お客を考えるとかかなり難しい。まして、本人が現実逃避の旅がしたいというような話もした事がなく、常に現実的な考えを持っている。

次にソープ嬢の明日香になるが、何回か通って、彼女の言っていた冒険に出たいと言った理由を聞く必要があった。武史と同じく、店を長期間休んでも大丈夫かという問題もある。最後に清美だ。ぼくは、昔の彼女と別れてから、合って話をした経験がない。未練がましく携帯番号とメールアドレスは残っていたものの、要求に応じるだろうか。とは言え、可能性がないわけでもないから、少しでも興味を示せば、口説こうとは思っていた。それらの内容を則之に説明した。

「ず、ずいぶんバラエティーに富んだ仲間だな。ぼ、僕は旨く溶け込めるだろうか？」

則之は緊張すると、あるいは想像上で緊張すると、どもる癖があった。話を聞いただけで、旅の事を想像して体を固くしているのは、先が思いやられる。

「大丈夫だよ。皆やさしいからさ。それにまだ全員が来てくれるかわからないし」

そう、皆には皆の考え方ががある。会社に勤めていた時、各部門の人を会議室に予定通り集まらせるだけでも苦労していたのだ。時には何人も来ない場合もあった。今回は一か月間、体を借りることになる。但し、失業者の道楽であると冷たくあしらわれても、ぼくは意気消沈しない自信だけはあった。

「てことなので、則之は来てくれるよね？出来れば、則之にはネットを駆使して情報を常に受信できるような役目をやってほしいと考えていたんだ」

「Eモバイルを使えば問題ないな。持っているけど、携帯と同じく電波がないとネットはできないよ。それに、行くか行かないかについては考えさせてもらっていいかな。アルバイトもあるし」

やはり、これだけのシステムを自宅に持っているのであれば、一か月留守にするのにも準備が必要だった。考えている時間にどうなるかはわからない。

「じゃあ、近いうちに応えを待っているよ」

自分勝手だと認識はしているものの、体が勝手に動く感覚を無駄にはしたくなかった。躊躇しているのは、やりたいことも実現できない

い。まるで、ノルマを達成できていない新聞の勧誘業者のようになっていた。

衝動的に池袋へ向かった。ソーブランドの受付で明日香の指名をして、さっき指名があったので一時間少々待たされる羽目になったが、問題ないというと、待合室に案内された。

昼下がりだけあって、待合室には待機している男の姿はない。黒服二人が日常的な世間話をしていることが、滑稽だった。ここを訪れたのは二回目なので、冷静に見渡すと、マンガが格納された棚の奥に幾つかの小説も格納されていることに気がついた。ステイブンキングの「スタンドバイミー」やモーパッサンの「女の一生」の文庫本から、ベストセラーのハードカバーまで二十冊程度ある。

ぼくはまったく読んだことのない戦中戦後を描いたノンフクションの本を手にとった。内容としては残酷な話が多く記載されている。戦争中に生きた人間は、今の時代から考えると別の世界を生きていたとしか言いようがない。

ただ、ぼくの心に残った記載は、日本が第二次世界大戦で敗戦した後、新宿の歌舞伎町は復興のために、滞在している米軍向けの売春宿を設立し、全国から働ける女性を募った。いうまでもなく明日の食糧にも困っている状態が国中に広がっていた。子供さえ、路上生活をしていた。そんな状況のため、お金のため、生活のために体を売る女性が募った。ヤクザが警察の役割の一部まで請負、治安が守られていた。何が正義で何が悪か曖昧な時代である。いまの繁華街の基盤となるエピソードで、これから明日香を相手にするべくにとっても、この本をピックアップしてこの場所においた人にとっても、複雑な心境にさせられる。あるいは、生活のため、お金のためと割り切り、仕事として体をささげれば、ぼくの思っているよりも

厳しい心境ではないのかもしれない。

ぼくは呼ばれると、本棚に戻し案内に従った。個室でたばこを吸って待っていると明日香が入ってきた。

「また来てくれたのね。嬉しい」

「来ちゃったよ」

二人で笑い合っていると、明日香はタイマーをセットし、事務的に浴槽にお湯を入れて、着るていた服を脱ごうとした。ぼくは明日香が下着姿から全裸になる前に静止した。

「今日はヌクためにきたんじゃないんだ」

「えっ、そうなの？」

予想外のことで、明日香は呆然と立ちつくしていた。びっくりした表情が固まっていた。ぼくはそんな表情をみて好感をもった。過酷な仕事はしているけれど、本当はぼくより幾分年下の女性なのだ。

「じゃあ、今日は何しにここえきたの？」

「話があってね。じっとしてしないで座ろう」

浴槽に注がれるお湯が流れる音だけが個室を包んだ。前に来た時よりも幾分室温が低いのか、湯気が蔓延し、霧の中に居るみたいだった。

「前に冒険したいって言っていたでしょ？」

「そうね、言った」

「で、小説の話もしたいって言っていたよね？」

「うん」

平静は保っているように見せかけているものの、ぼくの下半身の突起は、タイトジーンズに当たって痛かった。なんとか見つからないよう、体を傾けた。

「ぼくは今失業中なんだ。アルバイトもしてなければ何もしていない。すべてからっぽ」

「そうなんだ。じゃあ、ここに来ることもきついんじゃない？」

「気にしないでいいよ」

たばこを灰皿に押し付けた。湯気とたばこの煙が混ざりあっていた。

「それでさ。この機会を利用して、本気で冒険に行こうかと思っている。明日香を連れて、他の仲間も誘って」

表情が固まるのは本日二度目だ。リアクションを大事にする水商売にとっては、あまり好ましくない対応だろうと思いつつ、ぼくは明日香が人間的で普通の女の子であるということが再確認できて嬉しかった。

「わたしの話をちゃんと聞いてくれていたんだね。ここに来る客は

話よりもセックスをするのが目的だから、フルタイムを会話だけで良いなんて人は殆どいないよ」

「変わりものってことかぼくは」

「うん、相当ね」

笑顔になった明日香を見て、ぼくは複雑な気持ちになった。ぼくとセックスをしないで済むのであればそれに越したことはないと言いたげだ。気にしないようにした。浴槽のお湯を止めると、明日香は振り返った。

「冒険ってどうするの？」

ぼくは則之に話した内容をそっくり説明した。ぼくが考えている話と明日香の言う冒険のフェーズが合っているかはわからない。ただ心の奥底から込み上げてきた計画を話すことで熱意が伝わればよいという自己中心的なものさえあった。

「長期休暇をもらうことになるよね。店が許してくれるかどうか」

「直に応えを出さなくてもいいよ。明日香には明日香の生活があるし、強制する権利もないから。ぼくは明日香がどうして冒険に出たかの理由も知らないし、それによって、ぼくの計画した冒険が明日香のためになるかもわからない。それでも来てほしいという願いはある」

考え込んでいた。応えは直に出ない様子だった。

「後で店長と相談してみるね」

「頼むよ。絶対この冒険には明日香が必要だと思うんだ。一応ぼくのメールアドレスを教えるから」

束になっている名刺の空欄に名前と携帯のアドレスを書き込んだ。

「智也っていうんだ。カッコ付けているようだけど、さっきから勃起しっぱなしよ」

「えっ、ばれていたの？」

「隠したつもり？こっちはプロよ」

明日香がそう言うのと二人で笑い合った。元気になった下半身を鎮静する行為をしてもいいよという明日香の善意も断り、ぼくは、前回明日香と会った直後に昔の彼女のことを思い出し、どのように付き合ったかを簡潔に話した。誰にも詳細に話したことがなかった。ぼくにとって清美との付き合い時間は特別だったからだ。何よりも集中して、最後はぼくのエゴによってそれぞれの道を選ぶようになった一年間は、二人だけの秘密を保っていたかった。

「わたしはその子と仲良くなれそう。冒険の仲間候補なんですよ？」

「ああ。別れてから会ってないけど」

「自信持ちなよ。自分の気持ちに正直に、時には勢いが大切よ。女の子はそういうのに弱かったりするから元カノだからって身構えていると、やりたいこと出来ないでしょ」

「ああ」

タイマー音が鳴った。明日香が立ちあがり、個室の電話で終了を告げた。ぼくも遅れて立ち上がった。

「考えて置くわ」

そういうと、明日香はキスをしてきた。舌を絡めない、さり気ないものだった。

武史とは、朝方に会う約束をした。しこたまアルコールを摂取した状態でも大丈夫かと心配した。特に問題ないと言い切る武史は心なしか元気がなかった。

残るは清美への連絡だった。はたしてぼくのことを覚えているのだろうか。

巷では、女の方が過去の恋愛から次に進む能力に長けていると聞く。現にぼくの経験上、彼氏に別れを告げられた女の子が一晩中涙を流し、二、三日すれば正常になっている話を良く聞いていた。男は別れを告げる側でも、告げられる側でもいつまでも後を引いてしまうパターンが多い。ぼくはそれらを心が繊細というよりも、単に自意識過剰な粘着体質であるのではないかと結論付けたい。客観的にみれば、別れてからの片方だけの思いは同情の余地がないぐらい醜いと思う。それが長期にわたってしまえば尚更だ。一途という美しい名を借りた意気地なしなのだ。自分から関係を断ったのだ。当たって砕けろだ。携帯メールに記載する。

〽久しぶりだね。というよりぼくの事を覚えているかな？

〽元気だったかな？ぼくは元気だよ。

〽突然のメールで悪いんだけど、明日の二三時に井の頭公園で会え

ないかな？

＜ぼくにとっては大切な話があります。

＜清美にとってはどうでも良い話になるかもしれないけど、聞いてくれると嬉しい。

＜返信待っています。

＜菅野智也

けっして長くもない内容を、ぼくは三十分も掛けて考えた。書いては消去し、別の内容にしては、最初の文書にする。あきらかにぼくの精神は、メールの一文を書くだけなのに不安定だ。これでは恋もした経験がない中学生だ。あるいは、言葉を覚えてたての子供のように悩んでいた。

十年ぶりでメールアドレスを変更している可能性もある。と思った瞬間メール受信があった。ボックスを開いてみると、このアドレスは現在使われておりません。といった内容だった。清美の番号をプッシュした。ワンコールも鳴らずに、

『お客様のお掛けになった電話番号は現在使われておりません』

といった女性の声が流れた。

中野のアパートを出発し、中央線の下りに乗り、吉祥寺を目指した。初めて清美と会って一緒に帰った道のり。あれから随分時間が経っているのに、電車の外装も、窓から見える風景も全く変わっていないかった。帰宅ラッシュ時間近くで、人の出入りが多く、ぼくの過去の回想は遮断された。

吉祥寺駅で降りると、商店街を通った。やがて住宅街へと入って行く。清美の住んでいたアパートは比較的駅から近かった。『＊＊

コーポ』と書かれた看板に、二階建ての決して新しくないアパートが顕在であることを確認すると、安堵した。外壁は依然のくすんだ色から綺麗に張り替えていた。アパートの隣の住宅とを隔てるブロック塀もそのままだ。ブロック塀の上には猫が足を折って丸くなっている。思わず動物と話せれば清美のことを聞けたのにと悔やんだ。

清美の住んでいた部屋は二階の角部屋だった。ドアの前に来てみると、表札に名前の記載がなかった。郵便受けには溢れる程の紙類が詰まっている。空は暗くなってきたのに部屋の電気が付いている様子がなかった。インターホンを押した。待っている時間が何倍にも長く感じた。反応はない。それでもあきらめられなかった。ぼくはさらに押した。部屋の中には音が響いていた。誰も居る様子がなくても、ぼくはしばらくそこを動けないでいた。十年間、ぼくの生活から離れていた場所。エキゾチックな部屋の内装を思い出す。清美と初めて寝たことも鮮明に蘇る。と思った時、見知らぬ声をかけられた。

「どうかしましたか？」

「あ、こちらに住んでいた人に用がありました」

あっけにとられていた五十代ぐらいのあばさんは、アパートの管理人だった。もしかすると、ぼくのことをストーカーと勘違いしているかもしれない。否、それは今のぼくを形容すがそう遠くはない表現だ。自分の意思とは裏腹に、人の判断基準には差分がある。あばさんは清美の居た部屋用のポストにある郵便物をごっそり取り出すと、後ろで手を組んだ。

「この部屋は長い間使われていないよ。私がたまに掃除するぐらいだから」

「使われていない」

自分に言い聞かせるようだった。気が遠くなりそうだった。この部屋は長い間使われていない。目を覚ませ。

「清美さんという方が以前住んでいたのですが？」

「清美さん？」

記憶の引き出しを必死に開けているおばさんの回答を待った。恋人の連絡を待つあまり、他のことを失念するように、苗字を言い忘れていた事実にも気が付かない程に。

「そう言えば、居ましたね。なんでも、詩とか絵本を書いていた女の子」

「はい。その清美さんです」

「でもかなり前に引っ越ししているけどね」

「どのぐらい前ででしょうか？」

「わかりません。何なら調べましょうか？」

「いえ、大丈夫です」

落胆は大きかった。ぼくのいない所でも世界は動いていく。会社と同じだ。

「どこへ引越したかは知りませんかね？」

「さあ、そこまでは聞いてないよ」

ため息が漏れた。ぼくは酷い顔をしていた。おばさんには悪気はないが、感情を抑えることができなかった。

「わかりました。お騒がせしました」

長居は無用だった。理想を大きく持ってしまった結果だ。

「もしよかったら、名前と電話番号を覚えておいてくれないかい？
もし戻ってくるようなことがあれば、連絡しますよ」

ぼくはおばさんの好意に甘えた。役に立つ可能性は限りなくゼロに近い。ただ、清美はぼくに友達存在を教えてはいない。親の居場所さえ知らないのだ。実家が北海道でも、沖縄でも、韓国でも不思議じゃない。少なくとも、誰かを頼りに探す方法はなさそうだ。

限りなくゼロに近い希望をおばさんに託し、清美の住んでいたアパートを後にした。

武史に合う前に少しでも寝ておく必要があった。物事は前に進んでいるようで、障害があれば、乗り越えられず立ち止まり、則之や明日香にもまだ応えをもらっていない。酷く疲れていた。テレビを付けると、ニュースで各企業の新卒採用取り消しが去年の八倍、派遣社員の相次ぐ解雇すべて過去最大で深刻化しているという報道だった。ぼくは社員での解雇だったが、単純に隠ぺいされているだけで、それらと同じ位深刻な状況になっていると思う。

市販の薬局で買った睡眠導入剤を適量の三倍、水で流し込んだ。ぼくは法律で許される最低限の薬物中毒者だ。

目覚ましは武史からの電話だった。酷く頭がぼんやりしていて、武史の言葉がまどろっこしく聞こえた。少し時間が経つと、ぼくの聴覚が覚醒していないのではなく、武史がひどく酔っ払っていることに気付いた。

中野から新宿へタクシーで向かうと、朝五時の繁華街は疲れて眠っていた。其処ら充にゴミが散乱し、人氣がなく外はまだ暗さが残っているのに、ネオンは省エネモードのようにまばらであった。ダウンジャケットでも肌寒かった。到着の五分前に電話がなって、場所を詳細に説明した。待ち合わせのコーヒーハウスに入ると、武史が俯いて待っていた。顔色が真っ青で背中を丸め、ソファにだらしなく腕を垂れている。ぼくが声を掛けると、右頬と左頬に紫色の痣があった。右瞼は腫れあがっている。

「いろんなところが痛い。話は巻きで頼む」

「どうしたんだ？」

「ああ、ケンカだよ。俺がボコられただけなんだけど」

武史は汚れたスーツだけは着替えて来たらしい。昨日元気がなかったのも、電話口で酔っ払っていたのも原因が明確になってきた。

「何をしたって言うんだ？」

「よくある話。人の女を取られたと思い込んでの恨みだよ」

「店にいるホストの客を横取りしたってこと？」

「それだったらこんな顔にならない」

ホストは顔が命とだけあって、武史のいるクラブでは喧嘩しても顔を狙わないという暗黙の了解があるらしい。

「じゃあ、一般客の男にやられた？」

「とびきり厄介な裏組織にな」

武史はここに来て五杯目のコーヒーを飲みほし、たばこに火を付けた。話では、武史へのプレゼントを含めやたら羽振りの良い客がいた。不況の世の中で勝ち組に所属している偉い人で、職業やその他プライベートな素性を明かさない不思議な存在であったという。

「やくざの女が、自分のシマで遊んでいるんだせ。そんなの隠しても直にばれる。俺はマスターがいなかったら殺されていて、どこかの海の一部になっていただろうぜ」

「警察には通報しないのか？」

「無理だ。そんなことすれば、あのクラブが潰れてしまう」

聞いただけでもぞっとする話だ。暴力ですべてを支配し、警察の目には触れない闇は身近に存在する。ひよっとすると、マスターは多額のお金ですべてを納めたのかもしれない。

「その顔では直に仕事できないでしょ。病院いかないのか？」

「今はそんな気分じゃない。ムカついても、誰にもぶつけられないしな」

とはいえ、武史の口調はだいぶ落ち着いていた。店を移動すべきか真剣に考えていた。武史はたて続けにたばこを吸った。ぼくはこんな状態で邪な考えではあるが、今がチャンスと言わんばかりに、旅の話をした。やはり、反応は則之と明日香と同質だった。受け入れるのには時間がかかる内容であることは十分承知の上だった。

「バンまで買ってしまうなんて、マジだな」

「当たり前だよ。今しかできないことだから」

切実であることは伝わった。ぼくが考えて旅をするという応えを出すまでに、かなりの時間がかかったが、判断力と行動力に長けた武史であれば、白黒の判断は直に付くはずだ。

「俺は次の場所を探すってことでどうだ？ 実は他の全く違う場所でホストやって見たかったんだ」

「全然いいよ。目的が明確で、それに尽き進めばいい」

「よし。じゃあいつ出発するんだ？」

「それはまだ決まってない。他の仲間達からの話次第になる」

「わかった。おれはいつでも準備万端だぜ」

そう言うと、全国で女の子に声をかけてやるぜと意気込んでいた。ぼくもその切り返しの早い前向きな態度に元気をもらった。そう、

ベクトルは違うにせよ、
ぼくも旅の目的は自分探しなのだ。

眠りによせて

全体的にぼやけていた。どこかのカウンターに見知らぬ男が隣に座っている。表情がまったくわからない。のっぺらぼうかもしれない。男が飲んでいるのはウーロン茶かもしれないし、ウィスキーかもしれない。ぼくの前にも同じものがあるが、飲んでみてもまったく味がない。木製の棚に並んでいる色とりどりの液体はカクテルよりの液体なのだろうか。これは恐らく夢のなかだ。

「君は失業したんだね。顔に自由だって書いてあるよ」

「まさか」

男は笑った。何に対して笑っているかはわからない。夢の中でも現実でも、人の笑い所は皆違う。

「では何かしているのかい？」

「ぼくは旅人になるんだ。車に乗り、時には船に乗り、歩いて登山もする。飛行機で当てもない場所にいくのも悪くない」

「ずいぶんと欲張りなんだな」

「ああ、旅のエッセーを書けばそこそこ売れるはずさ」

バーにカウボーイが入ってきた。やあと男に声をかけ、近くに座った。ぼくの前にはまったく気にしない様子だった。

「ここでは旅人なんて、会社員よりもいるよ。猫も犬も牛もやぎも

旅人さ」

「何か言いたげだな」

話を聞いているカウボーイは爆笑していた。爆笑されると余計にぼくは引いてしまった。何が面白いんだ。人の笑い所は皆違う。

「つまり、誰でもなれるってことさ。恥ずかしくて動物でさえいわない言葉だよ」

「動物はしゃべらないよ」

「ここでは喋るんだ。後で試してみるといいよ。それに、失業者といったほうがまだマシだ」

「ぼくが気に入らないのか？」

「そうは言っていない。君はここに來るのが初めてだから忠告しただけだ。そう、ここでは旅人なんぞ職業として、自信満々に言うものではない」

「覚えておく」

戦争が起るとすれば、こんな些細なやり取りが起爆剤になるのかもしれない。男は茶色の液体をゆっくりと飲んで、カウンターに両肘を付いた。時間が経つにつれ、回りが見えてくる。カウボーイはしゃがれたブルースシンガーのような声で話し始めた。

「おいらは数年前から、すべての始まりという場所から來た。数十年後はすべての終わりという場所に辿り着くだろう。様々な仕事に

就いた。旅の途中で死にかけたことだってある。知っているかい。死神は自分の心の奥から現れるんだ。視覚として見える奴は想像力に長けているか、自分に霊能力が備わっていると信じている純粋な心をもつものだ。実際は死神なぞ目に見えるものではないし、ピートニク小説に出てくるジャンキーが見た幻覚みたいに幻想的なものでもない。わかりやすく言えば人間の本性なのだろう。脳が命令したペルソナに過ぎない。ささやいてこう言うんだ。お前は生きるか死ぬかの選択をしなければならぬ。死ぬ方を選択するならば、死ぬ準備をしておくことだ。」と

カウボーイは話に夢中だった。表情豊かになり、言葉に大げさな起伏を付けた。男は話を聞く態勢になり、薄茶色の液体を飲みほした。

「死ぬ準備？」

「面白いだろ。そんな状況で何を準備できるってんだ。遺書なんて書いている余裕があったら、死にかけているとは言えない。おいらはその矛盾と、問いについて考え、応えを知るまでは生きてやると思った。死神に喧嘩を売った。そこで消えたよ」

「そんな状況とはどんなものだったの？」

「これだよ」

カウボーイはジーンズを捲りあげると、金属製の義足を見せた。義足を本棚から本を抜きとる作業のように、軽々と外すと、右足の膝の皿から下はなかった。

「もちろん、足を切断して、痛みで死にそうってことじゃねえ。広

大な森の中を、馬をひき連れて歩いていた。大量の雨がダイヤモンドダストに変わっちまうぐらい寒い。馬は氷付いた地面で足に傷を負って歩くこともままならない。おいらの足も痺れてきて、感覚がなくなり、動かなくなつた。そこへきて狼の群れの登場さ。馬は骨しか残らない姿まで食いまくられ、その間に仕留めされなかつた一匹の狼に足を食われちまつた。野生の狼はバイ菌の宝庫だ。最後の狼をナイフでカットすると、俺の足もカットした。低温の環境でおいらの切断面からは血がほとんどでなかつたのが救いだな。後は想像を絶する痛みと戦うだけだ。不思議なことに、無いはずの足が痒かったりする。義足のつま先をドアにぶつけて身悶えることだってあるんだ」

「その後はどうなつたの？」

「物語るほどおもしろものじゃない」

五体の内に欠けているものがあるとすれば、どのように生活が変わるのか。恐らくは不自由な生活になる。ぼくは同情していた。

「これも捨てたもんじゃないぜおいらは女も抱けるし、歩ける、旅もできれば、見えなかつたものが見えてくる」

「見えなかつたものとは？」

カウボーイは話過ぎたと思つたのか、急に口を閉ざした。ぼくの問いかけは良く無視されるようだ。カウボーイは袋から肉の塊を取り出し、ナイフを使って器用に食していた。男はぼくの方に向きなおした。

「どうだい。カウボーイは命がけで旅をしている。それでも旅をしてエッセーを書いて、人からお金をもらい、印税で生活していこう

という気にもなるのかい？」

「わかったよ。あんたの言いたいことは」

どこからか、キッスの『ベス』が流れてきた。ジュークボックスは見当たらなかった。自然が生んだ風が、サウンドとして奏でているようだ。カウボーイはクリーブランドで捕れた柿を注文した。マスターはどこにもいない。

「君はどこから来たのかな？」

考えた。ぼくのアパートの住所を言ったところで、知っているわけがない。

「さあ、強いていうなら、寝た人間の心から」

「ずいぶん遠くから来たんだね」

「それよりもここはどこ？　アメリカのような気がするけど」

「どこでもないさ」

あまりにもシュール過ぎた。知らないことが多すぎる。ぼくは質問しかできない人間になってしまいそうだ。

「どういうこと？」

「地名もなければ、地図にも載っていない。そんなバーだ。マスターには悪いが、忘れられた場所」

「よくわからない」

「理解しなくていい。ハイウェイの休憩所だと思えば気が楽になる」

ハイウェイの休憩所に酒を飲ます場所があるとは思えないが、夢の中では判断力が欠けていた。ぼくは確かに納得していた。

「さて、俺は行こうかな。マスター、この男にデビットボウイの『アンダープレッシャー』を送ってくれ」

ベースの前奏が始まると、男は立ち去っていった。何回見渡してもマスターはいない。夢であることを意識しつつ、自分が作り上げたものがこの場所だと判断し、ぼくは海外のどこに強い思があるかを考えた。カウボーイは拳銃を取り出し、ぼくの方へ銃口を向けた。バンという音が声だったのか、実際の銃の音だったのかわからない。

ぼくは寝汗をたっぷりかいて起きた。寝ている間にスタンガンを当てられ、無理やり起こされたみたいに飛び起き、上半身だけおこなっている状態だ。夢の中では、夢であると認識していたのに、いざ起きてみると、夢かとほっとしている自分がいた。まさか、夢のなかでも説教されるとは思わなかった。強迫観念が形を変えて縛る。ぼくは最近、どこかの場所でうたた寝している時も、勝手に飛び起きてしまう。本当に自由なのだろうか。

体を動かすまでに時間がかかった。怠け者のレッテルが板についていた。ようやく布団から起きだすと、水道水をガラスのコップに貯めると、一気にのみ干した。金属混じりの味でさえ美味しいと感じた。

携帯電話をチェックし着信、新着メールなし。パソコンのメール

を開く。則之からのメールが届いていた。

∨ あれから考えたんだけど、僕も旅に参加させてもらうよ。

∨ アルバイトなんて、一やらなくても、旅の途中でもパソコンがあればやれるしね。

∨ 智也の仲間がどんな人かはわからないけど、仲良くなるよう努力する。

∨ ナビがなくても、道ぐらいなら調べられるからさ。

∨

∨ 僕は完全にデジタル人間になっていたけど、アナログな部分もこの旅で身につけたい。

∨ 論理だけではなく、人間見をね。

∨ 僕は生まれてから女の子と付き合ったことがない。

∨ 女の子とキスをしたこともなければ手をにぎったこともない。

∨ ABCはすべてない。

∨ 今後は彼女をつくっていろんなところへ行きたい。

∨ そして童貞を卒業したい。

∨ 詳細の日程が決まったら連絡してね。

∨ ではこれから寝ます。では

突っ込みどころ満載の内容であったが、則之には則之の世界がある。三十歳まで童貞を守っていようが、朝十時に寝ようが、自分の感覚だけで話を進めるとうまく行かないことだってある。ぼくは賛同してくれただけでも嬉しいと感じた。

それから二日後、明日香から連絡があった。実際の声と携帯で聞く声にギャップを感じたぼくは、知らない女の子からの電話だと勘違いしていた。返事は一緒に来てくれるだった。控え目な感謝の気持ち伝えると、もっと嬉しそうにしてよねと、冷めたリアクションをして来た。旅に出るきっかけになったのは、口説いてきたO・

Hというイニシャルの客を必至にかわし、かわし切れなくなった時点で、O・Hがストーキングしてきたことから不眠症となったことだ。O・Hは明日香が自分のことを好きなのに、正直になれない態度を見ると、さらにエスカレートして来たらしい。知り合いの男を彼氏代わりにしても、全然効力がなかったという。警察に連絡した時は心底疲れてしまっていて、仕事のやる気は失われた。そんな状況から逃げるための旅である。

ぼくは明日香からの連絡をトリガとし、旅に出る日程を考えた。皆の置かれている状況や気持ちが高ぶっている間に出発する必要があった。昼過ぎにアウトドア専用のショップで寝袋五人分と、大きな鍋、万能ナイフにキャンプ用の組み立ての簡単なテント二つを購入した。スーパードで1・5リットルの水5本とゴミ袋、割りばしに紙コップ、紙皿等。バンの荷台にはまだ余裕がある。後は個々に必要な荷物を格納するスペースとして、なるべく旅先で必要なものを購入し、余分な荷物は持つて行くことを避けた。書店によって五冊程の小説を購入した。各地のガイドブックと地図は迷った挙げ句に購入しなかった。この旅は行き当たりばったりのスリルぐらいはなにとつまらないと思ったのだ。

道具を買いそろえると、いくつかの条件を課すつもりだった。携帯のメールを機動すると、思いついた項目を記載した。

一、旅に使う賃金は、一人三十万円まで。お金を持っている人におごって貰うのを避けるためでもあるし、決して贅沢はできない。毎日ホテルに泊まってしまえば、一か月何もできなくなる金額でもある。

二、行先はその時になって決める。南の方向を目指してただひたすら進んで行くのが良いと考えているだけだ。

三、自由行動を取っても良いが、例えば二日間、静岡に滞在する場合、二日後には大阪といった行動をとる。進むべき道と時間を考慮して行動する。但し、行先は不明であるので、なるべく自由行動はとらないことが望ましい。

四、一か月間は必ず旅を続ける。皆というより自分に課するのが目的。

五、皆仲良く。一番大事である。人の心を読むのは難しいが、人の心を踏みにじるような言葉を言わない、喧嘩はしない。

夜の九時に、メールで武史、明日香、則之それぞれにばら撒いた。出発は一月三〇日、明日の九時。今から二四時間後、東京駅八重洲北口集合。寝袋は用意しているので持つてくる必要なし。ぼくは準備を完了し、やることなくすると、小説を開いた。

冒険、ファンタジー、旅への前夜

小説の舞台から離れてうとうとしていた時に、携帯が鳴った。夜中の十一時を回った時だった。知らない番号であり気分が乗らなかったもので、ハコール目が出た。

「もしもし」

「『**コーポ』の管理人です。清美さんの話なのですが」

睡魔は飛んだ。どんなに眠い朝でも起きる自信はあった。ぼく自身の心臓の鼓動が聞こえて来た。心臓の鼓動で体全体が脈動している。寝ことがついていたからだを機敏に起こし、電話を握っている手に力が入った。

「はい。どうしましたか？」

間があった。近くにあったメモ帳とボールペンを開いた手で取ると、次の言葉を余すことなく記載する取材陣となった。荒くなりがちの息使いだけは必死で抑え、息苦しさを感じた。

「本人が今部屋にいますので来てください」

「えっ？ 帰ってきたということでしょうか？ 電話代わってくれませんか？」

「嫌、本人が来てくれとのことですよ」

会話がかみ合いそうになかった。ぼくはこの時点で最良の言葉を

探していると、

「今使っていない部屋ですから、一日ぐらいならお貸しますから、後はお願いしますね」

ちょっと待ってと言っている間に電話を切られてしまった。関わりたくない態度が呂鄭していた。ぼくは落ち着いて言葉を反芻した。これから来てほしい。

購入したバンで行くことは諦めた。カーナビも地図もなく、土地感もないぼくはどこぐらいかかるかわからない。この時間だと、吉祥寺までの電車の本数も限られてくる。終電を考えると、ほぼ話している時間はない。行くべきか考えるまでもなく、ぼくは部屋を出た。電車の中で十年前の清美を思い浮かべた。写真さえ残っていないのに、はつきりと思い出せた。声も、しぐさも、趣味も、体も。目を詰みれば浮かんできってしまうと、体が震えだしてしまうぐらい落ち着かなかった。深呼吸して指の関節を鳴らすし、窓に映る自分の姿を見た。ぼくはあの時から変わっていないのだろうか。会った途端に幻滅されないぐらいの人間になっているだろうか。

十一時四十五分に『＊＊コーポ』へ付いた。清美の部屋だった場所に、薄明かりが付いていた。前に来た時はなかったカーテンは、真っ黒なものだった。

インターホンを鳴らす。ぼくの不安はもう好奇心に変わっていた。無言ではあるが、足音が玄関に近付いている。音が止まり、静寂になると鍵が開いた。

「久しぶりだね」

ぼくも同じ言葉を返すと、清美を見つめた。化粧が上手くなり、元々突起が少なかった顔のパーツが、年齢を重ねることにより、脂肪が減少し、際立つようだった。髪の毛を明るい茶色に染めていて、全体的に痩せたようで、着ている民族衣装のような姿はとてもエキゾチックだった。清美は明らかに綺麗になっていた。

「元気だった？」

「うん、元気だったよ」

「一度ここに来てくれたんだよね？」

「うん、電話とか通じなかったから」

ぼくは寒さで体を震わすと、何もないけど言いつつ、清美は部屋に入ろうかと誘った。部屋の中は家具と呼べるものが一切なく、無機質な白い空間だった。外から見た黒いカーテンは、紙でできていた。リフォーム仕立ての匂いが漂っている。

「私は誰でも部屋に入れるわけじゃないからね」

「うん。わかっている」

清美の口調ははっきりとしていて、十年前よりも早口になっているようだった。おっとりした印象が、キャリアウーマンへ変貌している。

「あまり変わらないね。優しい目は昔のまま」

「清美は綺麗になったね。なんだか、別人になったみたい」

思い切った素直な感想は受け入れられたようだ。昔のようにテレはないものの、ありがとうと喜んでいる表情はまったくの嫌味がなかった。恐らくは、綺麗だとか、かわいいと形容されることに慣れたのかもしれない。清美の変化は明らかに良い方向へ向かっていた。

「ちょっとした雑誌に出させてもらうこともあるし、化粧つけないままでは顔を出せないわ」

清美は詩と絵本で生活できるぐらいの、プロの作家になっていた。売れるまでには苦労があり、社会に適應することが何よりも挑戦であったと語る。入口よりも、なってから維持していく方が難しい。鮮烈された姿は、走り続ける清美の結果なのだ。昔にはなかった尊敬の念が湧きあがった。

「そうなんだ。清美も有名になったんだね」

「有名までは行かないよ。多作小給って感じだよ」

「多作小給って四字熟語なの？」

「違うの、私が今作っちゃった言葉」

笑顔の清美は、自然体だった。ぼくは十年前にタイムスリップした。

「清美は本名で本を出しているの？」

「ううん、ペンネームよ」

「そのペンネーム教えてくれるかな？」

清美は苦笑いをしていた。

「今度ね」

遠くへ行ってしまった気がした。ぼくたちが付き合っていた頃は、少なくともぼくはがあった隠し事、質問に答えてくれないことはなかった。普通に考えると、売文業の人は読者を増やす営業をするものだと考えていた。中年男性が飲み会の席で、現状に満足せず、昔は良かったとしみじみ語るような一般論だと思っていた。空白だった時間は果てしない。時間を取り戻すことは出来ない。上下を繰り返すぼくのバイオリズムは、清美を見て酷く子供染みていると感じた。

「智也君は今何しているの？」

社会に出て、技術職で電気製品の設計をしていることを説明し、現在は職を失っているオチを付けた。なるべくネガティブにならないように気を使った。

「大変なんだね、不況は」

「どうってことないよ。会社も生き残っていかなければならないからね。リストラの本来の意味は再構築だし、たまたま会社の今後の経営を考えた際に再構築でぼくがいらないことを選択しただけの話だよ」

「それでも、顔が生き生きしているし、むしろ、今を楽しんでいるように見える」

「ありがとうと言っていいのかな？」

もちろん、と言って笑顔になった。ぼくが会社をクビになって笑顔で受け入れてくれる女性は、恐らく日本を探してもほとんどいない筈だ。やはり来てよかったとぼくは心底から思った。

「努めていた頃はいろいろなことを学んだ気がする。ぼくの周りの皆はとても優しくかったし、平凡ではあるけれど、ニュースでやっているような黒い報道は別物として存在していたように思う」

「黒い報道って？」

我ながら良く分からない表現だった。質問されて当然だ。

「偽装とか、パワハラとかその他もろもろ」

「悪い人なんて、一握りしかないってことよね。そういう人が目立ち過ぎているだけなんだよ」

「ああ、社会はぼくが思っていた以上に心が広い。でもぼくの本質は十年前となんら変わっていない」

言ってしまった後悔した。後悔してもやめるわけにはいかない。

「どういうところが？」

「失業すれば、或いは失業先刻された時点で次の場所を確保して進んで行くのが社会人であるあり方なんだけど、ぼくには無い。妙に老成していて、もしかしたら燃え尽きてしまったのかもしれないけ

れど、背負っているものが何もないし、今という時間を楽しんでしまっているんだ」

すべての愚痴を吐いてしまいたかったが、武史だけで十分だと思いついた。愚痴を進んで聞ける人間はそれを楽しんでいる人だけだ。たいていは人を巻き込み、ひどく落ち込ませる。したくもない説教で諭すこととなる。今ここに居るのはそんなことを言いに来て、慰めてもらいのが目的ではない。

「自分のペースでやればいいよ」

「ありがとう。で何でぼくに再び会いに来たかは聞かないの？」

「順序があるでしょ。知りたいことを先に知ってしまえば、満足して他の肝心なことを聞き忘れてしまうかもしれない」

ぼくは頷くと、仲間とこれからやろうとしている話をした。先ほどの愚痴を挽回できればと思っていた。時間は零時を回っているから、旅の出発は今日になる。清実にとってはあまりにも無茶ぶりな話だ。

「面白そうね」

「皆面識がないから、面白いか、そうではないかは行ってみないとわからないけどね。でもぼくはきつと行くと思う。皆にとって大切な時間になるような気がするんだ」

「根拠がない自信なのね。そういうのって素敵」

「嬉しいよ。それは行くという返事取ってかまわない？」

「ええ、時間に融通の聴く仕事だから。どこでも仕事ができるのは強みでもあるの」

「おし、じゃあ、準備して」

「わかったわ。担当者に連絡はするけど、私もエントリーしておいてね」

思わず抱きしめそうになったが、握手に留めた。清美は新しい携帯の番号とメルアドを教えてくれた。静かな部屋に温かみが挿した。二人の間にはもう硬直した壁もない。清美は、今住んでいる新宿区に帰るといふと、タクシーを呼び、ぼくの中野のアパートまであいのりした。車中では聞いている音楽、呼んでいる小説、映画の話等をした。中野のアパートに着くと、ぼくはタクシーの姿が見えなくなっても立ち尽くし、たばこに火を付けた。もっと話をしていたいという思いを余韻として保存しておきたかった。

ぼくはなぜ清美が住んでいた部屋を訪れたかを聞かなかった。知りたいことを先に知ってしまえば、満足して他の肝心なことを聞き忘れてしまうかもしれない。まさにそのとおりだった。

放置していた携帯に三件の新着メールが届いていた。清美以外の仲間からだった。ぼくの条件に対し、賛成するという意見もあったが、文書の最後には必ずやる気のあるコメントで締めくくっていた。基本的には前向きな返事だった。ぼくはそのメールを見てモチベーションが上がった。いささか遅い時間ではあるが、二十四時間営業のガソリンスタンドで補給してタイヤの空気圧を全開にした。オイル交換時期は、後二か月は大丈夫。万全の準備が整うと、部屋で寛いだ。冷蔵庫から缶ビールを取り出しては飲み干した。社会に

出て初めて友達と呼べる仲間を得た気がした。深夜の二時近くだというのに返信をした。

運命共同体集う

シャワーを浴びて、体を念入りに洗うと、鏡で自分の顔を見た。広い額と、目の下のしわが気になりだしたものの、自分が描いていた三十歳には見えない顔だった。微笑んでみればさらに若く見えた。体を拭いてお気に入りの服に着替える。イタリア製の黒いロングコートに、紫のセーターに、グレーのタイトなズボン。半年切っていないセミロングの髪にワックスを付けて空気感を出す。乾燥肌に化粧水を叩きこんで、清涼感のある目薬で充血を完全に削除した。熱い杜仲茶を飲み、タバコに火を付けて、音のない部屋で時間を待った。

大きいサングラスを持ち、いくつかの靴から茶色のスニーカーを選んだ。

東京駅までの道のりが渋滞であっても他人事だった。七時には出発していたし、バンもこれから初めて長距離を走ると張り切っている気がした。ぼくは『グリーンデイ』のアルバムを掛けて、アップビートのノリで期待を増幅させた。街並みを隈なく見て、都会の景色を叩きこんだ。信号が赤に変わると見上げてビル群の階数を数えた。鮮烈され、無駄がなく、隙がなかった。街中を歩く人々も同質だった。高い目的を抱え込んで弱みを見せない人の心が見えてくる気がした。完璧な整備をされている道路をのんびり走って、遠回りをして、八重洲北口に着いたのは八時半であった。タクシীর群を旨くすり抜けると、則之が既に大きな荷物を持って待っていた。ロータリーには夜間長距離バスが立ち並び、目的地別にそれぞれ分かれたバス停に多くの人が並んでいた。それらの人達をよそに、則之の荷物を載せると、則之は三つ目の後部座席に乗り込んだ。荷物を格納する場所の空きスペースになるが、狭い場所の方が落ち着くとい

う。早くも則之はその場所が気に入ったらしく、手提げのバックにはノートパソコンが入っていて、バッテリーが五つもストックされていた。

「ずいぶん気合いが入っているね」

「ぼ、僕の役目はこれがないとね。後、このノートパソコンにはセンサーが入っている」

「何のため？」

「もちろん、車が盗まれたり、ノートパソコンが盗まれたりしても場所が分かるようにだよ。電源をシャットアウトしても、携帯から調べることが可能なようにプロットしてある。ネット上からもアクセス可能なんだ」

「へえ、すごいな」

則之は、貧乏ゆすりはしているものの、顔は明るかった。不安よりも期待が優っている良い表情だった。手入れされていなかった髪の毛を清潔にし、小奇麗な服装になっている姿は好感が持てた。則之も着飾れば普通の人波になる。

次に現れたのは武史と明日香だった。二人は駅内から並んで歩いていて、前からの知り合いのように親しく歩いてきた。話を聞くと、武史が待っていた明日香に声をかけ、話をしていくうちに実は同じ旅に出ることがわかったらしい。武史はやたら荷物の量が少なく、ポストンバックを持ち、ブーツにタイトジーンズを入れ、ファアの付いたダウンジャケットを着込んでいる。いつもの武史の服装からすれば、ラフな感じた。明日香はスニーカーを引いている。白い

コートに赤のスカート、厚底のブーツだった。初めて私服を見るこ
とが新鮮で、体のラインが綺麗だと再確認した。二人は則之によろ
しくと挨拶をすると、前から二番目に仲良く座り、会話に熱中して
いた。

九時を五分程過ぎると、清美が現れた。スポーティーなバックを
持ち、手にはキャンパスノートを持っていた。エスニックなガラの
スカートにダッフルコートを合わせていた。ぼく達は清美に向けて
手をふった。

「遅れてごめんなさい」

「いいよいいよ、早く乗って」

武史は軽快な足取りで清美の荷物を入れる手伝いをした。心なし
か、明日香が嫉妬しているように見えた。ぼくは呆れつつも、笑顔
だった。清美を助手席に乗せると、車のサイドブレーキを解除した。

「それでは皆さん行きますか!」

「おう、出発進行」

リハーサルを終えた後のコーラス部隊のようにハモると、東京駅
を出発した。車内では軽い自己紹介を済ませると、第一の目的地を
横浜に設定した。

「ねえねえ、清美ちゃんて、智也の昔の彼女なんですよ?」

明日香が興味深々に質問してきた。バックミラーから見える武史
も、品がないぐらいニヤニヤしている。清美は言葉を窮しているよ

うだった。

「まあね、そうだけど？」

「照れている、かわいい」

「智也先輩、いい趣味しているよ」

ぼくたちは年下の連中にからかわれていると思って、悪い気持ちではなかった。まんざらではないと思っっているのはぼくだけかもしれないが、胸の高鳴りが、すべてを前向きに変えてくれる。

「そんな二人もさっき初めて合ったとは思えないけどな」

「俺、明日香の店知っているしね」

「わたしも武史がいるクラブには行ったことあるの。お互い指名はしていなかったから面識はないけどね」

「でも同業者と同じでしょ」

イエーイと言ってハイタッチ。やはり、人を相手にしたプロの売人のノリは人見知りという垣根を簡単に破壊してしまうらしい。二人共自分は馬鹿だと認め、それが悪いかという認識も持ち合わせているから、潔かった。気がかりなのは則之だった。空間から取り残されている状況は否めない。だが、考えるのはやめた。ここは合コンでもなければ、接待でもない。一か月間運命共同体として一緒に過ごす仲間達が集う場所なのだ。話をしたい時にしゃべればいいのだ。武史にも明日香にもわかっていないはずだ。

夜の街頭が通り過ぎては現れる。神奈川県看板が見えた。高速を使わなくても、不思議と渋滞がなく、時間はかからないのだ。

「海が見えてきた。テンション上がるぜ」

「塩の匂いがしてくるね」

清美がそう言うと、みなとみらいで車を止めた。観覧車やランドマークタワーが発する光、海と、横浜港、それぞれの景色を堪能すると、山下公園を歩いた。ベンチには数えきれる程のカップルが仲良く座っていた。こうしてぼくを含めた五人で並ぶと、夢のようなことをしているとと思った。そこら辺のカップルよりも楽しんでいると思った。ぼくはこれから絶対できないと思っていた経験をしている。本来ぼくは時が過ぎてからしばらく後になって思い出し、素晴らしい経験だったことを思い出す感性を持っているが故に、今の瞬間を味わい、心底から楽しんでいる自分に驚きだった。武史と明日香の発する香水が、絶妙なミックスをして香ってきた。

豪華客船マリnlージュ乗り場近くのベンチに座ると、それぞれの好みで、自動販売機で飲み物を購入した。

「僕はこんな綺麗な景色を見たのは久しぶり、い、いや初めてかもしれない」

言いすぎだとは思わなかった。同じ景色を見ても、一緒に見た人間でだいぶ違ってくるのだ。則之は嘘を言っていない。

「おっ、いきなり旅の閉めみたいな言葉を言うね、則之先輩」

「ほ、本当だよ。僕は長い間引きこもりをしていたから、外に出て、

景色を見るのがこんなに感動するなんて思ってもみなかった」

「俺も同じことを考えていた。気が合いそうだな」

明日香も清美もほほえましく二人のやり取りと景色を見ていた。ぼくは学生時代の頃、初めて横浜に来た時に、有名な建造物を見るたび驚いていた。もちろん、東京の高層ビルと人の多さに驚いた感覚と同質だった。新鮮という感覚は、ぼくのような、陳腐な感性を持っている人でも共通に持ち合わせている。国を統べる政治家であっても、昔はいろんな場所に感動したはずだ。

清美はデジタルカメラを取り出すと、何枚か景色を映し、仲間での記念撮影をした。通行人がほとんどいないので、皆の中で一番リーチのある武史が右手で持ち、皆が顔を寄せ合って撮影した。

さらに、清美はお弁当を持ってきたと告げると、手さげバックからおにぎりとかから揚げが入った容器を取り出した。五個のおにぎりをそれぞれ取り出すと口に入れた。ごはんは味付けはないものの、韓国ノリと具の鮭の塩見で十分な主張があった。取りのから揚げは、香ばしく、作りたてのような質感があった。

「清美さんは料理がうまいんだな」

「誰にも作れるものだよ」

武史に褒められると、清美はまんざらでもなさそうだ。同調して他の三人も清美の料理を賛美した。

「そんなことないよ。今まで食ってきたおにぎりでベスト三に入る」

「それは余計でないかい？ 一番美味しいって言ってあげなさい」

明日香が突っ込みを入れる。ぼくは一日なにも口にしていないことに気が付いた。簡単な料理にちよつとした工夫と味付けで他の料理も作れると思わせるのはぼくも同じ意見だった。ちよつとした心遣いが、相手の心を掴むきっかけになる。

清美の料理を食して、元気になると、バンに戻った。夜の闇に溶け込んでいる黒いバンを観察していると、四人とも旅の為に購入したバンの代金を出すと言ったが、ぼくは気持だけもらっておいた。

あらゆるものに感動した後に、刑事ドラマのロケをやっているような大黒ふ頭を過ぎると、静岡を目指した。確かここから百キロぐらいだと認識していたが、どうでもよくなった。いくつもの交差点を過ぎても時間のことは忘れていた。

速度の遅いレッカー車も、追い越しを掛けてくる走り屋にも腹が立たなかった。

旅は旨くいきそうだという予感だけ漂った。

海沿いを走っている、過ぎていく景色、まったく違う世界にこれから行くという高揚感があった。

それぞれの思い

車内では様々なジャンルの音楽が流れた。武史はユーロビートのノリが良い音楽を、明日香はジャパニーズポップスのオリコンチャートに載っている音楽を、則之はゲームの有名なRPGの音楽を、清美はクラシックの落ち着く音楽をメインにCDを持ってきていた。ぼくはビートがあるバンドであるが故に、好みが様々だった。

仲間を乗せたバンが、静岡に入った時は則之のドラゴンクエスト3のオーケストラ版が流れていた。ソフトの開発性能から、オーケストラの音楽をそのままゲームに再現できない時代のものであったが、こうして多数の楽器をアンサンブルされた音楽を聴くと、その時代を思い出す。

夜の富士山は圧倒的な存在感があり、ぼく達は、登山したことがあるといった類の話で盛り上がっていた。

海沿いの道から外れ、茶畑一色の風景が広がると、まるでぼくたち以外の人間は誰もいないといった錯覚さえしてしまう。時刻は既に零時を回っていた。蛇行が続いている山道を進んで行き、川が現れ、キャンプ地があった。

ぼくたちは幾分もめた結果キャンプ地に車を止めた。何台かの車が駐車上に止まっては居たが、川沿いのキャンプ場には人気がなかった。テントを張って火を起こした。生憎食糧は全く購入しなかったものの、インスタントコーヒーだけでも文句はなく、五人とも火の周りを囲んだ。火が弱まってくれば、近くに落ちている木片を燃料にした。ぼくはコーヒーを啜りながら、たばこに火を付けた。

「何だか、本当に冒険しに来たって感じがする」

明日香はメンソールに火を見つめながら言った。

「これからさ、冒険は。楽しもうぜ」

武史は笑顔でそう言うと、女の子に寒くないかと気を遣っていた。暖冬とは言え、山奥の気温は想像以上に低かった。

「でもよく皆こうやって集まったね」

「智也の召集指令があったから当然だろ」

「ぼくが無理やり連れて来たみたいじゃん」

「違うの？ 則之先生」

「ぼ、僕は自主的に参加したよ」

則之は急に話を振られてドギマギしていた。武史の早い会話のテンポに着いていこうとしている則之は健気だった。

「理由とか目的ってあるの？」

そういうと、武史は自分から話し始めた。顔の傷は癒えたものの、紫色の痣はまだ残っていた。もう過去にあったもめ事に関して恨みはなく、よくある話だと説明した。前向きに全国を視野にいたった営業をすると言った。東京とは違った土地で、どのように考え方が違いなのか。街で声を掛け、どのような反応をするのか。自分の会話は通用するのか。を探索し、地元の営業でのホストを武器にするの

ではなく、男として勝負する。女性陣は、最初ホストという職業に對して抵抗があったものの、前向きで、将来のことも考えて行動する予定の武史を応援する姿勢へと変化した。ぼくも会話のプロという固定概念を捨てて武史を見直した。ナンパはコミュニケーションの能力を向上させる手段だとまとめた。

「勇気がいりそうだね？」

則之は未知の對話手段に興味を持った。

「最初だけだよ」

と武史は答えた。ハードルは決して高くないんだとさとし、今度やってみるかと言った。

「困っているじゃない。則之を引きずり込まなくていいの」

則之の姉さん代わりとなった明日香は、あきれていた。ぼくと清美は曖昧に笑っていた。

「ていうか、則之はどうなの？」

則之は咳ばらいをすると、話始めた。

「僕はいじめがきっかけで対人恐怖症になった。人を信じられない、人とともに話せないとなると、仲間を作るなんて夢のような話だよ。テレビでやっていた番組で、現代の若者を見た評論家は、今の世代はパソコンとか自分一人で楽しめる遊びが増えたこともあって、対人ストレスに弱くなっているんだって。必要以上に繊細な僕は、普通の人以上に影響を受け、引きこもりになるのが必然だった。

機器は大概僕を裏切らないから、のめり込んでいった」

則之は乾燥した喉をコーヒーで潤した。

「性格もひねくれていたから、僕が悪いのではなく、回りが悪いんだと、旨くいかない生活をすべて何かのせいにしていた。例えば、いじめをする奴は、人の気持ちなんかわからない。僕に与えた攻撃を覚えていなくても、僕はいつまでも覚えている。結局は、今を楽しめなければ、どこに行っても同じだって思ったし、悪い状況は自分から発信しているのだと気が付いた。一時期は薬に頼っていたものの、そんなものでは改善しないんだ。気休めにしかない。それで、三十歳にもなってやっと行動しようと思った。そろそろそんな自分を変えたいと思った時に、智也から誘いがあったんだ」

則之は、それ以上語らなかった。どもりもなく、素直に心を開いていた。

「変えられると思うよ」

清美が自然な表情で笑っていた。

「……そうかな」

「うん、それだけの話を私達にして、これから頑張ろうって思えば大丈夫」

「そうそう、俺も手伝ってやるから」

「あ、ありがとう皆」

「純なのね。羨ましい」

明日香はそう言うと、長い間を起き、皆を見渡し、再び火の中心を見つめた。

「わたしさ、こうやって家族とか、皆に言いずらい仕事をしているけど、十代の頃は普通の女の子だったんだ。グレていたわけでもなく、勉強して大学行こうと真剣に考えていたし」

木片が炎によって割れる音が鳴り響いた。

「でもね、心が弱かったのね。親からのプレッシャーにはギリギリ絶えて居たんだけど、当時付き合い始めた彼氏が遊び人だった。わたしにを大切にしてくれるかと思えば、将来のことに關しては心配してくれず、まじめに向き合っていたわたしがうざくなっていた。別れる危機になった時に、ぶっちゃけ重いと言われた後は何度も泣いた。そんな時に道を踏み外すのって簡単なんだよね。理想の女になろうと必至になって、自分のやりたいことに嘘を付くようになった。彼氏は多額のお金を貸してくれというし、ウェイターのバイトから、紹介してもらったキャバクラに変更した。とは言っても、おじさんに愛想を振りまくことが出来なかったし、お酒も強くなって、客の指名がなかなか取れなかった。結局風俗に行くことになった。彼氏はわたしが状況について相談すると、親身になって聞いているふりをして、根拠のない理由を適当にでっち上げて、私に仕事を続けるよう勧めていたの」

武史は最低の男だなと言った。

「今思えばね。でも、わたしには彼氏を変える力がなかった。それに、その頃のわたしには気が付かなかったの。風俗も仕事と割り切

れば、問題なくこなせるし、続けていけば、止めた後に収入を落とす方が怖くなって、結局止められない状態になっていたわ。でもね、心の中では何処かに逃げて、もう一度やり直したいと思っていた。実際その時の彼氏に似た性格の人と付き合っては、旨く行かなかった。気になる人にもわたしの職業を言えない。こんな生活が続けば、わたしはおばさんになっていて、体を売る価値もなくなってクビになって、最後には誰にも相手にされなくなってしまふ。そんなことばかり思うようになった」

親身になって聞いていた四人は、明日香が今年で二十六歳になると知った。武史よりも一つ下の女の子は、男の隠れた欲望を体全体で味わって、自分を元の生活に戻そうとしている。ぼくの価値観からすれば、二十六歳という年齢はまだ若いと感じるが、背負ってきた人生から考えると、ぼくより多くの苦悩を味わってきたに違いない。それは幼い精神と老婆心を同居させる。

「変な客に捕まって嫌になっちゃってさ」

「過酷な仕事だよね」

清美は言った。明日香は涙目になって頷いた。女の子同志でしかわからない同調だった。

「何だかしんみりさせちゃったね。わたしも過去のことを面白く話せるようになりたいな」

「い、いや、本当の話が聞けてよかったよ」

則之は本心を言った。バーチャルな世界の女の子に触れている則之にとっては、女の子が胸の内を真剣に話している姿に感動し、内

容は関係なかった。不器用ではあるものの、則之がそういうと、明日香はありがとうといった。武史は自分の出る幕はないなと悟ると、たばこに火を付けた。ぼくも二人のやり取りを微笑ましく見ていた。

「清美はどんな理由があるの？」

明日香がそう言うのと、清美は頷いた。何かを決意してから話し始める表情だ。清美は武史が話始めた時から、メモ帳に筆を走らせていた。メモ帳を膝の上に置いた。

「私は詩や絵本を書いて生活しているから、皆と一緒に旅できることがそのまま仕事につながるの」

ぼくは清美があっさり同行してくれると返事した時は、旅イコール仕事と考えていたから、改めて言葉として聞くと、すばらしい理由だと再確認した。

「これは表向きの話。私は則之君とは違って、うまく人間関係を形成していたつもりでも、実際は友達がいなかった。私だけ違う人間なのではないかと真剣に悩んでした。多くの人に共感と感動を与えられる職業なのに、そんなのでは、良い作品が生まれるはずがないと自己嫌悪になった。何作も書いていると、私一人のアイデアでは超えることが出来ない壁に当たったの。他の人に合わそうとするのだけれど、結果としては相手に踏み込んだ話が出来ない。世間話では詩や絵本は書けないから。話をネタにされるのが厭なのか、自分が踏み込んだ話をしないから相手も打ち明けないのか、あるいは他の理由があつてそうなるのか悩んでいた。少しずつではあるけれど、私も身の上話より踏み込んだ話をするようになり、今では人なみに付き合ひが出来るようになった。それは思っていた以上に楽しくて、学生時代に感じていた違和感がなかった。でも、人なみに付き合ひ

があり、話をしていると、詩として絵本として作品に残すモチベーションが下がっていることにも気が付いたの。話をしてしまえば満足してしまう。ちょうどスランプになった時期で、昔住んでいた吉祥寺のアパートを訪ねたの」

その後、ぼくと清美が再開するまでの経緯を二人で補足しつつ説明した。ぼくは皆に言ったことを、自分に言い聞かせるように、旅の目的を説明した。言葉として宣言すれば、目的を全うする活力にもなる。これから一緒に旅をする仲間達は、それぞれの話を吟味していた。寝た異性の数も、女の子を落とした数も、技術社員以上のスキルを持っている事も、作家である事も、年齢も性別も、すべて平等にだった。ぼくは失業者というレッテルも、短い間、無にできると信じ、会社生活で得たことを思い出した。

ぼくと武史、明日香と清美が分かれてテントを使用し、則之は窮屈という理由から、バンの車内で寝た。野外で寝たのは、何年ぶりかを考えていると、寝袋に入って、あおむけになった武史はささやいてきた。

「清美にはまだ未練があるか？」

「さあな。今は仲間だ」

「あいまいだな。未練あったら手助けするぜ」

「考えなくていいよ」

ぼくは嘘をついていなかった。十年間は、性格は変えられないものの、人の心を変化させるには十分な時間だった。再び会っても直に心が戻るほうが不自然だ。ぼくと清美の温度差はそれ程ないはず

だ。

「昔の女を誘うって、未練なければあまり聞かないだろ。ましてや一か月一緒に過ごすんだぜ」

「思い付きだったんだ。強いて言えば来てくれると思っていた」

「自身ありますな、先輩」

「シンクロニシティって言葉知っている？」

健史は考えた。二回言葉を繰り返した。

「類は友を呼ぶ的な意味じゃないの」

「意味は偶然の一致。ぼくはこの言葉を随分昔から知っていたけれど、現状を形容する時に使うとは思ってもみなかった」

「たとえばどんなことを？」

「ぼくが皆を誘って旅をすることになったけど、これが来年であれば成立しなかった」

「来年だったら、今よりも状況が違っていた」

「そう、今でなくてはならなかった。武史は別のホストクラブでプライベートを犠牲にしてまで勢力的に働いていたかもしれないし、明日香も違う人生を着実に歩み、則之は会社に入社してバリバリ働いていて、清美はスランプから脱し、新作を書いていたと思うとね」

「智也はどうだ？」

「ぼくはわからない。でも今より状況は決して良くなかったと思う」

「言われると、すごいことに思えてくるな」

「ああ、もう二度と経験できないよ」

ぼくがきっぱり言うのと、武史は考え込んだ。話を変え、武史の過去の恋愛話になった。恋多きという表現が正しい。それでいて、明日香や清美に伝えても恥ずかしくない内容ばかりだった。職業が幾多の恋に結び付いたのではなく、幾多の恋が職業として結びついていた。次の言葉を待っている間、寝息を立てていた。ぼくの出番はない。

過去の恋愛話を語るとすると、二十五歳以上からの話になる。清美と別れてからそれまでの期間に付き合った子の記憶は曖昧であり、何をして、何で喜んで、何で別れたかと聞かれると非常に困るくらいだ。

五年前に美佐子という女の子と付き合った。友達で紹介で始まって、東京ディズニールランドで恋人同士となった。二回会っただけで恋人同士になるのは、いささか短すぎる時間で友達から恋人になったけれど、それに対しての抵抗はなかった。凝縮された時間でお互いを確認し合い、なにもわからないまま恋人になった。生き急いでいる女の子という印象が強かった。

今考えれば、ぼくが古臭い人間の考えなのかもしれない。彼女は中学生の卒業アルバムに写っている自分の肥満体を必要以上に隠した。過去の汚点を隠蔽する犯罪者のようで、まるで浮気を巧妙に隠

すようだったけれども、五歳年下の美佐子は普通より幾分痩せていたし、身長も高いが、大部分の男がかわいいと形容する女の子だった。かわいい自分を自覚していた。加えて女の武器を器用に駆使し、過去には同時期に三人もの彼氏がいた記録もある。これからはその様なことはしないからという言葉は真実だと思い、ぼくが引き込まれていくのに時間はかからなかった。

美佐子は車が好きだったから、デートの半分は車内であって、車中でのセックスをする為に、誰もいない場所を良く模索した。ぼくが運転している最中、眠気を訴えると勃起した肉幹を口に含んで解消するような遊戯も彼女から教わった。仕事のせいにするのは得策ではないのだけれども、その頃は、会社に適応するのに必至で、残業もそこそこしていたので、毎日寝るまでの二時間電話、週三回程度のデート、相手の携帯をチェックはしないと行かず、隠れてのチェックはぼくにとって窒息だった。月六万円を超えた携帯電話の通話代を見た時は、真剣に電話会社へクレームを入れようか迷った。

美佐子からすれば、ぼくが一人暮らしで、お互い離れて生活をしてきたから、知らない女の子と遊んでいるのではないかという疑心があった。美佐子自身は過去にそういう経験があるからという意識と、趣味は誰かと居ることであり寂しがり屋だったから、病的な束縛となり、ぼくはそれに合わせていた。

自分の生活に嘘をついて旨くやれるほど、ぼくには体力も精神力も持続しない。遠まわしに理由を言っただけ、毎日寝るまでの電話を三十分にして、週三回程度のデートを週一回とし、携帯を参照する場合はパスワードセキュリティ機能を付けた。

後期になると、友達の意見も手伝って、彼女との付き合いに疑問を持つようになった。彼女について、本当に幸せになれるのだろうか。

もっとリラックスをして付き合えばよかったと思う。ぼくにとっては休日一人で過ごし、体を休める時間が必要になっていた。美佐子の持続力はぼくのはるかに上を行っていたから、疑心は相当なものだった。美佐子に他の男の影があってもおかしくはなかった。そして、そんなぼくからの愛情を感じなくなると、二人の中は急速に冷めた。笑顔で楽しそうに会話している裏には、拭いきれない闇があった。別れ話もなく、最後の美佐子からのメールはこうだった。

＼ひま人

彼女の生きている速度からすれば、ぼくは暇人という意味なのだろう。

美佐子と別れた一週間後に良子と付き合った。サイトでのメル友で知り合った子だった。美佐子と付き合っている時期も友達であり、友達期間が長く、最終的にも友達で終わってしまうのではと思っていた矢先だった。美佐子と比べると、外見的要素は劣るものの、落ち付いた子で服のセンスが良かった。安らぎを与えてくれた。流行りの癒し系にぴったりの女このだった。二歳年下の彼女は東北の生まれで、白人と間違えるぐらいの白い肌を持っていた。明るい髪色をキープしていたから、白い肌が際立った。職業が銀行員と知ったのは、付き合ってから半年が経っていた。

週一回のデートと一日一回のメールのやり取りは、空気のように心地よかった。東京の最新デートスポットを網羅して、ぼくの部屋か、ラブホテルでセックスをした。きめ細やかな肌は、潤滑剤だった。

お笑いのタレントが好きな良子は、テレビから面白い新人芸人を発掘してくると、ぼくに推めてきた。彼女自身、独特のセンスがあった。

ある日の日曜日、良子はぼくの部屋ですき焼きを作ってくれた。ぼくは、そうそうたる上司に向けて製品のデザインレビューがあり、落ち着きがなかった。

「今日の智也元気ないけど、調子悪いの？」

「明日会議があるんだけど緊張しているんだ」

好物の牛肉を前にしても緊張は解れなかった。器の小ささには閉口する。

「会議に参加する皆を牛だと思えばいいんだよ」

満面の笑みで良子は言った。

「いいかもね」

「これは上司のPさんだ。食っちゃえ」

良子はそういうと卵を溶いたぼくの受け皿に牛肉をたっぷりよそった。ぼくは頂きますと警戒に言って肉を食した。独特のセンスはともちャーミングだった。当日のデザインレビューは、それ程緊張していなかった。良子に救われていた。

細く長く付き合えることが出来て、二年近い年月を良子と過ごした。熱を帯びた恋愛ではなかったけれども、お互いの負担にはならない、癒される時間だった。後期に倦怠期を迎えるとぼくの方から距離を置きたいといい、月に一回の頻度でデートした。三か月後、良子から距離を置きたいと言うメールが届いた。

ぼく〓次に会えるのはいつになるかな？

良子〓一年後

ぼくは適当に生活して、良子の距離が縮まるのを待った。

二年後の今日まで一度も連絡はなかった。

目を瞑ると、意識を失うまでに時間はかからなかった。

すずめの鳴き声で起こされた時は、すっかり日が昇っていた。武史は鏡で髪の毛をセットしていた。だらしないところを見せられないという屈強な精神は、賛美しなくなった。武史は日常生活で不摂生を打破するためにスポーツジムで体を鍛え、エステで肌をケアしていた。

ぼくはテントを出て水道水で顔を洗い、タオルで体を拭き、歯磨きを終えると、皆起きて出発の準備をしていた。

太陽に当たった川の水は透明度が高く、気温が高ければ水浴びしたくなる程だ。則之はバンの車内でアルバイトをしていた。

過去からの手記その1

私がこの手記を残そうと決意したのは、ある不思議な経験と過去への償いを目的としたものである。結果論としては、自伝的なものになった。故に、論文を提出すべきと依頼されたわけでもなければ、反省文を提出すべきと依頼されたわけでもない。あくまで自主的な行動であり、恥ずかしい話、私は技術職だったが理由で（誤解が生じるといけないので補足すると、技術職でも沢山の本を書いている人物もいるわけだし、私の場合、自分の話をするこゝも、文書として表現することも極度に苦手という短所があるので技術職を選んだ）、満足に文書も書けないというのが正直な話だ。私は名前を曖昧にする手法を取る。

長い間、私だけの心に閉まっておいて、願わくば墓場まで持っていければ、どれほど他人に迷惑がかからないと思いついてはいた。しかし、私のこれからの人生で、新たな記憶に過去が塗り替えられ、これから記載する記憶が薄れていく、あるいは忘却してしまうのではないかと懸念し始めた。もちろん、償いと定義している時点で、私にとっては忘れるはずもないのではあるが、どうかこの手記を手にとった方には、至らない文書と割り切って頂き、最後まで読んで頂きたいと願っている。

記憶を遡ると、詳細の断片が抜け落ちることはやむ負えない。しかし、この手記の内容を詳細に記することで、私の体験した事実が、作りものではなく、真実であると信じて頂けると願い、出来る限り正確な話を記載したい。矛盾しているようではなるが、私の携わってきた仕事内容については、企業の秘密保持に関わるので、詳細には記載できないことを了承頂きたい。

私の半生から話しを始めたいと思う。

一九五八年の十二月に生まれた私は非常に穏やかな家庭に育ったと思っている。生活としても、大資産が存在したわけでもなければ、

極端に貧困でもない。ありふれた生活で、何不自由なく育てられたように思う。大学入学までは実家がある埼玉で過ごし、それから九州で過ごした。

小学生の頃は、野球をしていた。体を鍛えるという意識もなく、ただ楽しんでやっていた。集団でのチームワークを始めて学んだのは学校ではなく、野球であると断言出来る。それ程大切な経験だった。家ではプラモデルを作成するのが好きで、車のミニチュアモデルを完成させては、次の製品を購入するため、おこずかいが貯まるまで辛抱していた。私の将来携わる仕事に関連しているとは思わなかったけれども、本質はそこにあったのだと思う。まだテレビが普及していない時代であったので、母親の趣味だった音楽鑑賞として、レコードプレーヤからアルゼンチンタンゴだったり、観たことがない映画のサウンドトラックが流れていた。今でもいくつかの曲を思い出す事が出来る。

中学生の頃は、余った土地で実家を増築し、家族にとっても特大イベントだったように思う。完成した時は別の場所にいるような新鮮さがあった。その日に家族揃っての夕食で、チラシ寿司を食べたことも覚えている。家族旅行では伊豆の海にいつて、私ははしゃぎ過ぎて、波にさらわれて、鎖骨を骨折した。元気が有り余っていたから、野球に限らず、陸上の選手に選ばれたり、色んな場面で活躍していたと思う。勉強の方はそこそこであったものの、学校側が開催していた夏期講習に参加し、授業とは違った緊張感を味わえた。卒業式に学ランのボタンが無くなるまで後輩にあげた思い出は未だに昨日のような感覚で覚えている。

高校生になると、中学生でできなかった髪型に挑戦した。丸刈りだった私も、髪型を変えるだけでこんなにも雰囲気が変わるのかと驚いた。色気が付いたものの、奥手だった私はなかなか恋人が出来なかった。幸い、知り合いの女学生が私に告白してくれたから、初めての恋人と呼べる人が出来た。通信手段が不足し、車の免許もなく、行く場所といえど近場の公園かお互いの家だったけれども、お金が

なくとも恋人と楽しめた最後の期間だった。

ものがないから、無いなりに楽しみを見つけ会う。ものがあれば当たり前となり、それらに頼ってしまう。私と同年代の人間が古き良き時代と形容するのは、そのような概念があるからだと思う。受験シーズンとなると、勉強に励んでいた。私は数学と物理が得意であったから、公式を覚えては解いていくロジックに中毒していた。受験は難なく合格し、恋人とは男と女の関係に発展した。

大校生になると、世界が広がっていく様子が手に取るようにわかった。あらゆる場面で自分自身の選択が可能となったのは、初めて自立できたと実感した。今までにいなかった人格の人間がたくさんいたし、社会に出るまでの猶予期間が沢山あった。両親には多額の授業料を出してもらったことを感謝している。一人暮らしをするようになる、恋人とは遠距離となり、疎遠になってしまった。やがて今の妻と知り合うようになる、かつての恋人とはそれぞれの道を歩むようになった。

休息の中で

快晴の中、武史の運転で愛知県まで辿りついた。静岡では有名な名産店でウナギパイとお茶の葉を山ほど購入した。ウナギパイは夜のお仕事にいいんだと言った武史に明日香が過剰反応し、下ネタの連発だった。残りの二人は付いていけなかった。ぼくはあえて付いて行かなかった。則之がネットでホテルに予約を入れた。皆の疲労、携帯電話の充電等を考慮すると、誰も反対意見を言わなかった。清潔な生活に慣れている誰もが一日体を洗わないだけでもストレスになってしまう。

「もうすぐ名古屋だね」

地名が記載されている看板を見て、明日香が言った。

「名物ってあったっけ？」

ぼくは問いかけた後、地名から連想し、城と鳥だけが思い浮かんだ。

「名古屋と言えば、ホストクラブでしょ。俺、チェックインしたら街で営業かけるぜ」

「元気だな、武史は」

則之はすっかり武史とも打ち解け、名前で呼ぶようになった。郊外から市街に入った。ネオンが煌びやかになると、皆の気持ちは初めて都会に上京してきた学生のように、心に光が灯った。

一人一部屋のシングルルームは広くはないものの、ぼくは暖かいという安心感に満たされた。入室すると、早速ぼくはシャワーで体の隅々まで洗い、歯を磨いた。出来るだけ清潔にするよう心掛け、いつもより念入りになった。鏡には幾分疲れた表情が写っていた。ぼくの薄い髭だけはあえてカットしない。新しい服に着替えると、洗濯物をホテルの受付フロアに備え付けのコインランドリーで洗淨した。待っている間、購入しておいたポール・オースターの『偶然の音楽』を読んだ。

「智也も洗濯していたの」

明日香は、一日の洗濯量とは思えない程の衣類を二百円で洗濯した。ぼくは下着類をあまり見ないようにした。

「わたしは海外の作家は殆ど読まないんだけど、その本は面白い？」
「うん、この小説は大学に入った時に読んだから、再読になるけどね」

「気に入っているんだね。再読ってしないものよ」

「でもあの頃読んだ印象とだいぶ違う。今の状況にはまり過ぎている内容だし」

「冒険小説なの？」

ぼくはあらすじを説明した。広大なアメリカをワイルドに、時には文学的に旅をするナッシュには程遠いけれど、ぼくは数少ない共通点を話した。読み終わったら貸してあげようと思った。

「ねえ、わたしと智也がキスしたり、セックスした話って、皆にしているの？」

「していない。後で話そうか？」

「やめておいて。元カノの清美が聞いたら、きっと複雑になるわ」

言われて見ればそうだった。ぼくは時に、無神経になってしまう。見えているビジョンに力を注いでいると、細かいことに気がまわらず、最後には蔑にする癖があった。

「そうだね」

「なんか不思議なんだよね」

「何が？」

「わたしって贅沢な生活していたのに、こうして冒険に出ても全然大丈夫なんだよね。むしろ飯も必要以上に食べなくなったし、痩せられるかも」

「まだ二日目だよ姉さん」

明日香が微笑んでいる顔を見て、ぼくは冷ややかに突っ込みを入れた。

「高校の時、修学旅行とか、卒業旅行とか行ってなかったし、それ

のせいもあるわね。大人の汚い世界から抜け出せた気分」

「夢の中へ行って見たいと思いませんか？うふっふ」

明日香はわらっていなかった。ぼくは直に歌まねを止めた。

「あの頃にこういう冒険していたら、もっと楽しかったんだろうな」
自分に言い聞かせるような素振りの明日香は、洗濯機の音を静かに聞いていた。

明日香と入れ違いで、武史と則之がエレベータから現れた。

「則之先輩、カッコイイよ」

ロビーにある鏡で武史は身だしなみを整えた。

「これからどこに行くんだ？」

「いいから早くいくぞ」

出発した二分後に武史からメールがあった。街でのナンパだった。パソコンのネットで女の子との会話術を見ていた則之を、無理やり引っ張りだしたと言ってよい。目的を知らされていなかった則之は酷くためらっていたらしいが、武史の説得により思い腰を上げた。明日香は呆れ顔でナンパに行くんでしょと捨て台詞を言って、洗濯が終わると部屋に戻っていった。ぼくはしばらく本の続きを読み、時間を持て余すようになると、清美をディナーに誘った。ちょうど部屋で絵を描いていたらしいが、快く誘いに乗ってくれた。部屋の中で炊いていたチャタン香の匂いがした。

「近くにタイ料理やインド料理を出す店があるらしいんだけど、行ってみようか？」

目的の店は地下にあった。階段を降りる空間を民族雑貨で飾り付け、店の内装はジャングルとバーを融合した雰囲気と思わせる。予約席は、大木の中に造られた竪穴式住居のような個室もあった。ぼくらの座ったテーブルには蝋燭に火が灯されていた。

「なんだか、昔の清美が住んでいたアパートを思い出すね」

メニューを見る清美は楽しそうだった。嬉しい知らせも、喜びも、言葉で表現する時は必ず直には口にしなかった。

「私も思っていたわ」

ぼくはジンライムとチョリソー、生春巻きを、清美はレゲラムカクテルとグリーンカレーを注文した。お通しはエビのすり身を挙げたものだった。運ばれてきたお酒で乾杯をした。

「旅はきつくないかな？」

「うん、大丈夫だよ。たまに行く取材旅行なんか、もっと過酷なんだから」

「へえ、たとえばどんな場所へ行くの？」

清美の答えには海外の名も入っていた。直接仕事には関係ないところでも、海外から見ると自国というのは、視点が広がるのだという。元来旅行が好きだった清美にとっては、海外に対する抵抗はないようだ。ぼくは運ばれてきた料理を平らげてしまうと、追加でズブロッカを頼んだ。

「ぼくは数年間、旅行にいつてなかったから、何もかも新鮮に見える。小説も音楽も、違った印象を与えてくれるんだ」

「わかるわ。私なんか、旅行の最終日はきまって刹那的になるし」
「ぼくは子供の頃、親と過ごして、一番印象にあるのが家族旅行だね。悪い思い出は殆どない。鮮明に覚えているし、両親の普段見られないような顔まで覚えている」

清美も共感してくれていた。カクテルを飲みきると、ぼく達は季節限定のボジョレーヌーボをボトルで頼んだ。

話は旅をする仲間に及んだ。清美は少しでも早く皆のことをわかりたいと、貪欲にぼくを質問攻めにした。酔った勢いで陰口を言わないよう、考えながら伝えた。

「明日香さんって刺青しているでしょ」

「そうだったな。理由は知っている？」

「聞いてないわ。本人にしてみればどうってことないかもしれないし、聞かれたくない理由かもしれない。本人が話してくれるまでは待ってればいいと思う」

「ああ、誰にも言えない秘密は何個か持っているのが普通だしね」
ワインをグラスに注ぐと二度目の乾杯をした。どこかのお笑いタレ

ントのように陽気な乾杯だった。ぼくは少量を口に含んで味わう動作をしないものだから、銘柄と味の関係に詳しくない。清美は多少の知識はあるようだった。

「智也は誰にも言えない秘密ってあるの？」

ふと明日香との関係を思い出した。ぼくの中では、もっと汚い記憶の引き出しも存在しているが、明日香の存在が、旅で恋愛とは違った意味で大きく変化しているからだ。今は清美と同じぐらい大切な仲間となっている。

「あっても、文字通り言えないよ」

ぼくは意地悪な顔で言うど、だよねと満面の笑みで返してきた。

「清美と付き合っていた時に嘘を付いていた内の一つなら言えるよ」
「それって沢山の嘘についていたって言っているようなもんじゃない？」

「ごめん、言い方が悪かった。殆ど嘘は言わなかったんだけど、ぼくの言おうとしているのは本音を明かすタイミングがなかったんだ」
「それって何？」

「あんまり構えないで聞いてよ」

清美は頷いた。ワインをゆっくり飲んで落ち付いている様子を演出していた。

「ぼくは、清美と付き合っていた頃、随分と昔の詩を読んだ。随分といっても清美の読書量にか叶わないんだけど、ぼくの中では賞状を贈りたいぐらいだよ」

「詩よりも小説を沢山読んでいたと思っていたけど、智也の中では賞状あげたの？」

「いや、小説は自発的に読んでいた。長い文書だから、推薦されたところで、読み切るのは苦痛だからね。つまり、詩に関しては自発的ではなかったんだ。ポートルの詩よりも、ビジュアル系バンドの歌詞の方が胸に染みた。恐らく、ぼくは知っている人が描いたものでないと詩に強い興味をもたなかったんだと思う。そんな調子だから、詩集をまとめた本一冊なんか読めたものではなかった。で

も清美の詩はビジュアル系バンドの歌詞以上だったよ」

「嘘と呼べるものでもないね。私は確かに昔の詩はよく読んだわ。でもそこには歌謡曲の歌詞だったり、洋楽だったり、ジャンルわけしないで影響を受けた。だからその話を聞いても傷は付かない」
よかったと僕は言った。

「何でも言い合っているつもりだったけど、妙なところで気遣っていたんじゃないかな。例えば今の話のように」

「無いとは言い切れないね。ぼくにとっては職業的詩人の清美の前でする話なのかずっと考えていたし」

「でも私にはどうでもよい話、とりあえず飲みましょう」

二人は笑い合った。グラスが空になる前に継ぎ足す動作を繰り返した。

「ねえ、一つだけ聞いていい？」

「内容にもよるけどいいよ」

「試すつもりはないから、気軽にね」

清美は言ってから間を置いた。重い話は好きではない。相手の思考と真逆の答えを出せば衝突する。曖昧な答えだと同じくはつきりしするまで終わらない。重大な決断をする場面なるべく避けてきた。良い人を演じてでも避けるべきだと意識した。体に染みついてしまったのだ。

「私と別れた後も、私のこと考えていたかな？」
胸をなで下ろした。

「もちろん。直に忘れられる程、恋多き男ではないから。それに、失った大切な人を考える時間は、付き合っていた時期よりも多かった」

失った大切な人は私なのと聞かれて頷いた。

「お互い若かったものね」

「簡単に言うと、ぼくは清美の才能に嫉妬していたのだと思う。他の男と話している場面や、合えない時間を思っただ嫉妬していれば、もっと旨くいっただろうね」

二人は考え込んでいた。ぼくは出した結論に背を向けて働いていた。忙しい毎日が感情を薄れさせてくれた。失った大切な人を目の前に、他の人と関係を持って忘れようとしていた話はできなかった。ぼくの中では、今でも清美には嫌われたくないという意識があった。「でも、こうやって久しぶりに合った私に嫉妬はないでしょ？」

「うん、良い意味で成長はしたんだ」

成長していくことは、ほんの小さな夢をあきらめることと対局にあると思う。ぼくは趣味に毛が生えたような文章を書いて、自分で読み返した時点で売文業という職業を諦め、清美への嫉妬を断った。何かを止める時よりもあつけなく。

「私も智也のおかげで成長できていると思う」

「例えばどのように？」

「智也と出会うまでの時間は私という個性も、取り囲んでいた周りの環境も無だった。ただ生きた、それだけだった。次の十年間で必至に取り戻し、生きた証がほしくなるようになったわ。後は昨日話をした通りよ」

ボトルを空けると、普段よりも早い眠気が二人を襲った。

同じホテルに二日間滞在することになった。武史が街で声を掛けた女の子の部屋に泊まり、帰ってくるのを待っていたからだ。もし、無一文になったとしても、武史はどこでも生きていけそうな逞しさがある。ぼくの作ったルールにいささか反している部分は長期の自由行動を取っていなかったので問題なしとした。ぼくは一人で街を歩き、喫茶店から、歩く人達を見ていた。ファッションや髪形、化粧はぼくの住んでいる東京とさして変わりなく、スーツ姿のサラリーマンを見ていると、胸が締め付けられる思いがした。大学時代まで思い描いていた社会進出は、綺麗なオフィスとOL、仕事を次々とこなす敏腕社員。どれをとってもテレビドラマからの幻想だった。女の子を知らない時期に幻想を抱く感覚と同質だった。働いている年数が長いほど、社会に対する幻想は薄れ、慣れていくのが救

いだった。ぼくがこのような類の記憶を思い出したのは、まぎれもなく自由になった現実がもたらすものである。二カ月前のぼくであれば思い浮かばないはずだ。辞めた途端に会社の酷評をするのは何だか空しくなり、遠回りをして部屋に戻ると読みかけの本を開いて、読了した。

明日香と清美は二人で意気投合し、様々な場所へ行っては買い物をしていた。何時間もヒールを穿いて歩き回れる女の子は、それ自体才能なのかもしれない。かわいいを連発していたクッションとクマの縫いぐるみがバンに追加された。

武史と一緒に街へ繰り出した則之は、途中まで居酒屋で武史と、女の子二人と飲んでいたが、武史達が立ち去ってしまうと、急に気まぐずになったとのこと。則之と飲んでいた女の子が帰る前に、最後の勇気を振り絞ってメールアドレスを聞いて、遠まわしに断られたという。その後、則之は一人で飲み続け、洪水のようなおう吐と、酷い二日酔いに悩まされていた。

ホテルのラウンジで落ちあったのは、夜になってからだだった。コーヒーを飲み干すと、則之は深呼吸した。

「具合はいいのか？」

「だいぶ良くなった」

「これから長いんだから、あまり飛ばしなさんな」

胃につまったものを吐き出しそうな咳をしていた。顔色は良くない。途中でリバースされても困るので、まだ休んでいればと言っても則之は頑なに拒否した。消化不良なのは、アルコールではなく昨日の出来事なのだ。

会話はといえば、パソコン関係のシステムを延々話していたらしい。痺れを切らした相手が則之の趣味について質問をして、火が付いてしまったという。アルコールで麻痺した神経と、自分のことをわかってもらう精神が、女の子をひどくうんざりさせた。想像しただけで場面を思い浮かべられる。もちろんぼくも技術職であったが故に、マニアックな話になると、止まらなくなる資質は持ち合わせ

てはいるものの、相手のリアクションありきになるので、険悪な空気が流れるのは当然である。周りに聞かれないよう、こっそりとお前から質問はしたのかと尋ね、ほとんど覚えていないという。ぼくは小さなため息を付いた。

「あきらめずに次のチャレンジしてみなよ」

「そう簡単には行かないよ」

当然の反応だった。いきなりナンパはレベルが高すぎるし、万物に通用する話題がなければ息苦しい空気を味わうだけだ。救いは、則之の口から相手を悪くいう話も、自虐的になることもなかった。

「ね、ねえ、僕どうしたら女の子と付き合えると思う？」

「まずは身近な明日香と清美に練習代となってもらえば良い。武史の接し方はぼくだってできないし、自分が誰だかわからなくなるまでマニュアル通りにしても、後で苦しむだけだろ」

「なるほどね」

たばこに火を付けた。則之はぼくにもくれと言って、火を付けた途端に噎せた。吸い終わると脳が酸欠状態だった。

「僕って外見もイケてないのかな？」

「それは安心して良いよ。引きこもりしていた時期と比べても、清潔感があるし、ファッションも問題ない」

「よかった」

「外見は最低限守っていればいいんだ。後は会話だ」

「やっぱりそうだね」

真剣に恋愛と向き合おうとしている則之がかわいいと思った。難しい顔をしてパソコンと格闘している冴えない男は、目の前にはいない。

「生涯女とセックスしなかった偉人だっているんだ」

ぼくが何かのエッセイで読んだ話をした。名前は出てこない。

「ぞっとするね。僕が言えた柄でもないけど。セックスしなかったから偉人という意味じゃないんでしょ」

「うん。名前の知れた人物。違った意味で偉人であるけれど」

性欲を抑えることで、違ったベクトルにエネルギーを注入できるのだろうか。ぼくは我慢すればストレスが貯まるだけではないのと真剣に悩んだ。

「何かが欠けていたんじゃないか」

「もしかすると、テレビに出るようなアイドルがイメージを崩さないために風俗へ行けないような感覚で、セックスが出来なかったんじゃないかな」

「偉人っていつでもイメージは関係ないでしょ」

「わからないよ」

「女嫌いだじゃない何か欠けていたものを偉業で補い名声を得たんだろうね。完璧な人間なんていない」

欠落があるからこそ、身近に感じられる。バラエティー番組もそういう傾向があるけれども、人は完璧過ぎる人よりも、少し隙があって笑える方が好かれる。

「完璧なハードやソフトがないように」

則之の言う完璧なそれとは、故障なし、バクなし、データ量の制限なしというシンプルな定義だった。

「完璧な文章がないように」

ぼくの言う完璧なそれとは、だれにでも受け入れられる文章という、さらにシンプルな定義だった。ぼくらの絶望から救ってくれるのは、完璧なものがないからではないだろうか。改善の余地がなく、改善の必要がない状況では何も生まれない。

則之は気が楽になったという。ぼくのはもしかすると、他人を癒す能力が備わっているのではと思うほど、則之の表情は晴れやかだった。

大量の雨が降っている中、バンを出発させた。ワイパーの動作速度を速めても直に視界が悪くなる。ぼくは雨の日のドライブが昔から好きだった。適の攻撃からすべてを守られていることや、となりに好きな人がいて雨宿りし空模様を気にしながら自然な会話をするこ

とを連想させ、体が濡れないで水の躍動を近くで感じられるのが、日常から幾許か離れた場所へ連れてってくれるからだ。清美が運転することになった。運転が上手くあまり慎重ではない武史よりも、運転があまり上手くなく、慎重な清美の方がぼくは安心した。後部座席の、ぼくの横にいる武史があらゆる小さな声で名古屋の夜を語った。相手の女の子が清純な雰囲気では性欲過多であったエピソードだった。どんなプレーで何回発射したのかまで聞いた。前に座っている明日香と清美は、別の話題をすることで、聞かないようにしていた。ぼくは元気だねと老成した言葉で労うと、武史は当たり前でしょと声を張った。

空想のゴーストタウン

大雨は小雨に変化しても降り続いていた。重厚な雲は、景色を灰色にさせ、しばらく太陽を隠すだけの勢力があった。やがて雨が止むと、ぼく達は休憩を取るために、無人で無料の駐車場にバンを停止させた。それについてはあまり不思議には思わなかった。そもそも東京の生活に慣れ切ってしまったぼく達は、街を離れると驚く程の自然と、無人なのではないかという家を見てきたから、一般論から離れた状況でも驚かなくなっていた。利用できるところは利用する方が得をするのだ。適当な喫茶店でもあれば、コーヒーで一服できる。目と鼻の先に商店街が広がっていた。歩いて商店街を目指した。

人通りはなかった。三軒茶屋や吉祥寺の商店街を想像していたぼく達は言葉を失っていた。昼下がりだというのに、半分の店のシャッターは閉まっていた。店の二階に住居を構えている建物が多く、古き良き時代の映画でみる映像よりもはるかに古い年代ものの作りだった。部屋の電気を付ける時間帯ではないものの、くすんだ窓から中の様子は伺えない程の闇だった。汚れで変色した壁を、植物が異常な成長をして、建物全体を食いつくしてしまうのではないかという佇まいの店は、人が住んでいれば奇跡と呼べるものだった。

文房具を売っている店は、八十を過ぎた老人が、店の殆どを侵食してしまった品物の数々の中から天井近くの鉛筆を取ろうとして必至に背延びしている。季節外れの新作を卸した書店は、売れ残ってしまった在庫を、八畳のスペースでストックし、小学生向けの月刊本からは、輪ゴムで支え切れなくなった付録が落ちかけている。店頭にはワゴンセールと記載されたポップの下には、皮靴やサンダルやスニーカーが、埃を雨水でシャワーした状態で待っていた。店内は電気が付いていなく、暗闇をマネキンの白い肌が照らしていた。野良猫は痩せこけていて、目だけが鋭く光っていた。時折目に付く看板は、すべて色褪せていた。

僕たちの結論は、シャッターを閉めていたのは食品を扱う店が多いということだった。日持ちしないものを売っていると、客が来ないので赤字になってしまう。

そんな中でも喫茶店は存在していた。『テラス』と右から左に印字されている看板の店に入ると、鈴の音がして、コーヒー豆の匂いがした。ぼく達五人はテーブル席をくっつけて座った。後十人は入らないだろう。

「ようこそおいでくださいました」

喫茶店の店員にしては少し違う向え方だった。六十を過ぎている、あるいは七十以上かもしれない老人はぼく達を見て驚いていた。まとまった客は久しぶりだという。メニューを見ると、飲み物、食べ物を含めて十品ぐらいしかなかった。ぼく達は驚かなかった。五人分の同じコーヒーを頼むと、二十分してやっと出てきた。誰も文句を言わなかった。

喫茶店の老人は大きな仕事を終えて満足していると、どっこいしょと言って、ぼく達の向かいになる席に座った。

「美味しいですね」

清美は言った。確かになと武史は言った。

「自家製だからね」

気持ちが籠っていなかった。急激に横柄な態度に変化した喫茶店の老人を誰も突っ込めなかった。体裁を保つにもある程度の体力がいる。会社に勤めていた時に、嫌というぐらい感じたものだった。老人にしては過酷なことだと割り切れば腹も立たない。

「お前さん達はどこから来たの？」

「僕は東京から来ました」

「ふーん、わたしも少しは東京に居たことがある。ここは退屈だろう？」

投げやりだった。喫茶店の老人はたばこに火をつけ、唇をフィルタの線より深い位置で捉えて吸った。たばこ全体を飲み込んでしまっているのではないかと心配した。ぼくと武史もたばこに火を付けた。

「そんなことありませんよ」明日香がフォローした。

「大規模なスーパ―やデパートが近くに出来ればこの商店街は終わるだろうね」

遠くを見据えていた。煙をすべて食い込んでいた。

「今はできていないんでしょ？」

武史は足を組んだ状態で気だるそうに質問した。沈黙。流れる音楽がない。則之は煙たそうだった。

喫茶店の老人はたばこの灰が床に落ちる寸前までキープし、ゆっくりと灰皿へ落した。

「幸い、誰もこんな場所に建てはせんよ。かろうじて生きている街と人間にスーパ―やデパートなんて必要ない。その気になれば自給自足も可能だしな。儲からない」

ぼくはかろうじて生きている街の比喻について考えた。たばこを吸い終えるまでに旨い表現だと判断した。

「子供が育だたないんだ」

「どういことですか？」

清美は真剣に心配をしていた。商店街の様子を観察すれば心配するのは当たり前のことだった。酷い公害で水道がやられて五十歳未満の人間は水を飲むと直に死んでしまうと言われても、この街の男は、特殊な条件化で性欲がないと言われても信用してしまうだろう。喫茶店の老人は、たばこの灰を二回落とし切るだけで、フィルダの線直前まで吸いきってしまった。指先の神経が安定し、心臓から送り込まれる振動に対してもぶれがなかった。手先の器用なパントマイマーだったのかもしれない。

「大人になる前に都会へ逃げる。大人になるだいぶ前に家族単位で都会へ逃げる。残るは逃げる力を失った老人だけなんだよ。売れない店を継ぐことも、仕事もない会社に住ることも、金を稼げない以前に退屈になる」

切実であり現実的な理由だった。ぼく達はそれを聞いて落胆した。役所も町の開発を行う力が慢性的に不足していた。

「そういうことでしたか。この店は何年やっているんですか？」

「戦後からだから、六十年になる。開店当時は十歳で店の手伝いをしたぐらいだよ」

「かなりの老舗ですね」

ぼくは言った。予想をはるかに上回る歴史があった。

過去からの手記その2

父親は私と三十歳離れていた。母親とは二十五歳離れていて、お見合いで知り合ったという。二人共東北の生まれで、話が合う部分はそこだけのような気もしていた。結婚まではあまり時間を費やすことなく、両家共に承諾の上だったという。お互い初めての恋人として交際し、何十年も寄り添ってきた。恋愛結婚が必ずしも良いという結論は出せないと思う。多様化した価値観がお互いの、男と女の共同生活に支障を来し、我漫が美德とされなくなってしまうのだ。昔堅気の父親象が定着する前の時代ではあったが、どここの家庭でも父親は絶対的であって、恐怖の対象だった。そのなかでの私の父親は、内弁慶でもなく、誰に対しても無口で穏やかな八方美人だった。酒を飲んでも殆ど乱れるわけでもなく、ふとした瞬間にも本音を言わないフクロウのようで、それでいて、笑顔を絶やさないような人だった。

母親はそんな父親の欠けた部分を補うような人である。元々開けっぴろげな性格が、さらに多弁となり、世の中のものをすべて知っているふりをして、私の子供時代に抱いた好奇心から様々な質問をし、不明点があれば、調べてはすべてを説明しようと努力していた。親戚は江戸っ子だとか、実は関西人なのではないかとか冗談をいつていたものの、母親はそれを喜んでいた。生きていく強さだとか、芯がしっかりしている精神は母親から学んだ。私は学生時代までそのような母親か、うざっついと思っていたし、異性に対する好みは静かな人で固定された。それ故、私の躰は母親の方が担当していた。妹がいて、三歳離れている。妹は常に私の後を付いてくるような、大人しく、優しい子であった。学校から帰ってくると、いつも何かに脅えていて、友達と一緒に遊んでいる姿を見たことがなかった。私が物心付いた時期は、父親の遺伝を強く受け継いだ子であり、将来を真剣に心配をしていた程であった。そんな不安とは裏腹に、妹

も中学に入ると、忽ち明るくなり、クラスの人気物と称されるようになった。小さい頃の妹と同質な学生からいくつか恋文を貰ったことを自慢している姿は、私の心を悲しくさせていた。現在は幸せな家庭を築いている。

それに対し、あまりにも温厚で無口な父親であつたから、母親にも、親戚にも小ばかにされていた。内容としては、いつまでも自分の意見が言えず、出世できないんだよといった類が主で、自分からなにもしないで生活できるから楽だ、会話すると元氣が取られてしまう等子供の喧嘩なみの話まで書ききれない分量の言葉を受けていた。今考えればそれで人格が変わるのではないかと挑発していたのだと思う。それでも父親は腹を立てず、静かに聞き入れ、健康体であつたし、四十年近い年月を休みなく、企業に体を投資していた。怠惰な態度も一切見せなかった。私も子供の頃はあまりにも温厚な父親をからかっていた。妹は父親と仲良く出来ないで悩んでいたし、反抗期を過ぎてしまうと殆ど会話さえなくなっていた。或る時、父親の部屋からお金を盗んでも何も言わずに、無かった事になっていたし、母親の前だけは良い子供を演じる汚い性格であつた。そんな私の性格も知っていたと思う。父親は家族を知り尽くした結果、温厚で無口な態度を取っていた。

私が会社勤めをするようになり、ある時、父親のことを考えた。働くようになり、年を取っていくと確かに温厚になっていく傾向もあるようだとは感じていた。無益な争いをしたとなくなるのだ。それでも、仕事自体はすべてが楽しく上手くいくわけでもなかった。自分と相性が良くない、時には付き合いたくもない人間とプロジェクトを組んで成功しなければならぬ仕事もある。仲間の出世で嫉妬し、上司からの重圧もあり、少なからずストレスは蓄積されるようになる。よって、どこかで発散しなければ到底続けていくことも困難になると感じていた。着実に出世している尊敬する上司も、意外な方法で日々のストレスを蓄積し、活力を得ている話を聞くと、私もほっとしたものだ。私の場合は幸い上司や同僚に、飲んだ席で相

談できる環境があったし、時には妻や友達にも及んだ。年増の関係は本心を言えない環境を生んで複雑化するものではあるが、私もそのような相談を受ける機会もあり、人間関係に苦労はなかった。

但し、父親に関しては家庭でも子供対して一切怒らず、母親に愚痴も漏らさないのだ。例えば私がどこかの神聖な神社へ出家したところで、父親のような人間になることは簡単にできないことであろう。もしかすると、生涯掛けても無理かもしれない。修行僧であっても、家庭では内弁慶であると私は思っている。

自己主張の欲が希薄であったと、簡単には結論付け出来ない程で、私は異常であると感じていた。それと同時に居たたまれないとも思った。年に二回は埼玉の実家に顔を出していて、母親とは面と向かって育ててくれた事に感謝の気持ちを伝えていたものの、父親には言えなかった。よく来たねと優しく声を掛けてきた時も、お邪魔しますと他人行儀になってしまうのだ。

社会に出て、自分の人生をすべて自分でやりくりするようになってからというものの、父親にはどの言葉を発するにでも言葉を選び、遠慮してしまう。父親からの数少ない問いかけに対しても、生返事しかできていなかった。いつもこの様な調子だった。言葉を発した時点で他愛のない会話であっても、父はすべてを受け入れ、その通りであるや間違っていているといった返事もなく、ただ笑っている様子を見ると、私の意見が正しいのかさえ分からなくなってしまうのではないかと考えていた。まともに父親とは向き合えなかった。

私が二五の時、実家で食事をしていると、父親は日本酒を飲みながら、会社で旨くやっているならそれだけで良いといった。母親は父親が自室に引き返していった機会を見て、私に会社での評判を話した。無口に関わらず周りの人は集まってくる。話を聞く人物が確実に不足していた時代だったから、何も言わずに聞いてくれる父親はもしかすると重宝されていたのかもしれない。出世欲がないものの、無理な要求があっても文句を言わず仕事を堅実に、そして確実にこなす。だった。子供を二人不自由なく育ててきたのだから、それ位

の信頼はあったと想像するのは容易であった。

そんな矢先、父親は五八歳で死去した。短命の家系ではなかったことから、私としても早すぎる死だと思った。病魔との闘いに弱音を吐かなかったという。実家で倒れ、病院に搬送された時は死の直前であった。私が病院に駆け付けた時にはもう息がなかった。最後まで温厚で無口な父親象を崩さなかった。

それから私は、父の遺伝という逃げ口を作り、都合が悪い場面で無口となった。私の心の中という限りなく小さな場所での話だ。

以下、私の趣向で、質疑応答形式で記載したいと思う。

湖にて

曇り空から日が差してくるようになると、ぼくは残念に思った。道中の通り掛った川は決まって水分過多となっていて、ミルクティー色となった水があらゆるものを流し、海へ運んでいた。ぼくは洪水の町を想像した。経験がなく、他人事なのに、妙なりアリティーを持った想像は、目の前に映像として浮かんできた。いつもの通学路、通勤路がミルクティー色の水に浸食されている。雨は降り続き、弱い植物からなぎ倒され、足を患っている野良猫と低い場所に住居を持っていた虫は救助されずに死滅する。バイ菌だらけの水は町の隅々まで行きわたり、民家の一階はヒタヒタとなり、思い出の品、食料品はすべてダメになる。やがて二階部分まで浸食してくる水は逃げ場のすべてを封鎖して、屋根に避難することしかできなくなる。

雨のせいで体温は奪われて行き……。結局は洪水に興味を持った時点で間違いなのだ。通勤の電車がストップすれば会社が休みになると思っただけ、代償が大きすぎる。休みになった日の仕事は復旧した日に持ち越されるだけで、災害にあった分の本来やらなくてもよい仕事が増え、大切なものを失う可能性だってある。ぼくは想像を止めた。

目についたスーパーで停車し、買出しをした。数日前にキャンプした時の空腹を、皆覚えていただけに、分量を幾分見積もり違ったぐらいの大量の食糧とガスコンロ、フライパン、鍋を購入した。日もちのする缶詰めや乾麺等は段ボール単位で買い込んだ程だ。パートのおばさんは横のレジからヘルプを呼び、会計の額とレシートの長さには驚かされた。武史と明日香はもっと高額なブランド物はいっぱいあるよと、少々冷めたコメントをしつつ、肉体労働波の荷物をバンへ運んだ。

清美が持ってきていたクラシック音楽が流れていると、目の前に琵琶湖が見えてきた。則之の調べだと、琵琶湖周辺を舞台にした文学

が多く、『古事記』『源氏物語』等にも登場するという。ぼくはそれを聞くと、皆にインテリ風で情景を表現しようとしていたが止めた。古典文学を多少読んでいたぼくに、それらに勝るとも劣らない表現が出来るとは思えない。まぎれもなく、日本一面積の大きい湖であり、最も深い場所は百メートルを超える。

皆が話を止め、一斉に巨大な湖を見ては感動していた。しばらく周辺を走っていると、本日の宿泊ポイントに車を止めた。大自然の空気を目一杯吸い込んだ清美は、運転の疲れも吹き飛んで、遠くを見渡していた。

「早速用意しようぜい」

武史の言葉で皆が作業に取り掛かった。女性陣はガスコンロ火を付けると、鍋に使う野菜と肉類を切り分け、鍋の元でダシを作る。男性陣はテントを張る。早く完了してしまうと、三人で並んで座った。遠くの方に、湖に浮かんだボートが見える。

「すげえ広いな」

ぼくと健史はたばこに火を付けた。

「遠くまで来たな」

ぼくはそう言うて目を瞑った。健史はこちらを見た。

「遠くって、ここは滋賀県だぜ」

「場所とか関係なく、取り囲んでいる環境がさ、絶対味わえないだろう？」

「ようわからんけど、確かにな。俺は毎日クラブと部屋の往復だったし、デートも遠くには行かなかったしな」

「ぼくも会社と部屋の往復だった。出張で東京を離れてもさ、のんびり観光なんてできなかったから」

「皆同じなんだね」

則之は誰に問いかけるわけでもなく言った。

「僕は部屋に籠っていたから、二人よりも新鮮だと思うな」

「関係ねえよ。俺らは変わらないって。小さな範囲で必至こいて生活し、争っていた。思い返してみると、何であんな張り詰めて居た

んだろうね」

武史は小石を湖に思いっきり投げ込んだ。

「ああ、盲目だったと思う。アリの巣で生活し、組織を尊重した。でもぼくは会社をクビになるまでそんな生活にも満足していた」
ぼくは、何のために働くかという原点も忘れて、広い視野で物を見てこなかった時期を、白けた感情で過ごしてきた。

「僕はね、実は引き籠っていた時間は無駄じゃないと思っているんだ」

「なぜに？」

大概是後悔するもんじゃないかと悪びれもなく武史は問うた。

「社会から見れば、僕のやっている事はただの逃げだと評論されてもね、生活していくためにいろんな知識は身に付けたわけだし、僕なりのペースでやってきた。逆に偉い人はぼくが想像できないぐらいの苦勞と、何かを犠牲にしていると思う」

「つまり、外見で判断するなと同じ意味を言いたいって話か？」

「うん、いまさら一般論と比較して後悔していたら、僕は自殺しているよ」

則之には芯の強さがあった。散々周りから説得されても引き籠り続けているのは、同年代の社会人と同等の経済力を持ち、それで周りが納得するからだ。

「僕はね、この旅が終わったら、外に出て社会を見ようと思うんだ。人と会い、コミュニケーションをとる」

「就職活動をするってこと？」

「まだ僕にはそこまで決心はないから、何らかの集まりに参加したりってことになるだろうね。でいずれはネットを利用して新しいシステムを作り、お金を稼ぐ」

「前にテレビで見たんだけど、一日三十分働くだけで、ぼくらの三倍の収入がある人がピックアップされていたよ」

「マジで！」

健史は仕事内容について貪るように聞いてきた。そんな簡単な内

容で稼げるのかと驚いたが、それまでのプロセスを構築する知識がないことに気が付いて落胆していた。俺も勉強しておけばよかったと、本気なのかわからない発言をした。ぼくは学生時代に戻ったとしても、同じことを繰り返さず予感だけが頭に浮かんだ。

「ねえ、則之さん、俺と組みませんか？」

「嫌です、武史さん」

「言うようになったな」

笑いながら、武史は則之の頭を掴んで振り回した。則之はやめろよと言いつつも笑っていた。仲の良い同級生と錯覚した。ぼくは、かすかな未来を見据えている二人を見ても、置いて行かれている感情が芽生えなかった。

「人として豊かに、余裕のある大人になりたいな」

ぼくは呟いた。夢を語るのは難しくない。明確な未来が、プロセスが見えていなかったからこそ抽象的な表現になる。しかし、ぼくは広大な自然を目の当たりにして、紛れもなく、揺るぎない夢を自分自身に語った。

「ねえ、夕食の準備できたよ」

清美がぼくたちに声を掛けてくると三人とも立ち上がり、ズボンに付いた汚れを手で叩いた。

「さて、清美と明日香の料理が上手いか楽しみだ」

水炊きのように白く透き通った汁にたっぷりの野菜と、鶏肉や魚のつくねが入っていた。煮立っている湯気から漂う匂いが食欲を刺激した。青ネギの入ったポン酢が用意されていた。あっという間に五人で平らげてしまうと、余った具材とうどんを煮込んで食べた。体の芯まで温まり、活力が注入された。食べた物が即座に吸収されていくような気がした。全体としては、あっさり味で健康的だった。ぼくは気になりだしたお腹周りの脂肪が、この旅で削除されることを密かに願っていた。武史と則之は痩せている方だし、明日香も清美も、服の上からでもウエストのくびれが分かる。何を食べても体重の変動がなかった時期が懐かしい。

「料理うまいんだな。俺びっくりした」

当たり前でしょと言って満足気な明日香に対し、清美は笑っていなかった。

「褒めてもらっても、これは鍋だよ。具を入れて煮込むだけだから」
「そ、そうね、今度はちゃんとした料理作ってあげるわ」

武史は動揺した明日香を睨んだ後、楽しみだと大声をあげた。

湖にはコハクチョウとヒドリガモが泳いでいた。則之がネットで調べた結果、湖底遺跡もあるということだ。必要な情報を知らぬ間に探がす則之は、皆から天才呼ばわりだった。

日が沈んでしまうと、湖は使い古したエンジンオイルのようにどす黒く見えた。点在している明かりと、キャンプ客が発生させている火が安心させる。

食後は五人でゲームをして、負けた人は過去の恥ずかしい話をする罰ゲームとした。ぼくは小学生の頃、授業中に失禁した話をし、武史は女の子とホテルのロビーで待ち合わせしガラス窓に走って激突した話をし、明日香は祖父にエッチしている現場を見られた話をした。則之は好きな子のげた箱に手紙を入れたと思ったら、違う子のげた箱に入れてしまったことを話し、清美は下着姿を向かいのアパートの住人に見られたことを話した。

武史と明日香と則之は、バンで近くにお酒を買いに行き、何故だかぼく達二人を留守にした。急に静かになってしまうと、清美は湖の近くに座った。ぼくは清美の後姿を立って見ていた。

「ねえ、智也って今付き合っている人いるの？」

「いないよ。この旅でほとんど携帯に触っていないし、わかるんじゃない？」

「そう言えばそうだった」

暗さと前を向いている清美の表情はわからなかった。安心したようにも、どうでもいいようにも受け取れる反応だった。今のぼくには何もないとは言わなかった。何もないぼくと付き合ってくれる女の子は、簡単には見つからないものだ。

「清美はいるの？」

「好きな人はいない。付き合っている人はいる」

自分に言い聞かせているようだった。好きな人はいない。付き合っている人はいる。

「どういふことなの？」

「今はあまり言いたくないの」

清美は言ってしまうと黙りこんでしまった。これ以上言ってしまうと、何かを失うのだろうか。心を開いても良い仲間と思われていないのかもしれない。あるいは、ぼくと会わなかった十年間で、ぼく程の男はいなかったと感じ、自分の付き合い合っている相手も同じで言えないのかもしれない。後者であれば、とても素敵な話で、逆に相手はそれほど思われているんだと羨ましさも芽生えてくる。ぼくは東京を出発してから、どうしても清美に眼を向ける回数が多かったが、携帯を見るしぐさは少なかった。推測からしても、彼氏と密に連絡をとっている様子ではない。重苦しい空気が流れた。

「ごめんね、自分から話しておいて」

振り向いた清美は泣きそうな顔をしていた。思い出になるまでは時間がかかると言いたげだった。ぼくは目の前の元カノが、切実に今の相手の事を気遣っていると思うと居たたまれなくなった。未練や嫉妬なぞ捨ててしまえ。ぼくはこの旅に恋愛を求めて来たわけではないのだ。

「良いよ。話変えようか」

ぼく達は得意分野の映画や音楽、小説の話をした。各分野で、ライフワークとした作品とたずさわった人物を挙げた。文字通り命を削ってまで作り上げたものから、片手間で作り上げたのではと疑問に思うのもまで様々だった。

「私は音楽以外、現存しない人物の作品にあまり触れないようになった」

「ぼくは昔の作品に触れる集中力がなくなった。海外の古典文学である全体小説を開いた時間で読むのは、趣味の域を超えてしまって

いるんだ」

清美は頷いた。

「半生を描いたクロニクルは、歴史の背景を知らないと、感情移入しづらかったりするからね。私達は恵まれすぎているのかもしれない」

恵まれているという定義を取り扱うのは非常に難かしい。清美は、ほしい物があつたら何でも手に入るといった類の事象ではなく、平和な社会を恵まれていると補足した。ぼくも賛成だった。

「作品自体が、大衆を意識して作られるようになったと思う。映画もエンターテインメント性が増して、製作費をかけるようになった」

「難解な作品は、集中力がいるからね」

「貪るように何かに熱中するのは、自分が楽しむだとか、勉強するだとか強い意志が必要だしね」

また、ぼく達二人に共通していたのは、安心して作品を何度も見たり、聞いたり、読んだりしている習慣があることだった。常に新規開拓していた昔に比べ、今は過去の記憶を遡って、それに因んだ作品を再確認することで精神安定を図っていた。もちろんその中には

現存しない人物の作品は殆どストックされていない。新規開拓をしているのは、仕事で使う資料だけのようないない。新規開拓をし

ぼくがくしゃみをする、清美が気を使って寝袋を持ってこようとしたが、ぼくは制した。

三人が戻ってくるまで話込んでいた。お酒で乾杯すると、二次会が始まった。清美のデジカメで記念撮影をすると、皆の笑顔が眩しかった。

ぼくは、湖で一人になる時間があつた。長く険しい道のりを辿ると、仲間という共同体がありつつ、それが不明慮になる瞬間は存在するのだ。湖で過ごす人を見るときも無しに観察していた。好きな人はいない。付き合っている人はいる。という清美の言葉を思い出してみ

た。我ながら理屈っぽいと思わざる負えない。渦巻く思いを捨て去る潔さもなかった。ぼくはひたすら考えた。単純にその通りだけの話かもしれない。相手は好きだけれども、自分は好きになれてないといえどそれまでだ。相手が自分には勿体ないと思う感じの良い人で、両親も付き合いを認めている。そんな人を好きになれないという理由で別れを選ぶなんてできない。当然の話だった。一般論。大多数の人が賛同する。

あるいは特殊な感性での話かもしれない。玉の輿を狙っているから好きなふりをしてプロポーズを待っている。セックスだけは上手いから離れられない。顔だけは良いから友達に自慢できる等。ぼくの中では浮かんで消えた。少なくとも清美は利益だけで男と付き合えるタイプではない。外面は変えられても、本質は殆ど変えられないのだと信じた。

カップルが琵琶湖の景色を楽しみ、その場をたよりにキスをする瞬間があった。ぼくは悪趣味だと思いながら、目を離せなかった。なぜだろうか。問うてもしょうがなかった。広い視野で見れば家族をつれた親子が目に入る。子供は無邪気にその場を楽しんでいる。もしかすると、恋人同士の逢引を見ている可能性だってある。有害だと思っても景色の一部と認識した親は子供の目を伏せはしない。

ぼくは苛立っていた。愛情の深さを世の中に見え付けるかのように行動しているカップルに対して。あの二人には客観性という心理はないのだろうか。ぼくには考えられない。周りを気にして、密かに愛を育むことが普遍ではないのか。芸能人のスキャンダルでもあるまいし、お前たちの愛情の深さなぞ、世間の人間は誰も公共の場で見たくはないのだ、と自覚がないのか。両方が醜いも同士であった場合、雰囲気をぶち壊してやりたいと、ぼくが呪っていると、二人は時間を持て余し、立ち去って行った。ぼくは二人の外見を確認する行動に出ずに、願は通じたんだと思い込んでいた。

他者の幸福に対し素直に喜べない自分に愕然とした。外見の醜さを基準とした自分の器に良心の呵責があった。これではあの

カップルを悪く言う権利などない。成長し、ある程度の立場になり、自分の納得するような恋人と一緒になったところで、あのカップルのキスシーンに腹を立ててしまうのであればしょうがないと考えた。納得する前の発展途上のぼくには意見も主張も、仲間に言うだけの自信がなかった。ただ胸の内に抱えるだけであった。

小鹿に嫉妬

琵琶湖には三日間滞在した。地元住民には、湖の愛好家か、大学の研究できているのだと勘違いされ、明日香は若く見られたことを喜んだ。入浴は銭湯で行い、残りの食糧が付きるまで余すところなく食した。問題は深夜と早朝の冷えによる不眠及び、携帯の充電と、則之のノートパソコンのバッテリー充電だった。ぼくたちは少なからず電子機器の依存症となっていて、習慣というものは生半可な我慢では超えられない壁となった。武史は幾分少なくなったものの、客の女の子からの連絡に対応していたし、明日香はそんな武史がうっとおしいと感じつつ、店の従業員から心配されての連絡には快く対応した。清美は仕事関係の電話があつたし、則之はパソコンとネットは手放せない必需品だった。

誰かが不満を口に出してしまうと、仲間全員を汚染した。不眠でストレス抵抗が弱くなった精神は行き場をなくしていた。三日間という時間は何倍にも体感される程長い時間となった。それでもなんとか過ごせたのは、一か月の間、限られた費用で過ごす目的が、皆の中でも強固になっていたおかげだと思う。

ぼくはバンの運転席でアクセルを踏み、琵琶湖で過ごした場所を後にすると、名残惜しい

とさえ思った。その結果湖周辺を、道なりに半周し滋賀県を後にした。

奈良で旅館を見つけた時はもう夜で、二部屋取った。ぼくと武史と則之に案内されたのは、十六畳の和室だった。入口から向かって奥にある障子をあげると、三畳程の間に低いテーブルと椅子があって、窓からは日本庭園が見えた。おのおのの作業を終えると、ご飯よりも前に大浴場に行くことになった。浴衣に着替えてタオル類と着替えを持って行った。浴室の前に、ひと口サイズの奈良付けを無料で配っていたので、三人で頬張った。浴室にはけっこうな数の客

がいた。全裸で隠す様子もないおじさん達を見ると、羞恥心がさすがに麻痺してくる。男が好きな男はこの光景を見て涎をたらすのだろうか。

服を脱いで腰にタオルを巻く。ウエストは気にならないぐらいに閉まっていた。体重計に乗ると九月に受けた健康診断から五キロは痩せていた。ベルトが緩く感じたのは錯覚ではない。武史と則之の腰にタオルを巻いている姿を見てほっとした。武史は細くて鋼のよな筋肉を身にまもっていた。色むらがなく均等に日焼けした体は理想の体型だった。則之もやせてはいるが、張りがあるので貧相ではなかった。病弱に見える肌を少し焼けばかなり若い体系に見える。ぼくは腹筋に力をいれつつ浴槽へ入った。ドアを開けると、白い靄に覆われ、直に消えた。露天風呂を含めて全部で五種類ある浴槽にはそれぞれ効力が異なっていた。

シャワーで体を流すと浴槽へ入った。温度が高く躊躇いながら足を付け、体を付けた。疲れていた血管が再起動しているようだった。湯が体に浸透して疲労細胞を除去してくれた。シャンプーを完了した武史はオールバックの姿でぼくの隣に座った。

「あっちいけど、チョー気持ちいい」

「水泳の金メダリストか」

則之も加わった。顔が蕩けるようだった。おのおのいくつかの浴槽を回って、サウナに入ることになった。客はいなかった。

「誰が一番耐えられるか競争しようぜ」

「えー」

則之は乗り気ではなかったのに無理やり参加させられた。サウナに入った直後から顔が真っ赤だった。隅にお湯を注いで温度を上昇させた。汗なのか蒸気が水滴となっているのは判別ができなかった。ぼくは顔を伝った液体を舐めてみた。汗と蒸気の混在だった。

限界と言った則之はサウナを出た。

「がんばるね、無理するなよ武史」

「へっ？俺全然大丈夫」

武史の余裕ぶりを見てぼくは争いを断念した。血液が沸騰しているのではないかと思った。体を水で冷却した。武史はそれから五分も粘っていた。

「皆、弱すぎ」

「おじさんをいたわれっの」

「あっそうか、ごめんね」

「僕もおじさんか」

則之は悲しそうだった。スポーツドリンクで喉を潤すと、ぼく達はそれからプレールームで卓球をした。旨かったのは則之だった。隠れた才能。ぼくは則之のサーブを五十パーセントの確率でしか返せなかった。プレールームを出ると明日香と清美が風呂から部屋に帰ってくる所だった。二人とも後で髪を縛っていた。浴衣で売店からいくつかのお土産を購入していた。

「やばい、スッピンなんだけど」

明日香はぼく達の目線から顔を隠した。

「あんまり変わんないよね？」

清美が同意を求めてきた。やや目の大きさが変わると言えずに、変わらないと言った。

あきらめたのか、明日香は向き直った。

「マジで浴衣に合っているよ。惚れちゃいそう」

「そんな」

「武史の目、やらしい」

皆集まったところで夕食となった。男部屋の方に五人分の食べ物を運んでもらって料理を囲んだ。皆、食欲は旺盛だった。琵琶湖での生活で侘しい思いをしていたわけではないけれども、外食は暗黙の了解で禁止していたし、調理器具に環境から、あまり凝った料理はできなかったのだ。明日は早く起きて東大寺へ観光し、次の場所へ行くのでお酒も控えた。

遠くからでもわかる巨大な寺が聳えていた。それに加え、巨大な大

仏、木造金剛力士像を真の当たりになると、ぼく達が生まれたずつと昔に造られたものに驚きを隠せないでいた。奈良時代の美的センスや建築技術は今の時代でも通用するのかもしれない。もちろん、今の時代に建てる労力と比較したら、比べ物にならないような苦勞となるだろう。五人はいろんな場所で手を合わせては願い事をした。神頼みも、この場所では本当に実現するのではないかと思わされる。所有している住職の重圧は相当なものなのだろう。マクドナルドのビックマックとポテトを頬張っている姿は想像できなかった。

小鹿がそこらへんの通行人のように歩いていた。毛の色素が薄くて、鹿特有の模様が目立たなく、大きな犬にも見える。角はまだ生えていない。

「やばい、チョーかわいい」

明日香が最上の褒め言葉で形容していた。シカせんべいをあげると、小鹿は上品に食べた。

「かわいい」

清美はうっとりしていた。つぶらな瞳の鹿を撫でると、毛並みの良さを感じた。人慣れしていてぼく達から逃げようもしない。武史はぼくと則之を集めた。

「俺は鹿になりたいわ」

「ぼ、僕も……」

「あの顔は恋をしている女の子だ」

「いいか男ども。時代はかわいいだ。中性的な男を目指すんだ」

「僕の場合だと、どういう風に変えていけばいいかな？」

「まずは目を大きく。次に鼻筋を高く。顎をシャープにした方がいい。全部整形だぞ。次に眉毛をカットしてから茶髪にする。唇にと肌に潤いを与え、髭を永久脱毛した後、体毛もするといい。ユニセックスなファッションに変える。香水はCKワンで良しとしよう。バックは……」

「ちょっと待った。それって殆ど全否定じゃん」

「だってどうすればいいか聞いてきただろ。俺も早く髪伸ねえかな」

則之はかなり凹んでいた。

他の女性客は声を揃えてかわいいを連発していた。下手なアイドルよりもよっぽど人気があった。ぼくは下手なアイドルよりも人気がないと思うと泣きそうになった。小鹿を見てみると、こいつにはかなわないと思った。清美のデジカメで明日香と小鹿、清美と小鹿の二ショットを取って、通行人に依頼して小鹿入れた全員で記念撮影をした。小鹿と何時間も遊んでいそうな女性陣をようやく連れて戻り、簡単な昼食を済ませて出発した。

過去からの手記その3

Q1、不思議な経験とはいつ頃の話になるのか？またその経緯を具体的に回答せよ。

昭和から平成に変わる年に、私は三十歳を迎えていた。よって今から約二十前の話になる。若くして学生結婚をした私達は、九州の桜島が見える場所に一戸建ての家を建てた。返済年数を勘定するだけでも気が遠くなり、私は購入して直に後悔する程の臆病な性格だった。私の妻は気が強く、はっきりと言う性格なので、母親と似ていると思う。昔の理想とは逆である。妻と知りあったのは大学にある食堂だった。当時私は、理工学部に所属していて、女学生の割合は全校生徒の一割にすぎなかった。恋愛には疎かったので、学生の内に運命の人と知り合う期待は持っていなかった。

学生運動は鎮静化し、純粹に勉学に集中できる環境であった。それでも、血気盛んな学生が跋扈していたから、講議で行うディスカッションでは、これまでの学問を根底から覆すような力のある発言が飛び交った。他者と争う労力を惜しんで知識を追求するのが普通であり、今から考えれば、異質であったと思われる。音楽は新しい時代としてニューウェーブと呼ばれる斬新なものから、パンクと呼ばれる反社会的な歌詞で時代を震撼させていた。それで、暴力ではなく言葉で世界を変える学生が巷に溢れていた時代。私は慎重に周りの意見をくみ取り、冷静な判断で意見するような目立たない人間にうつっていた。

そんなある時、妻は友達を通じて私に声を変え、私達は話をするようになった。声を掛けてきてくれたきっかけを聞いた時はびっくりしたものだ。当時の私は骨と皮、かろうじて筋肉がついた貧相な体で構成された学生だった。日本人離れした堀の深い顔立ちだった。自慢になってしまいが、女学生にはひそかに人気があった。とは言え異性に奥手であった私は恋多き青春を送っていたわけではない。

そんな私の外見に興味と行為を持ち、話掛けてきてくれたのだ。私は舞い上がり、誤解を恐れずに言えば、来るもの拒まず、去る者合わずであったから。妻の理由には感謝だった。妻は外見として花蓮であり、明るい性格にも関わらず、男経験が殆どなく、実は清純であるとわかり、私が恋に落ちるまでに時間はかからなかった。私たちの交際は順調であり、巷でも噂の男女となった。

三十歳で二人の子供（五歳の男の子と、四歳の女の子）がいたので、家計と将来の貯蓄を懸念し、夫婦共働きで生計を立てていた。土地柄としては、非常に長閑な場所であり、他県の方々は火山灰で生活が難航するのではと質問されることが多いが、実際はほとんど目にする機会はない。ベランダに干してある洗濯ものに火山灰が付着することもなければ、水道水に混入しているわけでもなく、ごく普通の生活が可能であった。桜島は私に説明不能な力を与えていたと考えられる。漠然としすぎているエネルギーを信じて、私は家を建てたのだ。若気の至りであっても、間違っではいなかった。

そう、普通という言葉で幸せは図れないものの、今思えば、一人で生活していた時期と比べて非常に恵まれた環境で生活していたと思う。私は幼少期も含め平和な家庭で人生を送ることができる運の良い男だろう。これは長い年月を経た今でも揺るぎない思いだ。

ある日、異動の命令があった。左遷と言えるほど地位はなかったのだ、まぎれもなく異動だった。私は命令が下ると、家庭から離れ一人ではらく生活していくのも悪くないと感じていた。子供と触れる機会も多くもっていた方だと自負しているし、努めていた会社の命令とあれば、妻も承諾するだろうと考えていたからだ。それでも心底を語ると、子供や妻になぜこの場所にいないといけないのかという思いをさせたくなかったのだ。過去の実績よりも、未来の生活に自信が持てなかった。私には、もう少し樂觀的な精神をもっている必要があった。

異動先は東京であった。実家の直近くであったものの、単身赴任という形で世田谷区のマンションを用意されていた。実家から近い、

それでいて一度も足を踏み入れることがなかった巨大都市。三十路にして憧れを抱き、得体の知れない期待から、私は旨くやれそうない気がしていた。恥かしながら、初めて上京する若者の精神を受け付いでいたのだ。私の五十年間の人生でも中々味わえないものだった。北東へ向かう電車に乗り込んだ時は、家族を忘れ、仕事を忘れていたのは正直な心境だった。不思議な体験については後項で述べることにする。

Q2、期待を込めた異動先での仕事の変化はあったか？

九州での業務は、工場で車の製造を行っていた。私の勤めている会社は、いくつかの製品は全国展開されていて、海外でも評判の良い車種を扱っていた。入社当初は検査や評価を行っていた。流れ作業に近いものはあったし、仕事を黙々とこなすだけでは、成長せず、製造しているものがどのように造られ、どのようなものが必要であるかを探求し続けた。いずれは主任を任され、幾人の部下が付くようになって、威張らず、的確な指示をしていたと思う。自負ではあるけども、上司や部下から仕事のやり方に対する矯正依頼はなかったことから、こう書かせてもらう。業務内容は、本社から設計データを送られてきてから検討を行っていた。部品の発注や、工場のシステムが対応できるか等を担当していた。

東京では本社での業務となった。現場の工場から、真新しい巨大な事務所に異動した私は、環境ではなく、働いている人物の人格の変化に戸惑ったものだ。私はその設計部署に異動し、製造から設計という変化があった。設計に移行することに対しては、抵抗なかった。主に速度メータやエンジン等の制御を任されていた。私が担当していた部署も評価が高く、設計データも標準化され、素人でも理解可能なマニュアルがどこにでも用意されていたから、無から有を作成するのではなく、要所に新しい情報を組み込めば製品として出荷できるようになっていた。私は少ない間でノウハウを自分の物にして、設計補助の立場でプロジェクトに参加した。あっという間に開発が完了し、休む間もなく次々と新しい案件が舞い込んできた。

ある社員が新たなアイデアを取り入れようとプレゼンテーションしても、間に合わない程、開発期間はタイトとなっていた。顧客の要求から小規模なカスタマイズをすれば莫大な利益を見込める時代だった。但し、どれも私程度の立場であれば、少しの応用で前のプロジェクトと同じ作業を繰り返すような退屈なものだった。

そんな鬱屈した精神とは裏腹に、私の以前居た九州の工場も自動化が進んで、会社は黄金期のピークとなった。派手に投資しては何倍もの利益が返ってくる。先駆者が巨万の富を得ていた。

私は欲が出るようになった。楽をして稼いでいる自分に憤りを感じていたのだ。或る種損をしてしまう性格だと思う。古いものを付きつめて深めていくような作業ができない。新しいものを取り入れるフィルタに過ぎないといえばそれまでではあるが、当時はそんな自分であったと思う。そのような私は会社のシステムに、ひそかな反発をするようになっていた。会社の経営に口を出す勇氣はなかったものの、製品を設計する一部のプロセスを、私なりに個性を出して変化させようとしていた。今にして考えると、大げさなものではなく、エンジン制御のデバイスと、設計ロジックを変更し、それにちなんだ周辺回路を構築させただけのプロセス変更だった。芸術家はあふれる才能を駆使して若くして勢いのある作品を作り出すが、大期晩成の私は三十にもなってようやく自分の考えたものを世に出せると確信があったのだろう。プロジェクトで一緒になったCは新人であった。Cは私の設計思想を大いに賛成してくれていて、開発は順調に運んでいた。水を得た魚だった。

Q3、それらの事象は、不思議な経験や過去への償いへの関係はないように思われる。むしろ成功への仮定を自画自賛しているとしたか映らない。本題からかけ離れているのは、意図的なものなのか？アンチテーゼである。順風万帆な時期を強調することで、後の事象を説明しやすくしているだけである。私のわがままにもう少し付き合いたい。

山ほどもある特許審査をすり抜けた。同部門、他部門へ私の設計思

想を展開し好評を得ることが出来た。ありふれた内容であると思われた内容が、日を増すごとに光を浴びた。工場で造られた製品は試作段階で物となり、最終段階での検証でも問題は全くなかった。あえて記載できる内容としては、私の設計は低燃費に効力を発揮するものであり、車種を仮にAという黒いボティーのバンだとし、Aが市場に出回る直前に夏季休暇迎えた。休み前の宴会では、私が東京に來たことに対する歓迎会として、本社の社員が私を始めて快く出迎えてくれたものとなった。その時に言ってくださった言葉は今でも思い出すことは容易だ。私は一週間の休暇を利用し、Aを試乗した。気分が高揚し、一時間程度の運転で引き返そうと思っていた当初の予定を、家族のいる九州まで行く計画となった。妻を二人の子供を、私が主で設計した車で迎えに行くのを想像してスピードを上げた。私はエンジンに負荷を与えて耐久性を検証するため、あえて高速道路をあまり使用せず、道の舗装が行き届いてない悪路を選択していた。その年になって初めて日本にもこのような道があるのかと思わされるような場所も多かった。何度も引き返しては別の道を進んだ。

日本で一番人口が少ない都道府県である鳥取県のある山道を走った。どの場所であっても人が集まる場所と過疎化している場所は存在すると考えていたから、鳥取県が特別であるという意識はなかった。

私は二十時間休みなない運転で疲労していたから、方向感覚が鈍り、森に囲まれた悪路をただ進んでいると、偶然小屋のある場所を見つけ停車した。ラジオが届かない場所で、当時携帯電話もなかった時代ではあったが、妻には公衆電話で京都からそちらに向かっていると伝えておいたのであまり心配も掛けず、ちょっとした食糧も買い込み、ガソリンも半分以上は残っていたし、たまたま見つけた小屋は施錠もされていなく、誰か住んでいる様子もなかったから、私は当然のように使用させてもらった。恐らく三時間ぐらいの仮眠を取っていたのだと思う。辺りはすっかり暗くなり、それに加えて霧も

発生していて、視界も悪かった。体力は回復したものの、霧の中でドライブして死亡事故を起こした知り合いも存在していたことから、私はその日に出発せず、アルコールを摂取すると、再び眠りに落ちた。日刺しと寒さで起こされた私は、小屋の中を見渡し、家具というものが一切存在しない場所を再確認した上で出発しようとした。しかし、Aはいくらエンジン을 掛けても機動しない。私はバッテリーを使い切るようなミスをしていないと確信があったが故に、エンジントラブルであると判断した。とは言え、要因が見つからなかった。検査で使用している測定装置もなければ、交換する部品だって存在しない。それに加え車が通る道からだいぶ離れていたから、人が通ることも皆無だった。私は、自然の真ただ中で人は無力であると、他人ごとのように考えるだけだった。食糧を断たれると、私は小屋と共に衰弱していった。もし、元気があるうちに自分の足でさ迷っていけば、人を発見し、事情を説明すればヒッチハイクができたかもしれない。

小屋で私が発見されたのは三日後だった。地元の農民が偶然通りかかったからだ。妻は搜索願を出していたようだが、場所の特定が漠然とし過ぎていたし、車のナンバーだけでは決して直には見つからない。私は意識が朦朧とした状態で病院に運ばれていた。まともに話が出来るようになると、Aはどうなったかを質問した。私の救出に携わってくれた関係者は口を揃えて何の事を言っているのか理解できていなかったようだ。私が途方もなく場違いなことを発言している状況を、私だけが知らなかったのだ。自分の意見で人が離れていく状況を目の当たりにすると、今までの人生で私のやってきたことは本当に正しかったのかと走馬灯のように思えるのだ。そう、誰もがAの存在なぞ確認していないのだ。

古都恋情（上）

京都は則之が行きたいと願っていた場所だ。明日香も修学旅行で京都へ行きそびれていたから、思いは強かった。文化的な遺産が数多く残されている場所とは別の、人を引き寄せる魅力が凝縮された土地というイメージがぼくを離さなかった。

ケンジは舞妓さんと絶対仲良くなると気合が入っていたし、清美は風景を堪能して作品に生かしたいという熱意にあふれていた。ぼくは車内で熱を帯びた皆を好ましく見ていながら、ある計画を立てていた。

皆が出した結論は、それぞれが自由行動を取ることであり、滞在日程はどうでもよくなっていた。携帯があれば得に問題はない。百万篇近くの旅館に決定し、部屋に各々の荷物を格納すると、現地解散をした。武史は早々に街へと繰り出して行き、清美は金閣寺や清水寺へのアクセスを調べるため、書店に向かった。則之はパソコンの準備があるので、部屋へ入って行った。ある計画を実行するために、ぼくは明日香を近くの個室ダイニングに誘った。

銭湯で疲れを癒し、部屋でたばこを吸いながら三十分待っていると、髪の毛を後で束ねた明日香と合流した。

ワインのボトルが二本空く頃にぼくは計画を伝えた。

「則之って童貞なの知っていた？」

「まじで！」

驚かないでと制した。彼女も作ったこともなければ、キスをしたこともなければ、手をつないだこともない話をした。

「あの人智也と同じ年でしょ？」

目を見開いた明日香の顔は、ぼくの顔に近づけた。

「ああ、三十路」

明日香の反応は今後の展開を不安にさせるものだった。陰口が増幅してしまうと収集がつかなくなる。

「天然記念物だよね。言われてみれば納得はするんだけど」

「彼なりに、この旅では気合いが入っているんだよ。メガネをコンタクトにしているし、ファッションも良くなっている」

考え込んでいた。そんな話はどうでも良いといった態度だった。

「ぶっちゃけ秋葉系なの？」

「それに近い」

「なんで則之と友達になったの？」

「大学が一緒だったんだ。ぼくも技術系の会社に勤めることになったわけだし、共通点があったし」

「秋葉系との共通点ということは智也も同類ってこと？」

恐る恐る訪ねる明日香は、化け物を見るようだった。

「ぼくは違うけどね」

一緒に旅をしている内は言わなかったけれども、多数の女の子がオタクや秋葉系を遠ざけているのは知っている。明日香の場合は、現実を見据えないで怠惰な生活と努力も行わずにアイドルの女の子と架空の女の子を追っかけている彼らが許せないという。彼女が出来ないことを、女のせいに行っている態度も気に入らないらしい。すべてのオタクや秋葉系そうではなく、悪気あってやっているわけではないことを許容しないのだ。ぼくは説得するのに時間が掛かりそうだと、セブンスターに火を付け、明日香もメンソールに火を付けた。

イケメンは嘘を付く可能性が高く、オタクや秋葉系は素直である。

イケメンは浮気する可能性が高く、オタクや秋葉系は一途である。

イケメンはイベントを忘れる可能性が高く、オタクや秋葉系は誰よりも覚えている。

イケメンは女の子に対して手が早く、オタクや秋葉系はプラトニックである。

イケメンはお金をせびる可能性が高く、オタクや秋葉系はお金を借りたりもしない。

少しでもメリットを伝える作戦だった。統計をとったわけでもない

から、ぼくの思い込みも強い。酔っているから多少のズレも常識として通じてしまう期待に掛けた。

「言われてみればそうかもしれないけど」

「わかってくれたかな」

明日香は過去の記憶を吟味していた。明日香の恋愛傾向を聞いてきた判断から、男に騙された経験は山ほどある。自分から好んでそういうタイプの男を好きになってしまいうし、いささか嫌気がさしている。

「悪いところばかりではないと」

「ああ、絶対彼氏になれば大切になってくれると思うよ」

ぼくは声のトーンを低くしていた。薄明かりの個室が手続って、雰囲気作りができた。

「でね、明日香に則之の初めての相手になってほしいんだ」

女の子に対して言うべき言葉ではなかった。ぼくの鼓動は加速していた。

「初めてとは、則之の童貞喪失相手ってこと？」

「そういうことになる」

「いいよ」

「そうか、よかった」

計画は進行し始めた。

「則之は私でもいいのかな？」

「安心してくれよ。則之は誰とでもいいからやりたいとは思っていないから。明日香が相手だったら大丈夫」

根拠のない回答だった。ぼくのなかでは明日香が承諾してくれれば、この作戦の半分以上は成功したと確信していた。

「デートはぼくがセッティングする。明日香はタイミングを見て則之を誘惑してほしい」

「わかったわ。智也がそうしたい理由ってなに？」

「友達の救済だよ。それだけ」

「友達思いなんだね。普通の女だったら成立しないけどね」

「明日香がわかってくれて嬉しいよ。OKだしてくれた理由は何？」

「面白そうだから」

「十分な理由だな」

「智也のほうが楽しんでる」

「そんなことないよ。なるべく他のメンバーには言わないように」

則之と明日香には、京都を観光するデートをセッティングし、ぼくは則之に明日香と計画していることを伝えなかった。伝えてしまうと、妙なプライドが芽生えて、次の行動に壁を作ってしまう。あるいは、次の行動に出る前に億してしまい、実際の場面でうまくいかなくなると懸念していたからだ。ある程度の種を巻いておいて、後は見守っている方が得策だと考えた。

童貞を捨てたい男に、誘惑してくる女の子を否定する力はないからだ。記念的イベントと捉えつつも、三十路まで継続している童貞を、好きな相手であつたり、結婚する相手にのみ捧げる程の余裕は微塵もないはず。童貞をクリアすることで新たに見えてくるものがある。ぼくは救済しているんだ思い込んで、眠りについた。

翌日、ぼく以外の四人が外出してしまうと、ぼくはのぼせるまで銭湯に漬かっていた。百万篇という場所は、ぼくの好きな作品に出てくる場所でもある。百万篇イコール無限ループであると考えつつ、則之と明日香の幾末を思い浮かべた。もしかしたら付き合うかもしれない。そうなったとしてもぼくは快く応援できる。そもそも似た者同士が付き合う必要性はないのだ。自分の足りない部分を異性の恋人で補い、協力している姿こそ自然であると思っていた。

身支度をする、街に出た。人々の会話から、おち付きのある関西弁を聞いて和んだ。都会的な街並みは大部分が東京の都心とさして変わらず、大部分が寺や神社、時代劇に出てくるような木造の民家でできた神聖な場所と想像していたから、驚きだった。近くにある大学をぼくの通っていた大学を重ねていた。しばらく歩いていると、昼食をとるのに、店に入った。山盛りの九条ネギが具とされている

醤油ベースのトンこつラーメンを食べた。濃目のスープに生の九条ネギの新鮮な触感のマツチングは絶妙だった。替え玉を加えて千円以内で済んでしまうと、得をした気分だった。それと同時に眠気が襲ってきた。脳がぼやけてきて、それでいて町並みを落ち着いて観察することが出来た。

ぼくは目的地もなく随分進んでしまった。戻ろうと歩んだ道に見覚えがない。自分の意思で観光した末が迷子ってどうなんだ、ダメ男じゃないかと自問自答した。冷静さを失ったぼくは、看板に知らない土地の名前を見つけると、後を振り返らない状態で後ずさった。何かに当たる衝撃があった。

「痛いやないけ！」

低い掠れた声でした。角がりの小柄なおじさんの顎に、ぼくの右肩が当たった。目付きが悪く、サングラスを掛けている。蟹を思わせる体型で、ブルゾンのジャンパーがはち切れんばかりだ。チェックの広いズボンに手をいれている。眉間に皺が寄っていた。ぼくは緊張し姿勢を正した。

「すみません。不注意でした」

ぼくが謝罪すると、怒っている様子もなく、安堵した。

「関東の人かいな？」

「ええ、東京から来ました」

「どないしたん？さっきから挙動不審やで」

値踏みされていた。穴があく程見られていた。

「別になにも」

帰り道に迷った姿を見られていたと思うと、羞恥心が湧いて来た。

「あっ、流行りの通り魔なん？」

「まさか」

「真顔で言われると、ほんとや思うで。ノリツツコミで返さな」

ガッハッハと豪快に笑ったおじさんは、ブルゾンの内ポケットから、右手だけで、みたこともない黒いたばこを取り出し、ライターで火を付けた。このおじさんにカッコ付けてもしようがないなと思

った。

「実はこの場所来るの初めてで、迷っています」

百万篇の交差点を訪ねると、子供に教育するように教えてくれた。おじさんは近くまで同じ道やないけと言って、二人で歩いた。ざっくりと旅の話をした。

「琵琶湖に行ったのかい。ええとこやな。こちら辺では金閣寺や。いたずらするんやないで。国宝やからな。大阪で食い倒れてもええ。女という意味も含めてやな。寂しかったら奈良で鹿と話しこんでもええ。その他見るとこは一杯あるで」

「関西っていい場所ですね」

「当たり前やがな」

聞いてもない話をする目の前のコテコテ関西人おじさんに好意を持っていた。少しの会話で、漲っている活力を感じ取ることができて、それが眩しかった。旅先では、ちよつとしたきっかけがないと、見知らぬ人と知り合えない。気にせず話しかけたらええんやと言ふ考え方を持つおじさんが気になりだした。

「おじさんは何をなさっている人なんですか？」

「おじさんって、榊原鉄男っていう名前があるんや」

眉間に皺が寄った。サングラスから透けて見える目は鋭く、剃刀のような雰囲気と威圧感が同居していた。ぼくは瞬時に榊原さんと正した。目の前にいる男は、計り知れないプライドもある。

ズボンのポケットから腕を抜くと、左手には小指が欠損していた。ぼくが確認すると、榊原は直に左手を元の場所に戻した。極道だった。ヤクザと形容しないことに拘りがあるようだったが、多弁にはならなかった。ぼくは聞きだすエネルギーが湧いてこなかった。

「一般人にはよう見せへんわ。なるべく隠しとる」

事務所はそれ程遠くないようだった。

「こんな格好しているのはな、どこでもやり合えるよう備えているんや。背広なんか着ていたら、動かれへん」

「なるほど、そうでしたか」

ぼくは武史の話を思い出した。水商売の近くにヤクザが存在する。いざこざは絶えないのだ。関西人おじさんという印象は、ぼくを怖がらせないために、榊原がきさくな態度を演じていたのだ。自分の鈍い感覚を呪いたかった。

「不況は俺らの稼業も同じや。焦らんと、次見つけたらええ」

「はい、ありがとうございます」

「ほな、俺はここで。兄ちゃんもう迷うな。後、ビシツとしろな、そこら辺の詐欺師にかもられるで」

たばこを捨て、靴で踏むと、榊原は街に消えていった。体が後になって硬直してきた。ぼくはしばらくその姿を追っていた。

旅館に戻ると、清美だけが帰ってきていた。いくつかの景色をデジカメに収めた映像を確認し、旅館の玄関口となる広間で仕事をしていた。こっそり明日香と則之がデートしている話をした。

「あの二人でそういう関係なの？」

「付き合っているわけじゃないけど、いい感じなのかな」

「詳しく教えてよ」

仕事を投げだした清美にぼくの計画をすべて話してしまおうか迷った。踏みとどまるにはそれなりの根気が必要だった。

「これからなんだ」

「うん、でも今日は戻ってこないかもしれない」

「急展開すぎない？」

「わからないよ」

いたずらっぽく言うと、清美と夕食を取る事にした。旅館の板前が振るった和食だった。清美はデジカメの映像をぼくに見せながら今日あったことを話した。ぼくは短い間でも付き合っているみたいだと思った。

朝になると、明日香からぼくの部屋に訪ねてきた。ぼくは二人の行く末を思うと興奮してあまり眠れなかった冴えない頭での対応とな

った。朝帰りしながらも二人で一緒には戻ってこなかった。

話によれば、デートは終始、則之がリードしていたらしい。ネットで京都を検索していたし、文化遺産と称された場所では蘊蓄を披露していた。デート代は則之持ちとなり、会話も弾んでいた。明日香は則之の健気な態度に好感を持っていた。真っ白なキャンパスを汚してしまうのではないかと悩んだという。ぼくも純情な処女とデートすればそのような感情が芽生えてくるのだろうか。

ぼくはその話を聞いて、適当に行く先を決めて付き合っていた経験を思い返した。本来のあるべき姿を則之の行動から学んでいた。お酒が則之に力を与え、則之と明日香は、寺の見えるホテルで結ばれた。ぎこちない会話とは裏腹に、則之は下手ではなかったらしい。アダルトDVDでいろいろ研究していたのだろう。長い時間をかけて発射した則之は落ち着いていたという。

「そうか。ついに男になったんだね」

「うん、わたしは帰ろうかって言ったら、一人で考えたいって言うてさ。心配すると、余韻に浸りたいんだって」

「付き合うとかの話はなかったの？」

「それはまだ早いでしょ」

「やっておいて早いはないのでは」

ぼくと明日香は笑い合った。

武史が昼過ぎに帰って来た。舞妓さんと一夜を共にする夢はかなわなかったものの、話は盛り上がり、電話番号の交換まで漕ぎ付けたという。控え目な口調の関西弁がたまらないと何度も絶賛した。露出がまったくない衣装でも、キャバクラ嬢よりも断然セクシyalで、もう少し通えばものになると自負していた。

則之を待っている時間を持て余し、夕方になっても戻ってこない様子から、ぼくは携帯に連絡を取った。ワンコールを待たずに留守番電話サービスに繋がった。明日香が連絡しても同じ結果だった。則之を除いた皆が各部屋へ戻っていくと、心配しているから戻ってき

てくれと、成るべく重たい内容にならなくしたメールを打って待った。夜になり、深夜になった。

ぼくは痺れを切らして、一人一人の部屋を訪ねて言った。

「則之が消えた！」

古都恋情（下）

次の日になったら、何事もなく戻ってくると樂觀的になれなかった。則之は連絡もなしに失踪するタイプだとは思わなかったからだ。対人恐怖症の過去を告白したものの、ここにいる仲間を信頼していた。他人に迷惑をかける行為だけはしないと、誰よりも敏感になる性格だ。

ぼくの部屋に武史、明日香、清美を呼んだ。メールの内容まで回覧し、数回電話しても繋がらないことを話した。

「人騒がせだな。則之は行先も言わずに帰ってこないのか？」

武史が尋ねると、ぼくと明日香は顔を見合わせた。言い出せなかった。

「昨日は明日香さんとデートしていたんでしょ？それから姿が見えなくなったの？」

「えっ、そうだったの。則之もなかなかやるな」

感心している武史は嬉しそうだった。ぼくは隠していてもしょうがないと感じた。

「実は、則之はその後、明日香と一夜を明かした」

「マジで！二人の関係はそこまでだったのか」

清美も口を出さずに驚いていた。明日香は下を向いていた。全く喜んでいない明日香を見て、武史は話を掘り起こせなかった。何か裏があると言った視線をぼくに向けてきた。自分の一言で政治が、任期が変更される重圧を抱えた総理大臣の気分だった。手足は冷え切っていた。

「実は二人がそうなるよう、ぼくが計画を立てたんだ。則之は旅に出る前、彼女を作るためにがんばると意気込んでいた。皆とコミュニケーションして、童貞を卒業する話までしてくれた」

童貞という言葉では武史も清美も驚かなかった。

「何となく話は読めそうだな」

「ああ、でも実際はきつかけがないと、いつまでも卒業できないのではないかと心配した。それで明日香に頼んだ」

「明日香は承諾したの？」

清美は引いていた。自分の中には存在しないセックスボランティアを露呈されている状況は異質だったのだろう。心の中で軽蔑しているのかもしれない。明日香は静かに頷いた。

「ちょっとしたノリもあったの」

「それで出来ることじゃないと思うけど」

「でも則之は純粹で良い子だから、一緒にいる時は本当にいいのかって思った」

「最終的には則之と寝た。ならば、則之も同意していたんじゃないか？」

ぼくも聞いてなかった話の答を待った。則之が失踪した原因が判明する。

「同意していた。わたしがけしかけると、躊躇いもなくホテルに行くことになった」

疲れた表情をした清美は休息を求めている。

「した後も、考え込んだ様子はなかったわ。初めての相手に上手くできなかったと思うけど、ありがとうと言ってくれたし」

「そうか」

武史は遠い昔に体験した童貞喪失を思い返していた。ぼくも同じ心境だった。初体験に意味はそれ程ないと思えば終わってしまう。少なくとも明日香は同じだと思っっているはずだ。初体験をソープランで済ます男もいるからだ。ぼくはそういう人も、付き合った人と済ませた人も変わらないと思う。年齢を重ねていくと、告白するのに必要な勇氣は増幅する。呪縛から逃れたければ、手段を選ぶべきではない。

「済んだことだ。今日の朝に戻ってこなければ探そう」
満場一致だった。

警察には届けない。ぼく達は半分以上が職を失っている。いい歳し

た人間が働かずに旅をしていれば、警察は則之ではなく、まずぼく達を調査するだろう。

原色の水色の絵具に彩られたような空と、前方には地平線が広がっていた。

どこかの道を歩いていた。永遠に続くであろうアスファルトの道はカーブがない。

前に進んでいるか、後退しているのかさえ認識できない。場所を示す看板も、人も、建物もない。道を外れれば、広大な砂漠があるだけだ。記憶が途切れた。

カウンターに見知らぬ男が隣に座っている。既視感があった。いつか見た夢にそっくりだった。

「君は失業したんだね。顔に自由だって書いてあるよ」

「前と同じこと言わないでくれ」

「えらい剣幕だね。人違いではないか。君を知らないよ」

「ぼくは面白くもない話を二度されるのが大嫌いなんだ」

男は手を広げて参ったねと言った。やれやれと心で呟いた。

カウボーイが入店した。義足のカウボーイさんと出迎え、何で知っているんだいと驚いた。男もおいらのことも知っていたんだよ、不思議だろと言った。ぼくを小ばかにしているようなアイコンタクトをとった。完全にぼくは知らない人になっていた。

「喧嘩になっても銃だけは使うなよ。殺し合いなんて最悪だ」

「兄ちゃん。そんなアンフェアなこととはしたことはないよ。なあ？」

カウボーイは男に同意を求め、男も頷いた。よくいうぜと心で囁いた。

男が半端な旅人を良く思っていないことも、カウボーイが凍結して切断了た足の話も知っていた。ゲームをリセットして、コンテニューした気分だった。決して良いものではない。話すことがなかった。男とカウボーイとぼくの繋がりなんてそんなものだった。

「ねえ、すべての始まりという場所はどんなところなんだい？」

カウボーイは答えなかった。男が代わりに答えた。

「心の中の比喻だ。心が旅をすると決意すればすべての始まりという場所から来たと言える」

「じゃあ、すべての終わりは、心が旅を終える決心をした時に辿りつく」

「ものわかりがいいじゃねえか」

無言でピスタチオを頬張っていたカウボーイが加わってきた。ぼくは銃への警戒を怠らなかった。また飛び起きるのは御免だ。

「不思議な語呂合わせだな。ここでは何でもそうなるのかい？」

「さあな。昔から使っているからわからない」

「白けちまってるぜ、話かえたらどうだい？」

カウボーイは男に向けて言った。この二人はぼくを置いてけぼりにする癖がある。よそ者意識が強いのだろうか。当たり前だと意識し、次に置いてかれても落胆しないようにした。

「君は何もないのに、他人の世話をしている。しかも裏目に出ている」

「あなたは占い師かな？なぜわかる」

「さあな。でも顔に書いてあるよ、ほんとに」

当てずっぽうでも二回当てられると顔に書いてあるのではないかと疑いたくなる。見渡しても鏡はなかった。暴れたくなった。

「ぼくは、他人の世話をするのが久しぶりだったんだ。金持ちになって貧しい国に寄付したい。災害に合った場所の復興を支援したい」

「ずいぶんと欲張りなんだな」

「ああ、良いことをして感謝されたいのさ」

「偽善者だな。ここでは口に出さなくても人の命を救い、支えているやつばかりだ。六五歳を過ぎた老人よりもいる」

「何か言いたげだな」

話を聞いているカウボーイは泣いていた。人の泣きどころは共通している場合が多い。

「つまり、誰でもしていることさ。恥ずかしくて動物でさえいわな

言葉だよ。何もないといったほうがまだマシだ」

「前にも言ったがぼくが気に入らないのか？」

「そうじゃない、君はおいらと会うのが初めてだから忠告しただけだ」

また会った時も会うのが初めてになるのだろうか。

「覚えておく」

戦争が終わるとすれば、こんな些細なやり取りで、片方が戦いを諦めてしまう場合なのかもしれない。

「おいらは数年前から、すべての始まりという場所から来た。数十年後はすべての終わりという場所に辿り着くだろう。様々な人に出会った。旅の途中で死にかけたものを何回も救った。知っているかい。死神はの聲は相手がおいらを信賴していれば心の奥から聞こえるんだ。要は、人間の本性なのだから、想像できるだろう。ささやいてこう言うんだ。

あいつは生きるか死ぬかの選択をしなければならない。救いたいと願うならば、お前の命を掛ける準備をしておくことだ。」と」

男は話を聞く態勢になり、薄茶色の液体を飲みほした。

「命を掛ける？」

「これだよ」

カウボーイはシャツを捲りあげると、胸に刻み込まれた傷を見せた。内臓のいくつかを失って、分け与えたという。

「旅をしているうちに知り合った人間を救出した」

「その後はどうなったの？」

「後は物語るほどおもしろものじゃない」

ぼくは同情していた。

「これも捨てたもんじゃないぜ、体は軽いし、おいらは女も抱けるし、歩ける、旅もできれば、見えなかったものが見えてくる」

カウボーイは話過ぎたと思ったのか、急に口を閉ざした。小袋から、干物を取り出し、ナイフを使って器用に食していた。男はぼくの方に向きなおした。

「どうだい。カウボーイは命がけで人を救っている。それでも、行道もせずに偽善者ぶろうというのかい？」

「わかったよ」

どこからか、ローリングストーンズの『夜をぶつとばせ』が流れてきた。カウボーイはさらにピロシキを注文した。

「君はどこから来たのかな？」

「自分の心から」

「ずいぶん明確なんだね。前にあった時とは違う答えだ」

ぼくは飲んでいた味のない飲み物をぶちまけてしまった。

「前にあったの知っていたのかい?!」

関西弁での強力な突っ込みをしても、男は顔色一つ変えなかった。

「さて、俺は行こうかな。マスター、この男にデビットボウイの『すべての若き野郎ども』を送ってくれ」

ギターリフの前奏が始まると、男は立ち去っていった。前とは微妙にずれた内容だった。なぜぼくはこのような夢を見るのか。必要以上に取り入れてしまった情報が、脳で消化しきれず、眠りについた状態で嘔吐しているのか。

カウボーイは投げ縄を取り出し、ぼくの首に引っかけた。強刃な腕の筋肉が盛り上がると、ぼくの首は瞬く間に絞められた。今度は明確な苦痛が襲ってきた。

飛び起きた。早く起きてしまったらしい。朝の五時は静寂だった。この時間に起きて出勤する人が気の毒に思えた。朝の八時とは明らかに時間の流れは違う。一日を有効に使えると前向きに考えるしかない。目が覚めてしまうと、急速に血液が脳全体へ送り込まれ、ここは京都で、則之を探さなければならないという使命感が湧いてきた。

ぼくの間では、則之の初体験が素通りになってしまう気がするのだ。こんなものに憧れを抱いていたのかと落胆するかもしれない。

い。それでも慈悲の好意であると悦に入っていたのだ。但し、それは則之にとって人生の中で何よりも意味をなすものであった。

皆が集まったのは朝の八時だった。朝食をキャンセルし、部屋に則之がいないこと、メールの返信もないこと携帯に連絡ないこと、旅館に連絡がないことを確認すると、男性と女性二手に分かれて搜索することになった。明日香は泊まったホテルとデートコースを、清美は京都の名所を探すこととなり、ぼくと武史は街中を探すこととなった。則之の顔写真は一同の携帯にダウンロードしてある。

外は明るくなっていた。この巨大な古都を搜索するのに、自分たちが及ぼす影響がどれだけちっぽけなものであるか、どれだけの意味があるのか考えるだけで眩暈がしたが、誰も口にださなかった。何かあれば逐次連絡するよう約束し、ぼくと武史は旅館を出た。近所の知っていた場所をあつという間に通り過ぎ、歩く速度が小走りへと変化した。

会社へ向かう人々はぼく達が探している仲間がいると説明しても、協力的にはなれなかった。他人の行方不明よりも、職場での遅刻しない信用を優先しているのだ。苛立ちを覚えてもしようがないと決心するまでには時間がかからなかった。手当たり次第に声を掛け、見知らぬ土地でさ迷っているぼく達へ親切に対応してくれる人もいるからだ。或る人は警察に届けるべきだと意見し、情報通の二十四時間営業の店を経営している店長を紹介してくれたりもした。ぼくたちは店長を訪ね、則之を見ていないと知るとコンビニエンスストアを訪ね、宿泊施設を訪ねた。冬の気候でも額に汗が滲んでいた。武史がしている香水もやがて汗の匂いに変わっていった。振り返った女の子を無視して探していた。

時間はぼく達に味方をしてくれなかった。あつという間に昼となり、疲労を覚え始めれば夕方となっていた。もっと良い方法を考えようとしている時だった。

榊原鉄男がふらふらと歩いていた。サングラスを付けた小柄なおじ

さん。榊原はダークスーツを着込んでいた。近付いてきた。

「兄ちゃん、えらい形相でんな？」

「先日はどうもで」

武史はぼくに眼で訴えかけた。

「この人は榊原さんで、道に迷っていた時に教えてくれたんだ」

「悪いがおっさんに付き合っている暇はない」

言い捨てると、蔑ろにされた榊原は極道になっていた。榊原の威圧感が武史に対して瞬時に態度を改めた。ぼくは紹介して良いものか考えていたので都合だった。ややこしくしている状況ではないのだ。強者に弱者が屈する場面も悪くないと思った。

「沢村武史と申します。智也がお世話になったみたいで」

「ええがな。俺が好意でしたもんや」

色男やなど関心した榊原は、豪快な笑いをした。武史は笑っていなかった。サングラスの奥に控えた目は気さくな態度を演出しているにも関わらず、驚くほど客観的に状況を見ているのだと忘れなかった。

「俺の質問はどないしたんや？」

「あ、えーと、ぼくの友達が行方不明になったんです。その人を探しているんです」

「えらい物騒な話やな」

呑気な口調で言うと、榊原は黒いたばこに火を付けた。火が沈み、辺りが暗くなっていると、榊原の存在が不気味に見えてきた。

「俺達はそいつを探しているんで、これで失礼します」

武史はぼくに行くぞと目で合図をすると、榊原はちよいとまてやと制した。

「何か用ですか？」

「俺はな、ここら辺を仕切っている極道や。探している奴の情報を言うてみ」

心強い味方だと思ったのは僕だけだった。武史は眉間に皺を寄せているだけである。

「俺達で探します。あなたのような人に仲間の情報売ってしまったらなにされるか分からない」

絶望的だった。榊原という極道に軽い喧嘩を売ったのだ。確かに則之の情報だけではなく、ぼくや武史の情報を売ってしまったら、悪用される可能性もある。個人情報闇のサイトに売り買いされて商売が成り立つ時代だ。でもここで険悪な空気を作らないでも、もっと違う断り方は数えきれないくらいあったはずだ。ぼくはフォローする言葉を考えていた。

「突っかかってくるやないかい。俺が気に入らないのか？」

榊原は静かな声になった。不気味なくらい抑えた声だった。投げ捨てたばこは、アスファルトに叩きつけられ、残り火は衝撃で消火した。表情は怒っていない。悪い予感だけが先行している。

「あなたが気に入らないわけではありません。しかし、ヤクザは嫌いだ」

震える体を抑えるだけで精一杯だった。この先、ナイフか拳銃が飛び出しても偶然ではない。武史には、榊原の裏に控えている裏組織の存在がわかっていないのだろうか。二人ならば一人のおじさんに勝てると思い込んでいただけならば、直にでも否定したい。

「兄ちゃん、こんな見知らぬ土地で二人とも死にたいんやな」

武史の表情は引きつっていた。榊原はため息交じりだった。但し、顔色が亡くなっていた。仲介する余裕があれば、ぼくはどれほど幸せになれただろう。ただこの場所を逃げることだけ考えた。

「俺は悪いこともしていないのに、あなたの同業者に殴られた。それだけだ」

榊原はそれを聞くとポケットに両手を入れた。やばい、夢にまで出てきた武器を取り出されえる。その話は今関係ないだろう。お前を襲ったのがサラリーマンだったらぼくに因縁をかけるのか。間違っている。思いが走馬灯だった。考えられても逃げるといふ行動がでない。

榊原はガッハッハと豪快に笑った。

「かなわんな。二人がかりでシメられたら俺なんかこてんばやで」
何が起こったのか認識するまでに時間がかかった。武史は言い過ぎましたと謝罪した。

「かまへん。見栄は大事や」

榊原はそう言うと、衣類に武器を所持していないことを明かした。
「敗北宣言させてもらいます」

潔かった。唾然とするだけだった。敗北宣言をしているのに余裕な精神は異質だった。計り知れない器だった。榊原が邪魔してすまなかったなという、武史は則之の顔写真を携帯で見せた。ぼくは反応を伺うだけだった。

「知らんな」

「もし見たら教えてください」

と言うと、武史は東京で使っていたホストクラブの名刺を渡した。

「稼いでいるのと違うんか？」

「いえ、そうでもありません」

「こんなところで油売っている場合じゃないんでないの」

「大切な仲間なので、見つかったら戻るつもりです」

榊原は納得していた。再び則之の写真を確認すると、榊原の携帯が鳴った。

「手がかりがあったら教えまっせ」

と言ってその場を立ち去った。携帯に出た榊原は恐ろしい剣幕で怒鳴っていた。声と言葉ですべてを制してしまうぐらい鋭かった。

丸一日食事もせずに戻った旅館には明日香と清美がいた。暗い表情を見ると、則之が見つからないことを暗示していた。則之とのデートコースを回り、泊まったホテルからは、直にチェックアウトしていたという。それ以上のことは掴んでいなかった。ぼく達の状況も伝えた。極道との武勇伝を自慢しない武史に、すごかったんだとフォローを入れる気力がなかった。生きた心地がしないのは、榊原と対面していた時ではなく、今の状況だった。議論する力もな

く、疲れ切った体に夕食を投入した。空腹なのに食べることが億劫だった。消化の良い食物が胃に凭れる感覚だった。落胆と眠気だけが支配した。もう探してもみつからないのではないかという話だけは避けていた。

皆はこれから先どのようなように則之を探すかの予定も定まらず、各部屋へと戻って行った。

則之の置いて行ったノートパソコンをチェックすると、部屋にあった荷物と一緒にバンの荷台へ格納した。もう戻ってこないと確信してしまった。

たばこに火を付け、呆然としていると、一二月の第二週が始まった時間に則之からのメールが届いた。宛先はぼくと武史と明日香と清美になっていた。

＜急に消えてしまつてごめん。もし心配掛けて探してくれていたら、さらにごめんなさい。

＜悪気はなかったんだけど、謝るタイミングを失ってしまったんだ。

＜旅を続けるよりもこうした方が良いと選択しました。

＜僕は今東京に戻っています。

＜皆より一足早く戻って、僕はこれからを考え実行すべきだと考えている。

＜といっても皆より遅れをとっている時間を取り戻すためなんだ。

＜明日香から聞いていると思うけど、それが原因で逃げたわけじゃない。

＜だから明日香を責めないでほしい。

＜僕にとってまぎれもなく大切な経験だったし、望んでいたことだ。

＜明日香が手助けをしてくれて本当に嬉しかった。

＜捻くれた考えもなく前に進める気がする。

＜彼女には僕に対する愛はなかったのもわかる。

＜それでも記念すべき日を迎えたことは、僕にとって大きなものだった。逃げたことに、

＜ちょっとしたきっかけを与えただけなんだ。

＜いろんなことを、もっと軽く捕えていれば、逃げたりもしなかったんだろうね。

＜でも、もし明日香が、僕に対してほんの少しでも恋人になる可能性があるとayingてくれ

＜るのなら、可能性を大きくするために僕はがんばる。

＜過ごした時間がとても楽しかったから。女の子と付き合うのはこんな感じなんだと思わせ

＜てくれた。掛け替えのない時間だった。

＜他の皆に負けないぐらい人とかかわり合って人脈を作る。

＜尊敬されるぐらいにビジネスを展開して、いずれは飯をおごるよ。

＜それまでしばらくの間待っていてね。

＜こんな貴重な経験ができたのは皆と出会えたからだと思います。

＜僕のがままを聞いてくれるのであれば、これからも連絡したり遊んでね。

＜それではおやすみなさい。

小さい画面に映しだされていた文字を何度も読み返した。ぼくは居てもたっても居られず、真っ先に明日香の部屋の前へ行った。謝っても許してくれるかわからない。そんなの、もう関係なかった。ノックをしようとした。中から泣いている声が聞こえ、それ以上の行動に出ることができなかった。ぼくは慰めの言葉も見つからず立ちつくしていた。

過去からの手記その4

Q4、Aは消えていた。という表現は盗難にあったということか？
正確な表現はできない。なんせ、私は小屋の中で起きているか寝ているか生きているのかさえ不明確の状態で、知らぬ間に消えてしまったからだ。Aのエンジン音も、人の足音も、レッカーされる音も聞いてはいない。車の設計に携わっていた私でさえ、起動させるのに匙を投げてしまったAが突如としてなくなってしまった。それだけだ。救出に携わってくれた関係者は、私がなぜあのような小屋に丸腰でいたのかを疑問視した。近くの民家がある場所まで二十kmはあるし、とても徒歩で行ける場所でもなければ、行く目的さえない。誰かに置き去りにされた説を皆信じていたが、私だけが納得できなかった。しばらくの間、私は命の恩人を疑い続けた。これから市場に出るAに対し、私の会社が開発した事実を抹消し、ある組織がテアダウン（他者の技術調査）を行って自社としてのものにする。それが目的だったのではないかと。

それらは、けっしてあり得ない話ではないのだ。私も以前、廃車をとる業者との人脈があり、不要となる車を分解しては内部の回路を品定めしていた。そこにはひどくがっかりするもののほうが多かったけれども、未知（私が持っていない部類のもの）のシステムを発見しえる可能性を秘めたものもあった。機器を分解して調べることが法律に引っ掛からない。ある種、ライターが資料を調べたり、取材して原稿のネタにすることと同列なのだ。弁解するが、私はそれらを仕事に使わなかった。

Q5、警察には届けを出したのか？

届けは出した。警察に事情徴収を受け、車のナンバー、車種等を報告した。結局騒ぎを大きくしないように懇願した。会社には盗難にあったと報告しただけだった。手掛かりが少なかった（車のナンバーは容易に変更できるし、直にAは全国へ売り出された）ことより、

結局この年になる二十年間Aは見つからなかった。私は車が故障したこと、故障の原因については追究できないまま、全国の市場に出されることになった。

Q6、市場に出され、エンドユーザから故障が相次ぐというクレームはなかったのか？

原因不明の故障はなかった。どの車でもそれをしてしまえば故障するといった類の話はあったが、順調に生産され、常用されるようになっていった。私はこれまでの事実を誰一人に打ち明けるわけもなく生活した。Aが故障したから小屋で衰弱するまで動けなかったという真実を隠し、虚言を水平展開している自分もどこか他人事のようにであった。私はその後も数機種の設計を行い、何の問題なく量産された。この年でも恥じることはない地位と年収を手に入れていた。妻とも不仲になることなく、子供二人は成人して、不況と言われた現代社会に難なく企業に就職して働いている。

しかし、今思い返してみても、設計者が検証段階で、ある懸念点を残したまま製品化するのはあってはならない話だ。特に品質管理は世界水準とアピールしていた会社の製品で、かつ人の命を預かる乗り物とあっては尚更だ。原因特定を早急に行い、既存の検証では足りない判断すれば、量産時期を遅らせてでも新たなシステムを構築し、パスするまで試行錯誤しなければならぬ。それが最低限のマナーであるのだ。

Q7、あなたの不思議な体験と過去への償いは以上の内容で全部であるか？

不思議な体験と過去への償いについては後日談がある。過去への償い後日談は後ほど述べる。

私がそのような体験をして、病院から退院した後、会社からしばらく休養をとれと命令された。東京の社員達は誰もが上京して慣れない環境での業務をしている私を心配していたのだと思う。言葉に甘えて私は二週間の休暇をもらい、妻の反対を押し切って、家族のいる九州から東京に戻ろうとした。自家用車で鳥取にある小屋を再び

訪れた。家庭への不満や放浪癖があったわけではない。ただ、その場所に呼び寄せられたのだ。

私は道に迷わず、容易に到着することが出来た。ところが、数週間まであった小屋がなくなっていたのだ。取り壊された形跡もなく、あるのは小屋の後に隠れていた森だけが存在していた。霧がかった森の奥で狐がこちらを見ていたと思う。あるいは別の生物であったかもしれない。定かではないものからの視線は、人の発する存在感を凌駕していた。日本にはかつて八百万の神が存在していたという伝説はあるものの、無宗教派だった私は、その時初めて神の存在を信じるきっかけとなった。人間は言葉を持ち、自分の言葉で伝えることで、相手に想像している半分程度の意思が伝わると私は考えているが、生物はそうはいかない。だが、しかしその時、視線は確かに私を捉え、言った。

神聖なるこの場所を、これ以上汚すな。あなたにとっては何も迷惑をかけていない行動であったとしても、私たちには多大な影響を与えている。言葉であっても同じことだ。

私は私以上にその場所を汚す人物、あるいは他の場所で自然破壊を行っている行政を天秤にかけていた。目の前で、人が人の心を破壊している瞬間を見た。

すぐに嫌悪感へと変わり私の中から排除した。私には、もっと酷い行いとしている人は沢山いるんだと主張してしまうと、様々な、私が必要にしてきた人生を、手のひらから救った砂がこぼれ落ちでしまうのではないかと直感したからだ。

考えてみれば単純な言葉なのだけど、その頃の私には不思議な現象を運命と捉え、話してしまうことで信じてもらえずに身もだえるよりは、黙っておくことを選択した。そう、前述した通り、父親の遺伝という逃げ道を使って。過去の償いと定義した開発車種のトラブルも、運よく日の目を浴びることもなかった。

原爆ドームでの決意

則之の荷物を東京に宅配すると、アクセルを踏んだだけで、車内が軽くなっていたことに気が付いた。夜でライトアップされた清水寺を見てから京都を出発した。いつもの空気を務めて作っていた武史にぼくは必死で付いていこうとした。

「わたし東京に戻ったら則之にあいに行くわ」

「それがいい。でも気がなかったら、思わせぶりな態度はとるなよ」
「うん、わかっている」

それ以上は語らなかった。何が正しくて、何が間違っているのかわからなかった。昨日の明日香の涙に立ち向かう勇気がなかった。休みなく車を走らせた。ぼくから武史、清美へと運転を変えて行き、代わり番で睡眠を取った。無言の空間が増え、寝れない夜を過ごしていた。誰もが同じ状況であり、疲労の色が濃くなっていった。夜のドライブは闇へ心中しに行く仲間達と錯覚した。どうがんばっても良い状況へは転ばないというのに、皆誰も離れようとはせず、寄り添って傷をなめ合う集団だった。二日掛けて兵庫、岡山を經由して広島に入った。清美がようやく車を止めたのは、原爆ドームの近くだった。

近くには川が流れ、柵が設けられている。原爆ドームを目の当たりになると、建物の骨組みが露呈した状態だというのに、昔の施設とは思えないような精密な作りだった。芸術品だと勘違いする程だ。原爆が投下された周辺には何も残らずに、この場所だけが残されている。戦争の悲惨さと、無くなった命を忘れない為に建てられたというぼくの安っぽい想像に浸っていた。ベンチに腰を下ろし、長旅の疲労を回復した。明日香はぼくら以上に疲労していた。

武史は泊まる場所を探してくると行って、バンで出発した。こんな時にネットで予約をしてくれた則之の大切さを思い出すのだ。薄情な自分が空しくなってくる。

清美はぼくの方に顔を向けた。

「私ね、智也と初めての時」

言葉を切った。ぼくは唾を飲み込んで頷いた。原爆ドームの方を見た。何かを決意した、それを言ってしまうことにためらいがある感情が伝わってきた。

「好きな人と出来てよかったって思ったの。結婚相手とするものだとずっと考えていたし、男の子が苦手だったから、考え方も変わったと思う。とても大切な行為だったんだと思えるようになった」

明日香も真剣に話を聞く態勢となった。

「こんなわたしにでもわかるわ。その気持ち」

「痛かったとか気持ち良かったとか生々しいものじゃなくて、もっと透明で純粋な気持ちが残っているの」

「則之には大切な行為であると理解させてあげられなかった。わたしは怖くなった。則之が好きでもない子と平気でするような人になっちゃうんじゃないか。そうになったら、わたしのせいだから」

明日香は化粧つけない表情が歪んでいた。着飾った女の子が、人間の本来の姿となっていた。ぼくはたばこを取り出すこともできずに聞いていた。

「自分を責めないで。メールの内容から、則之は前を向いて歩いているのがわかったでしょ。私達も後悔するより、前を向いて歩くことが大切なんじゃないかな。彼もそれを望んでいると思うから」

清美がそう言うのと、明日香は泣いた。優しくされるより、怒られた方が楽な場合がある。清美はそれを選択したのだ。自分の道は自分で決めて歩めという厳しい意見と紙一重だった。

清美は泣いている明日香を抱いた。見物人が気になってこちらを見ていたが、ぼくが睨むと目を逸らした。女同氏の友情を壊させない。

「ありがとう、ぼくも同じ気持ちだよ。大切な人だったからこそ、一緒になるのに時間がかかった」

清美は微笑んだ。明日香を、女の子を利用してまで、友達を救済

するのは良くないと言っているような気がした。そんなぼくに対して軽蔑をしていない清美の器に、昔の彼女だという誇りをもった。ぼくは近くの自動販売機まで行き、暖かい缶コーヒーを三つ購入すると、直には戻らずに灰皿のある場所でたばこに火を付けた。

ぼくが戻ると、明日香は泣きやんでいた。充血した目を手鏡で確認するとヤバイよと言い、いつもの調子になっていた。缶コーヒーを配った。

「それにしても二人ラブラブだったんだね」

ぼくは飲んでいたコーヒーを吐き出しそうになるのを堪えた。

「智也もそこまで思われていたなんて羨ましい」

「そ、それは」

誰でも経験し得ない恋愛をしていたのはわかっていた。ぼくの中でも一番の恋愛であったから。

「わたしも負けないよ。これから絶対に羨ましくなるような恋をするんだから」

武史の見つけてきた宿泊施設は、豪華なホテルだった。外装のゴシック風な佇まいで、結婚式場としても使用されていた。背筋に棒が入っているような、皺ひとつない制服に身を包んだ案内人十人中の二人から丁寧な言葉で扱われると、直に部屋へ案内された。

「武史、チェックインの手続きは？」

「終わっています。皆さんをこの後、レストランにご招待します」

「ねえ武史、何か変だよ。どうしたの？」

清美が心配になっていた。明日香はホストクラブに初めて来店した時はいつもこんな調子だと心得ていた。武史はわざとらしい対応を止めた。

「レストランのフルコースも全部俺が出すからさ」

「やっぱり変だ」

明日香も真剣に心配をし始めた。

食膳酒でシャンパンを開けて、キャビアと温野菜のサラダが前菜、自家製パンが摘み、カモ肉のローストトリュフ添え、フォアグラと和牛のひれ肉ソテーが主菜、クリスタルゼリーのフルーツ添えがドルチェ。高級すぎて味を形容し難く、皆は美味しい、旨いを連発していた。料理を運んで来たボーイが、温度を保つ目的として使用されたボールを大げさに開けた時は笑いを堪えるのに必死で、ワインは十年ものだった。

「どれも美味しかったね」

満足気な明日香はナプキンで口の周りを拭った。

「ぼくが味の評価を正確にボーイへ伝えるには、後十回は同じような料理を食べなければならぬよ」

「それは遠い未来の話だな」

武史は本当に遠くを見ながら答えた。

「ねえ、何でもここまでのディナーをおごってくれるの？」

清美は尋ねた。ホストは良く女の子に奢るんだよと自分のことのように応えようとした。

「今日は皆に話があるんだ」

期待を裏切られた。一同は緊張した。周りの客は優雅に時間を過ごしているのに、ぼくの近くだけは、別の空間で成り立っていた。酸素が薄い。

「話って何なの？」

「実は、京都でホストをやらないかと誘われている」

「いつの間に？」

明日香と清美はぼくの疑問をすべて代弁してくれる。

「智也は知っていると思うけど、京都でたまたま知り合った榊原鉄男さんの傘下で経営している人がいるんだ。売上もよくて、人が足りない状況なんだって。話をしておれを推薦してくれた」

榊原の説明をした。則之を探しまわっている時に知り合い、極道で、武史と喧嘩になりそうになったこと等。榊原がその気になっていれば、今頃ここにいないのかもしれないというエピソードは言え

る空気ではなかった。

「でも、東京の人が関西で通用するのかな？言葉も若干違うでしょ？」

明日香は敏感になっていた。水商売の厳しさを知っているからだ。「ノリだって違うだろうし、やってみないとわからないよ。それでも俺は成功させる自信はある。チャンス逃したくはないんだ」

ぼくは耳の裏をかいた。武史はワインで喉を潤した。

「それに元々の旅の目的がこんなに早く実現するなんて思わなかったけどな。俺は京都で成功すれば、どこでもやっていける自信が付くと思う」

熱を帯びた武史の意思に反対する人間はいなかった。

「皆との最後の晩餐だ。それで奢らせてもらった」

ワインが五本空くと、すっかり楽しい空気になっていた。明日香も清美も仄かに赤身が挿した顔は笑顔が絶えなかった。

一段落すると、武史はさっき殆ど見れなかったという理由で原爆ドームに歩いていこうと誘った。女性陣はお手洗いで準備をしていた。

「まだ清美には惹かれてないの？」

「またかいな。確かに惹かれつつはあるけれど」

「智也と清美、則之と明日香が結ばれば面白いんだけどな」

「人の恋愛を面白がるなんての」

「でもさ、けっこう彼女いない歴長いんだろ。そろそろこっちの方も溜まってるだろ」

武史はぼくの股間にタッチした。不意を突かれたぼくは直に手を払った。

「この野郎」

「綺麗な女性が戻ってきたよ。エスコートしないとな」

「無視するな」

武史はニヤけながら女性陣に向かっていった。ぼくは追いかけた。

夜の原爆ドームは周りのビルから発光されてライトアップされているようだ。歴史的な知識がないカップルのデートスポットになり得る場所だ。

「こういうのを見ると、俺達が普通に生きていることってすごい幸せなんだなって思うよな」

「普段は感じられないよね」

清美は骨組だけのドーム先端を見ながら呟いた。

「どれほどの人が、戦争に賛同したんだろうか？」

天皇を神と崇めていた歴史はやはり違和感でしかない。前へと進む手段はきつと無数にあるはずだ。右に倣えで従い、明日を選べない生活は敗戦によって大量の犠牲を払い、沈静化されたのでは遅すぎるのだ。

「全国民での多数決ができる時代でもないから、ここに居た人は反対していても、何もできなかったんだと思う」

「日本の何処かには、第三、第四の世界大戦を目論んでいるのだろうか？」

ぼくは言って後悔した。

「いないと信じたいよね。あつてはならないわ」

明日香は言い聞かせていた。

「いくつかの戦争映画をみたけれども、良いことなんて何も描かれていないわ。絶対に平和が最良の道であるとわかる。皆同じであるでしょ」

武史はハイライトに火を付けた。明日香はメンソールに、ぼくはセブンスターに火を付けた。煙が一斉に空気を待っていた。誰もが無口になった。

「明日電車で京都に戻る。落ち付いたら連絡するよ。まだ遊ぼうぜ」

武史は戦争の大変さを視覚で刻みこみ、これからの自分が戦場に行く活力とした。

本州と九州の架け橋

朝起きると、武史の姿と荷物はなかった。彼の性格上、置き手紙は書かないだろうから、無理に詮索はしなかった。ムードメーカーの喪失は多大な影響を与えるものである。ソリッドな匂いのサムライの香水も喪失した。

三人を乗せたバンは山口県を横断した。武史から、俺は関西でも絶対に成功してやるからというメールが届き、ぼくは負けじとノンストップで運転した。数えたら滅入ってしまう回数で道に迷い、行き止まりを引き返した。学習するよりも勢いだった。ぼくは意地になっていた。仲間といればどんな困難も越えられる気がしていた。それとは裏腹に、マスクをするようになった清美は寝込むようになった。下関の関門橋を通ると九州だった。九州は橋を渡る前から姿をぼくにさらしていた。

体調を崩していた清美を気遣って、小倉のビジネスホテルに宿泊した。特徴をすべて排除したような場所だった。四畳半の部屋に小さいブラウン缶テレビと、机、ベット、ユニットバスはどこにでもあるようで、今の時代どのにもないようなものだった。窓からは、向かいのビルと、ビジネスホテルとの区切りになった狭い道路しかない。出張に来てもあり宿泊したくはない場所だった。ぼくは荷物を部屋に運んだ。明日香は清美を心配して看病していた。

清美はただの風邪ではなかった。辛さを言葉と態度で示さない清美が、立てなくなってしまう程だった。マスクをしている表情は顔色を失っていた。

薄れゆく意識の中でぼくの部屋を訪ねてきた清美は、ドアを開けるなり、ぼくの胸に倒れ込んだ。お香の香りはしなかった。

「ごめんね、わたしちょっとキツイかも」

かもという言葉はキツイに変化し、明日香と相談した結果、これ以上旅を続けるのは無理だと判断すると、バンで近くの病院に連れて

行った。巨大な病院は、あらゆる医療を凝縮させているようで、ぼく達を安心させたのだ。元気を幾分失った患者さんを大量に収めていた。時には点滴を持ち歩いている人もいれば、車椅子で病院内を駆け回っている人もいる。人事だった光景がいつ自分に降りかかるか分からないとなると、ぼくも体調を崩してしまうぐらいにどんよりとしていた。限りなく白に近いクリーム色の壁は、ぼくの精神安定に作用しない。看護婦の天使の対応は、非現実的のように見えた。弱った体になると、そのような対応をしてもらうことで安らぐのだろうか。ぼくには自分を演じているようで、ひどく気の毒になった。例えばぼくが看護師であり、忙しく、かつ穏やかに対応している看護婦のように仕事をし、加えてクレームが来るような話になれば、ぼくは自分が患者になってしまいうだろう。それだけの危うさがあった。

急いで受付を済ませると、初めて訪れたが故に、清美の診察までに二時間も待たされた。診察時間が頑なに存在していて、医師が絶望的に不足していた。熱も急激に上がっているらしく、呼吸が苦しうだった。診断はぼくのいないところで行われた。規則違反であると認識しつつも、地下にある霊安室へ向かっていた。病院は一階が総合受付、各科診察室、二階は手術室、病院の職員室、三階から五階が入院患者の部屋になっていて、地下が霊安室となっていた。エレベータに備え付けの看板には、それぞれの階数に合わせて案内が記載されていた。地下だけが異常に曖昧な表現で記載されていた。それでも、地下になにかがあるか皆わかっている。エレベータはゆっくりと下って行った。ぼくに立ち入っては行けないと暗示しているかのようだった。B1のLEDが光り、ドアがゆっくりと開いた。人気はなく、一回の開かれた雰囲気とは正反対の閉ざされた雰囲気だった。ぼくのような人間が来ても無力なんだという体制が整った構造。ネガティブに考えるのは間違이었다。関係者以外立ち入り禁止の標識があって、ぼくの好奇心はそがれた。立ち止まって何もできないでいた。ぼくの立っている場所からまっすぐに廊下が伸び

て、行き止まりがT字となっている通路に担架を引いた医師一名と看護婦二名が通り過ぎた。小人のように小さく映った。担架に乗っていたのは紛れもなくこの世を去った者だった。数十分後に家族と思われる一般客が続いた。事故で緊急に運び込まれた者が死亡し、運びこまれたのだろう。ぼくは居たたまれなくなった。なぜこの場所に踏み込んでしまったのかと後悔した。その場を後にした。エレベータを待っていると、ぼくは恐らく先ほどの場面は夢に出てこないだろうと思った。年齢を重ねていくことで得たのは、ある種の冷静さと豪胆さだった。それらは仕事に役立つものではなく、感じやすい感情がすり減っただけなのだと思う。髭を剃った後に、アフタークケアをしなくても肌に違和感がなくなったような、どうしようもない成長だった。

外の喫煙所でたばこを吸っていると、携帯から連絡があり、清美インフルエンザにかかっていると聞かされた。気管支炎と肺炎も患っていて、ホテルの環境よりも病院で数日滞在すべきだと勧められ、断る理由もなかった。明日香は清美が治るまで付き添うことを躊躇いもなく承諾した。

ぼくは滞在することで清美の完治を待ち、待たせているんだと思われたくなかった。次の日に見舞へ行くと、明日香も病室にいた。幾分目が落ちくぼんで顔色が悪くなっている。付きっ切りだとは言わなかった。ベットは一部屋に六つあるが、患者さんは誰もいなかった。花に水をやり終わると、席を外した。ベットから身を起す清美は血の気を失った顔で、点滴を受けていた。

「ちゃんと完治するまでがんまるんだよ」

「ありがとう。こんな形になるなんて想像してなかった」

声は掠れていた。発声するだけで相当な体力を消耗しているようだった。

「私ってあまり体が強くないの。だから、気が抜けてしまうとダウンする場合が多くてさ」

「則之も武士も抜けてしまったんだし、つらかったんだよ」

「そうだと思う。でもあまり弱っている姿は見せたくなかった」

「いいんだよ」

清実 は病室から外を見ていた。ぼくの手を借りずにカーテンを開くと、快晴の青と、差しこんだ光は淀みなかった。

「前に言った付き合っている人なんだけど」

「ああ」

「結婚を申し込まれているの」

脳内に衝撃があり、心臓は波打った。清美が誰かと結婚する。さまざまな嫉妬は体を硬直させた。喜べない自分は木偶の坊になっていた。

「そうなんだ」

かろうじて出した声だった。痰が絡んだと思い、咳ばらいをした。朝食のパンとベーコンとオレンジジュースが胃から食堂に込み上げてきた。でも好きな相手はいないという清美の言葉を、幾度も掘り返していた。

「互いの親も仲が良いわけではないんだけど、結婚が前提であり、真近であることも知っているわ」

「清美の心はどうなの？」

「私は」

せき込んだ。マスクを取り出すと、耳に引っかけた。ごめんねと誤ってきた。

「分からないの。でも新しい出会いを見つけて、好きな人とデートを重ねて、関係を築いていく作業に疲れているの」

「わかるよ」

妥協と断言しないのは、清美が相手に対する優しさだった。きっと、妥協という言葉を心の中で何回も繰り返したのだと思う。ぼくも、ある程度の年月が経つと、妥協という文字が、節実に芽生えてくるものだと痛感していた。恋愛に勢いがなくなり、手に入れたという欲望が薄まっていく。

「ずるいよね。この人でも良いのかと思いながら、恋愛はもう面倒

くさいと思っているんだから。だから、明日香にも智也にも、京都でのことは強く言えなかった」

「人生の岐路に立っているわけだから、迷うのはしょうがないよ」
ぼくにしても、同じ立場であつたら、同様の選択をするだろう。
体の不調は納まってきていた。

「相手はね。大企業に勤めているサラリーマンなの。どこも不況で自分も安心しれられないと謙遜しながらも、仕事はできる人。なおして欲しい部分もまったくないの。親は付き合いに賛成してくれているし、相手の両親もととても良い人」

「それなら、ぼくも安心だ」

親の心が芽生えていた。きっとぼくが家庭を持って、女の子の子供が出来た場合、同じ心境なのだろう。

「好きになろうと努力している。でもね、感情が芽生えない。智也と付き合っていた時と比較してしまう。焦れば焦るほど、相手に見透かされそうで怯えるだけ。仕事に夢中になってごまかすようにしている。皆と旅をする目的もごまかしていた。私は答えを見つける為に、相手と離れて考える時間が作れたかった」

「ぼくと付き合ってくれていた時期を美化しすぎているんだと思う」
清美は首を横に振った。

「自信を持って。私には何よりも大切な時間だった」

結婚なんかしないでいいと言えればどれだけ楽なんだろう。ぼくの気持ちをそのまま表現できない、途方もない巨大な壁は存在した。巨大な壁は清美の人生であり、エリートサラリーマンであり、二人の家族だった。冷静になって悟ってしまった。自分が空しくなった。

「この旅で答えは見つけられたかい？」

「完璧についてわけではないのだけれど」

ぼくは佇んでいた。

「智也と付き合っていて、幸せの内に結婚しておけばどれほどよかったかと思った。もしこれから付き合えたら遅くないんじゃないか

って」

「えっ？」

何度も清美の言葉を反芻した。ここでぼくの一言があれば、清美の結婚話を解除して、ぼくのところに付いてくるのか。

清美への愛が存在するのはわかっていた。少ない旅の期間だけでも、清美の行動に誰よりも反応し、目で追っていた。心が揺さ振られていると何度も思っていた。

それでも、ぼくは失業していた。親にも話しをしていない臆病ものだった。再就職の意欲が回復していない。東京に戻れば再就職しているふりをするだろう。絶望的な未来だけが妄想される。やがてぼくについていけなくなってしまう。十年後の今、ぼくの真実を見て清美は幻滅するだろう。清美の相手よりも数段劣っている。それならば、過去の美しい記憶のまま凍結しておいてほしい。

「私はまだ冒険していたい」

清美の声は殆ど聞こえなかった。ぼくは聞き返すか迷っていると、看護婦さんが問診に来た。

看護婦さんと話し込んでいる間に、また東京に戻ったら連絡するという言葉を言わずして病室を出た。清美もそんなぼくを止めなかった。

明日香が廊下で待っていた。大筋を聞いていたらしい。

「盗み聞きなんて趣味ワルい」

「だって楽しんだもん」

ぼくの笑っていない表情を見ると、明日香は微笑みを真顔に戻した。明日香も人の顔を伺う神経は過敏だった。

「行くの？」

「ああ、清美を頼むよ」

「本当にいいの？」

「うん、清美には彼女の幸せが待っている。ぼくが間に入る権利はないんだ」

本音だった。格好なぞ付けていられる余裕はない。

「権利なんて関係ないでしょ。智也は相手に合わせているだけじゃないの？」

ぼくは何も言えなかった。

「今、相手のことを考えて、自分の意思を言わないことが優しさだと思っっているなら、そんなのいらないんだから」

優しすぎるのは、時として人を傷付ける。

「わたしという時に、結婚する予定の相手の相談を受けていたわ。あの子は気を使い過ぎるところがあるから、本音を言わなかったけれども、とても結婚を望んでいるようにには思えなかった。でも、智也の話をしている清美はすごく楽しそうだったわ」

「ちがう、清美を幸せにできる相手は今のぼくじゃない」

明日香はため息をついた。

「せめて、後悔しないように、言っておきたいことは吐いて行くんだよ」

「ありがとう」

ぼくは考えた。

「ひとつだけ聞いていいかな？」

「私に？清美に対して吐いておきなってアドバイスだったんだけど。それで何？」

明日香は怪訝な顔となった。長くなるようだったら、休憩所に行って座らないという提案を飲んだ。歩くだけで大分気持ちは鎮静化した。

休憩所には、父親の入院を見舞いしている家族がいた。努めて明るく振舞っている母親の姿は自然だった。子供が舌を使ってカンと鳴らした。誰も聞いてはいなかった。

「聞きたいことなんだけど」

ぼくは声を潜めた。明日香は顔を近くに寄せてきて、じれったそうに待っていた。ぼくは上目使いで唇を舌で潤した。

「刺青の話だんだけどさ、どうして入れたの？」

「そんなに大した理由でもないわ。タトゥーなんて今ではファッシ

ヨンだから」

「なるほど」

ぼくは、武史がセックスを演出するために、ホストでもタトゥーが流行っていると聞いたことがあった。ぼくには全く理解が出来ず、今まで忘れていた。明日香の柄もよく覚えていない。ぼくは時代の流れから疾走しているのかもしれない。

「元彼の名前だったり、お勧めの柄を入れたわけでもないのよ」

「流動的だから」

「そう、今日好きでも、明日は嫌いだってありある。元彼の名前見て逃げ出さない男なんて信用できないでしょ？」

「どこかにはいるだろうけど」

「冷静になってから入れたものだから、これで一生消えなくても、肝臓を痛めても文句はないわ」

子供が鼻を使って豚の物まねをした。ブー、父親の病気よりも暇を持て余していた。ぼくが考える程、状況は悪くないのかもしれない。

「納得したよ。でも体は大事にね」

「覚えておくわ」

休憩所を出て、病室から反対方向に進もうとすると、明日香は制止した。

「お守りをあげるから取っておきな」

「何だろう」

包装紙に包まれているものは、ハードカバーの本位だった。ぼくはその場では開けずに、また連絡するよと言うと、その場を離れた。バンに乗ると小倉を出発した。明日香は最後に行ってらっしゃいと送り出してくれた。思い返すと、明日香はアネゴ肌を率先していた。さっぱりしていて話しやすかった。もう会う機会がない清美に心で別れを告げた。コンビニで停車して、明日香からもらったお守りを確認した。ソフトカバーの薄い本だった。開いてみると、清美の写真が写っていた。清美の詩集だった。絵も挿入しれていた。ペンネームは

菅野清美だった。

涙がこみ上げ、サングラスで隠した。GLAYの『奇跡の果て』が静かに流れた。

ぼくの仲間は音も立てずに消えていった。

過去からの手記その5

私は図書館を利用して手掛かりを調べ始めた。黙っておくことを選択しながらも、時間が立てば、もし誰かに伝える日が来た場合、漠然としたイメージだけでは何も伝わらないと思ったからだ。論理的に説明し、私の経験した現象に似ている事実が見つからないとしても、別の角度から解明できるようになっておく必要があった。私を筋が通らない人間だと形容してくれてもかまわない。親にあつたら今度は素直に感謝しようと思っても、いざ会ったままだく違うことを言っている、人を殺したい位恨んだ後、人を助けなくなる。移ろい安いのが人間であつて、父親のような人間が逸脱しているのだと弁明したい。

私の調査はまぎれもなく、仕事への熱意に勝るものだった。無我夢中でやりとげるものなんて、私の人生では片手で数える程しなかないと認識している。熱を帯びた気持ちに正直であろうと思った。それでいて孤独なものだった。地域の情報、新聞、歴史、宗教学、民族学に風俗学、関連しえる書物を貪るように読んだ。時には図書館員に無理を言つて規定の貸出冊数を超える本を借りていた。趣味のゴルフは時間に反比例してやらないようになり、いずれは誘いの話も来なくなってしまった。もちろん宴会にも参加しないようになった。パチンコもやめ、無趣味な私が誕生した。それでもやめなかった。

家庭を顧みない態度は妻に不信感を与えていた。仕事のためだと虚言を付いても、私の借りてくる本の内容を知つてしまえば、誰だつて違うことぐらいわかる。だがしかし、私がそこまでして労力を費やした結果は芳しくなかった。

消えた小屋は地図に載っていない場所だった。山が連なった場所には、幾つかの川が近くに流れているというシンプルな絵図しかなかった。過去に遡っても、そこに何かが存在していた形跡がなかった。

なぜだか分からずにいた。やがて小屋というものが、地図に記載される建造物ではないと知った時は安堵した。新聞にも関連した記事はない。毎朝民間の人々に伝達される活字での情報をすべて追い切れなかったのかもしれない。そもそも日本という国の中で、突然何かが消えてしまう現象など記事にするものではないのかもしれない。私は調べ尽くした結果、納得したのだ。

歴史として関連すべき事はなかった。生まれた土地を愛している人間が存在することと、なぜ愛すべき土地になったのかを丹念に記載した内容が多大な歴史をテキストとして語られる場面があっただけだ。私の心を打ったが、私の体験したものではなかった。宗教学としても、消えた小屋の位置に狐に似た神様は存在しなかった。蔓延している精神的な欠如を、神を通じて補い、再生する行為は私としても反対できないねない信念を語り下ろされている内容に熱中とした。民族学に風俗学の書物には唯一、そして私達が考え得る現象の、最も近い「神隠し」が記されていた。神話とまでになっているその現象を他人事にするわけにもいかない自分がいた。私の得た情報の要点を以下を引用する。

■以下引用

人々の山に対する特異な感情（山岳信仰）がベースとなり、多くの場合、不明者は山中に消えたと考えられた。不明者を村人達が総出で搜索する際、定まった道筋を通り、鉦や太鼓を叩いて不明者の名を呼ぶなど、ある種の呪術的作法を行っていたとうかがわせる伝承も少なくない。

伝承では、神隠しの「神」となる主体は、天狗・狐・鬼や山姥や、雷神、浦島太郎で著名な竜宮など多岐にわたる。ただ、これら民俗事象としての神隠しが事実として語られたのは、柳田國男が採録した『遠野物語』に代表されるように、時代的に下っても第二次世界大戦前までであって、戦後以降において、失踪者が神隠しに遭ったとされるケースは、ほとんど見られない。

これらが意味するところは未だ不明であるが、記録によれば、生還

者の言葉はシャーマンの口寄せと共通する内容であったとされる点や、近代まで「山」は人々にとっての「他界」であり、神霊の住処であると信じられていたことを鑑み、「神隠し」とは人と神霊が交渉するひとつの方法であったのでは、との説もある。

また、神隠しには「遭いやすい気質」があるといわれ、子供の場合は神経質な者、女性の場合、産後の肥立ちが悪いなど、精神的に不安定な時期に遭いやすかったとされる。修験者などが交霊儀式を行った際、神隠し経験のある子供を選んで依坐よりましにしたという記録から、トランス・類催眠状態などの変性意識や、解離性遁走（数日から数カ月亘って行方不明となり、その間の記憶が定かでない心性精神病の一種）などの心因反応ヒステリーと深い関係にあるのでは、との考察もある。

■引用終わり

要点をまとめると、まずは、「人々の山に対する特異な感情」である。対しては当てはまらくもない。私は山奥にて体験したものだから。

次に、現象は戦後確認されていないとあれば、私の体験した時代では存在しなかったということになる。但し、私の体験はまぎれもなく事実だ。

神隠しに「遭いやすい気質」にも私は当てはまらない。精神を病んでいる状態でもなく、まともな状態であったからだ。

最後の望みとしては「神隠し」は人と神霊が交渉するひとつの方法とされていることになる。私はこの引用文を読む前から死んだ父親と交渉していたのだと信じていた。神霊とはいかないまでも、最後まで向き合えなかった父親が、私に言い残した話をしているのではないかと今でも考えている。

調査を行った結論としては、私はあまりにも手がかりが少ない事実にに落胆し、止めてしまった。憑依していた背後霊が去っていったのかもしれない。私は日常に戻り、当たり前前の生活を再開したのだ。

南国のバーテンダーと警察

劣化していく気持ちを受け止めるしかないと考えたぼくは、誰にも使われることがなくなってしまった川沿いの駐車場にバンを止めた。駐車場には人工的な木が等間隔で植えてある。釣りをしている人もいなければ、川沿いの歩道をランニングしている人もいない。あるのは伸びきった雑草と、板チョコのような土手、川辺の石だけだった。虫や川魚もいなのではないかと心配になるほどだった。そんな心配は、木に張り巡らされたクモの巣から、引っ掛かってもがいている蠅と、弱り切ってしまうまでまったく動かない、黒と黄のストライプ柄のクモを見てなくなった。この場所は人間のものではなく、こいつらのものなのだ。

足に靴ずれが出来るまで歩き、街に入って最初に見つけたバー。驚くほど狭い階段を下りて行くと、店の外からは中の様子が伺えないようになっていた。ぼったくられそうになっても、誰も助けてはくれない構造だった。店のドアは重厚で、開けるのに力が必要とした。夕方の空より暗い店内にはカウンター席が十あり、対面に大きな鏡が設置されていて、店が倍の規模であると錯覚した。客は誰もいない。アメリカナンバーの看板やミニチュアのスロットマシンがオブリジェとして存在し、アンティークの時計、モデルガンを壁に埋め込んでいる。チェッカフラグ模様の床はピカピカに磨かれていた。そこには酔ってもその場でおう吐したらいけないという緊張感があった。日本酒、ウォッカ、バーボン、ウイスキー、ワイン、ジン、リキュール、ペリエが棚を埋め尽くし、ビン詰めになっているパパイアの漬物、高麗人参の漬物、ヘビの漬物まであった。カウンター内の奥に従業員用の部屋で続くドアがあり、バーテンダーと思われる男が出てきた。ぼくの夢に出てくるバーの登場人物と比較すると、バーテンダーは天と地だった。紛れもなく大人のイケメンだった。ウェーブのかかった髪の毛をオールバックにし、眉が太くて髭をは

やしているものの、不潔感が全くない。シャープな鼻筋は真っ直ぐに高く、二重目で黒眼がちな目、情熱的な厚すぎない唇、西洋人のような骨格だった。白いシャツに黒いベスト、黒いズボンに、恐らく皮靴（カウンタで見えないので、足音から想像）無駄な贅肉はなかった。何もかもが整い過ぎていて、誰にも似ていなかった。

「いらっしやいませ」

鋭利に尖った喉仏から発せられる声は、低いのに良く通った。ぼくは奥の席に腰を下ろした。ハイネケンビールとナッツを頼んだ。一人でバーに入った記憶はない。もしかすると、一人でお酒を飲む客が誰もがぼくのような心境なのかもしれない。当たらずとも、遠からずだと納得し、運ばれてきたビールをグラスの半分まで飲んだ。ぼくは人指し指をカウンターに打ち付け、ナッツを何粒か頬張って、アルコール度数の強いジンライムを追加して飲むと、その場の空気に溶け込んだ気がした。バーテンダーの無駄のない佇まいにいくつかに近くなった。たばこに火をつけようとすると、ライターがないことに気が付いた。ぼくがどうしようか迷う前に、バーテンダーはレトロな柄のパッケージからマッチを勧めてくれた。暇な時間を隠し切れている男と目が合うと、ぼくの前に立った。

「東京から来たんです」

「随分と遠くから」

「このバーへ来るためにつけてわけではないですよ」

「それは残念ですね」

少しも残念そうじゃないバーテンダーは、どのようなご用件で来たのか伺ってもよろしいですかと尋ねた。

「ちょっとした旅ですよ」

「素敵ではないですか」

バーテンダーは屈託のない笑顔だった。見た目の年齢を一回りも下にさせる魔力があった。気持ち良く酔った女性客はあなたの方が素敵ですよと吐くのだろう。残念ながらぼくにはその趣味はなかった。

「仲間が何人か居たんですけど、途中で帰郷したので、こうやって、ここにいます」

「いろいろあったんですね」

「はい、別れた彼女と彼女の交友関係が同時に居なくなってしまうようなものです」

バーテンダーはたっぷりの間を置いて考えていた。それは素材を吟味して、調理方法を考え、納得が行く料理が出来ると味見をする料理人のようだった。ぼくはその時間を与えるためにワイルドターキーを頼んだ。アルコールの種類をチャンポンして飲むと早く酔ってしまい、気分が悪くなるというが、ぼくは同じ酒を飲み続けるほうが酔いは早かった。球体の氷が入った茶色い液体は、主役を氷に譲った脇役だった。ペースダウンさせて、上品に飲んだ。

「私は恋人と別れても、彼女と交友関係から縁を切るのは稀だんですよ」

自分と形容する手段を、俺でもぼくでもなく、私とするのに違和感があった。もしかすると、ぼくが思っている以上に年齢を重ねているのか、ぼくに対して社会的な常識を示して、会社の取り引きのようなマナーを心がけているのか。まどろっこしいので質問はしなかった。

「彼女から友達に戻るタイプですね？」

「はい。職業病と言っても良いかと思えます。バーには色んなお客様がきます。中には昔の恋人もその交友関係の方もいます」

「なるほど」

「普通に考えると、関係をすべて断つのは簡単なんですね。ずるいようですか、私には客として来てもらえる特典に期待してしまいます。そうになると、関係を保つことに何の抵抗もなくなり、関係をすべて断つ方が難しくなる」

「新しい恋人は、バーテンダーさんの身の上話をしている最中に、元カノとも友達であると聞いて悲しみませんか？」

「わかっているでしょう。私の職業がこれなんで、幅広い人脈が

必須条件となる。その中の一人と思えば割り切れる、私が恵まれているのかもしれませんが」

恵まれているとしか言いようがない。黙っていても異性が寄ってくる容姿なんて、少なくともぼくの日常生活範囲ではないのだ。

「それに、私のことはマルセルと呼んでください」

「外人の方？」

「いえ、あだ名です。私の付けた」

単語でしゃべる様子は本当に外人だと思ってしまふ程だった。マルセルは真面目に見えて、かなりの冗談好きかもしれない。

「マルセルさんも一緒にお酒はどう？」

「いいですね」

冗談のつもりで、かつ敬語を取っ払ったのに、あっさり同意した。夕方から夜への変わり目にバーテンダーが客と一緒にウイスキーを飲んでも許されるのか。だめだという法律は聞いたことがないと思った。マルセルが乱れている場面を見たいと思った。ぼくと同じ球体の氷で、決してゆっくりとは言えない飲みだった。

「そのヘビの漬物なんだけど、なに？」

「これはハブ酒になります。沖縄産ですが」

「それを貰えるかな？」

マルセルはビンの蓋を開け、木製の桶みたいなもので液体をすくい取った。液体の振動でハブが生きているようだった。

「プルーストは知っている？」

「はい、このバーの名前の由来ですからね」

「えーと」

ぼくは店の名前さえ見ていないことに気が付いた。いつも肝心な部分が抜けているのだ。

バーテンダーは看板に印字されている英語を指でさした。

「日本語に直すと、『失われた時を求めて』になります。彼の重厚な作品を散りばめた雰囲気作りには及びませんが、題名は非常に気に入っています」

「あれほどの分量を、改行も少なく、純文学というジャンルで書いて出版できるのは世界でもプルーストだけでしよう。まともに読もうとしたら三十日はかかると思います。それにしても、小説を振ったバーは聞いたことがないですね」

戯曲を振った店は知っていた。バーであつたかは思い出せない。曲であればもつと数はあるだろう。皆、自分のオリジナルかもつとカッコ良い名前を付ける。文学的な名前が、今の時代にフィットしないのはわかる。

「かもしれませんが。『魔の山』は邪悪な雰囲気ですし」

「『永遠の夫』は『永遠のママ』にすればかろじてスナックにはなる」

「『静かなドン』や『赤と黒』なら使ってもいいです」

「『野獣死すべし』はあってもおかしくないな」

途切れるまで続けたところで話題を変えた。

「マルセルさんは凡庸な人ではないね」

「そうやって言われると嬉しいです。人と違ったパーソナリティーを持つ人間は良く自虐的になりがちなのですが、私は違ったことを求めてきました」

「ぼくもアウトサイダーは好きなんだ。自分だけは周りとうんだと公にして、ポジティブな意味で、回りの人間と融合する努力をするわけでもなく、適応できないと割り切っている人は嘘がない」

「自分自身を形容した時にアウトサイダーまでは行きませんが、気が合いますね」

アルペジオの前奏でジャズが流れてきた。ぼくはジャズに関しては、演歌よりも知識がなかった。好き、嫌いではなく、知るまでに必要な興味がなかったただけだ。こうしてバーの雰囲気溶け込んだサウンドを聞いていると、知らないことがまずいのではと思わされる程だった。

マルセルは酔っぱらうと、口ひげを触る癖があつた。ぼくにお酒を作る時には、手を水洗いして不潔な様子をすべて排除していた。

「ここから桜島まではどれぐらいかな？」

「たぶん百キロぐらいじゃないでしょうか。良いところですよ」

「ぼくもそんな気がしていたんだ」

「桜島が目的地になるんですか？」

「うん、折り返し地点にするつもり」

漠然としてはいるものの、鹿児島で折り返せば、時間的にちょうどよかった。

「ささやかではありますが、安いホテルを紹介しましょうか？」

「ありがとうございます。でも今日は川のほとりで、車の中で寝るから」

正直なところ、マルセルが奥に戻って資料を探している時間、一人になるのが嫌だった。会話のテンションは途切れると、まったくの別物になって、戻らない経験があったからだ。ぼくはその時、酷い悪酔いをした。女性客が二人入ってきた。パンプスと白いワンピースにコートを羽織った茶髪の女性客Fと、高いヒールに赤いドレス、ロングコートに身を包んだ茶髪で巻き髪、女性客Gはマルセルを独占するオーラがフェロモンとして放出されている。化粧が鮮烈されていて、自分が綺麗であると認めた外見は、シラフでも酔いの回った人と対等な元気があった。ぼくと反対側の入口に近い席に並んで座った。

そこには、問題を抱えた綺麗な女性が、ぼくのおごりから会話をスタートさせて、『失われた時を求めて』を出てから朝まで同じ屋根の下で過ごすシーンは微塵もない。人生は旨くいかないものだ。ぼくはマルセルが離れてしまうと、鏡で自分の顔を見た。アルコールで赤くなった頬と座った目を直視できなかった。これでは妄想どころではないと溜息をついた。

「この間超オシャレなレストランに連れてってもらったの」女性客Gは言った。

「今度はわたし達三人でいこうよ」女性客Fは言った。

「マルセルと私だけで行こうね」女性客Gは言った。

マルセルは返事を笑顔で返した。

「ずるいわ。わたしも二人でどこか行こうね」女性客Fは言った。

ぼくはたばこを消した。居座るには限界だった。

マルセルにまた来るよと挨拶をした。

「またの来店お待ちしています」

女性客二人がマルセルの笑顔を直視した後、もの凄いスピードで首と顔だけをぼくの方に振り向き、凄いスピードで戻した。彼女達からの値踏みに落第点を付けられたに違いない。周りを気にして飲み続けるよりはいい気分だった。

コンビニで HALF ボトルのワインを購入すると、バンへ戻る間に飲んだ。ボトルをラッパ飲みすると、ぼくはいよいよ世界の終りに足を踏み入れたのではないかと思えた。川沿いの駐車場に戻ると、酔いは抜けていた。

白いセダンが止まっていた。カップルのカーセックスにしては、エンジン音がなく、静かすぎた。ぼくのように、この忘れられた場所で夜を明かすのだろうか。ぼくには解明手段であるのぞきの趣味はなかった。

斜面の土手まで足を運ぶと、座った。ひんやりした感触が尻を伝い、体を冷やした。真っ暗な景色はどの川も特徴は同じだった。空になった HALF ボトルを川に向かって思いっきり投げると、放物線を描いたどす黒いガラスは、チャポンという控え目な音とともに水面からはじかれ、対岸の石の群に激突して割れた。粉々になったかは定かではない。ぼくは目を閉じた。目の玉がぼくの意味とは関係なく回っていた。

「あなたはなにをしているんだ？」

好青年な声に高圧的な態度がミックスされた声でぼくは我に帰った。征服と帽子からすると、地元の警察官だった。

「ちょっと休んでいるだけです」

「今物を投げたでしょう」

斜面の土手で職務質問された。東京でも川沿いで警官に捕まる経験はなかなかできないだろう。ぼくは運が良いのだと思う。

「すみません、習慣ではないのですが、さつきは何となく」

「困るんだよ。ここはゴミ捨て場ではないんだ。ガラスで怪我をする子供もいるんだ」

車のナンバーまで控えられると、完全に委縮していた。免許書から住所が判明させられて、有休休暇を使って東京から実家に帰るところで、親の体調が良くないと適当なストーリーをでっち上げると、あっさり納得していた。社会保険所の期間はまだ切れていないので、会社勤めのサラリーマンを演じた。ぼくらの税金で生活している良心の呵責から、罪にする気はないようだった。

「こんなところで油売ってないで、早く帰りなさい」

「わかりましたと言いたいのですが、アルコールが抜けていないので、休ませてもらってからで良いですか？」

警官は溜息をついた。柔道選手に勝るとも劣らない体格から、空気が抜けて縮小してしまうような溜息だった。

「しょうがないな。でもここら辺にも不審者は存在するから気をつけなさい」

「ありがとうございます」

ぼくの体からはねっとりし、アルコール臭の汗が噴き出していた。

車中でジェネレーションXの「キスマीडェドリー」を聞いていると、警官に両親を使った嘘から、西東京の実家に住んでいる両親を思い出した。

今年で定年を迎えた父親はどうしているのだろうか。父親は話をすることで鬱屈を発散できる人ではないから、お酒を日課のように飲んでいる。飲み過ぎてしまう時はあるものの、会社を二日酔いで欠勤はおろか、有休も殆ど使わずに四十年近く会社勤めを全うしているのだから、内蔵は強いのだろう。大きく見えた身体も小さくなっているような気がするし、ぼくが年に数回帰った時に見る父親は、すっかり痩せていた。

ぼくの体をいつも気遣ってくれる母親は元気なのだろうか。健康に気を使う母親は、小柄で年齢よりもだいぶ若く見られた。穏やかな

性格で、習い事もいくつかやっている。気を使うのは、人間関係としても同じで、家族の会話の主導権を握っているのも母親で、来客がきても母親なしでは会話が円滑に進まない。家事に対しても、父親の家族と同居していても、文句は殆ど言わなかった。繊細ではあるから、体は壊しやすかった。

適度に勉強はしろと言われたものの、三流の大学に推薦入学すると、生活に関してはなにも言われなくなった。そういう意味で、ぼくは重度のプレッシャー教育を受けずに育てられた人間である。

恒例となっている正月の帰郷、ぼくは実家に顔を出すのだろうか。仕事を失った重大ニュースを、不自由なく育ててもらった両親に伝えるのが怖かった。過度の心配と、説教はされないと思う。それでも今後、ぼくは再就職を目指してがんばっていると虚言を吐いてしまうのが怖かった。

夢で一五年ぶりに幼馴染に合った。ぼくは一緒に遊んでいても、何一つ旨くやれない木偶の坊だった。まったく変わっていない彼は、悪口ではなく、軽蔑の視線でぼくの心を折った。

最南端の図書館1

折り返すべく場所によりやく到着した。三日間かけて、ぼく一人で九州を縦断した時間は、孤独でかつ長かった。桜島の景色に感慨を受ける余裕もなく、とにかく休息が必要だった。

桜島に近くて安い五階建てのビジネスホテルでチェックインを済ませた。空き状況を見ると、そこそこは客がいるみたいだ。ぼくがこれから十日間滞在することとなった場所だった。部屋は五階だった。会社にいる年配の営業にそっくりな人が案内をしてくれた。

部屋に落ち付くと、鏡を見た。油でペシャンコになっている髪の毛と落ちくぼんだ目と、伸び放題の髭と頬がこけた顔は貧相だった。たばこの吸いすぎで喉に引っ掛かりがあった。夏であれば嫌な体臭も加わっていたに違いない。シャワーで汚れを綺麗に落とし、歯を磨くとましになった。ドライヤーで髪の毛を乾かさずに眠った。

最終到達地点で、ぼくが居すわったのは、幾分自然に囲まれた図書館だった。どれほど図書館という場所に足を踏み入れていないかを思い返すと、少なくとも、働き出してからは無駄だと判断した。案内を見ると、ぼくの生まれる前から立てられていた建造物だった。しかし、歴史を感じさせない外装は、どこかの会社みたいだった。奥行きがあって、地下もある。同時に経営している食堂がり、近くには公園があった。

図書館には百万冊の本が書架に収められていた。圧倒的な物量を誇る書架には、余分なスペースはなく、びっしりと本が並んでいる。ジャンル別に区分けされていて、書店で見た本が意外なジャンルに属していたのも発見した。ベストセラーや貸出ランクの上位本は、同じ本が数冊並べられていた。地域の資料も充実していて、さらにカテゴリー分けされている。貴重な資料は透明なプラスチックのケースに飾り付けられ、これだけの数なのに多くの知る作家の絶版作品は存在しなかったことは少々落胆させた。その矢先に、図書館

員の若い女性は、書庫に格納している本もありますので、お探しの本が見つからない場合は、パソコン検索してみてもう一度とア
ドバイスをくれた。

ぼくはホテルと図書館との間を行き来するのが日課となった。

八時に起きて、九時半に到着する。一日中いれば、対外の本は読了できた。読了した後は次々と興味が細分化されて行き、あらゆるジャンルの本棚から吟味した。読んだ本の内容から、気になった文書をノートに写した。紛れもなくぼくにとっては夢のような空間だった。

開館と同時に来る人もいれば、いつもの定位置で席を陣取り、本と向き合っている人がいる。昼食や休憩も取らずにじっと本を読む人、沢山の関連本を積み重ねて調べものをしている人、パソコンを持ち込んで弄っている人、書きものに集中している人、時間の半分を居眠りに費やす人、昔の地図を座りもしないで眺めている人、学校帰りの学生が勉強し、仕事がないサラリーマンが時間を潰している、十人十色なスタイルで過ごしていた。誰もが静かな空間を共有しようとして努力している姿勢がぼくには眩しく映った。

図書館生活は二日目、閉館時間近くに出ると、バンに乗り安いビジネスホテルに付いた。休憩所に置いてある雑誌をみると、ここは東京なのか鹿児島なのはわからなかった。加えて受付の男が綺麗な標準語を喋る。通りがかったビジネスマンは休憩所で立ち止まると、ソファに腰かけ、事務的に新聞を眺め、事務的に買ってきた缶コーヒーを飲み干すと、事務的にノートパソコンでメールのチェックをして事務的に立ち去った。ビジネスマンの模範的な振る舞いだと思うと、部屋に戻った。たばこに火を付けるとまだ七時であった。寝置き三時間後のように目が冴えていた。テレビを付けると、鹿児島のローカル番組で知らないタレントだらけだった。遠くまで来たと感じた。声張って元気よくをモットーとして仕事をしていることだけが東京と共通している項目だった。

フロントに電話してピザの出前を頼んだ。

五階の窓から外を眺めると、小雨が降っていた。ぼくが部屋に着くのと入れ替わりに降っている雨は急激に強くなった。雲は空を一層暗くさせて、街頭を雨がゆっくりと消していくかのようだった。もちろんそんな現象はなかったが、あらゆる汚れを落としているのは確かだ。窓に当たる水滴でぼくの心の汚れを落としてくれないだろうかと真剣に考えた。若しくは雨で見通しの悪くなった景色が、晴れてクリアになるように、この雨が止めばぼくの心もクリアにならないだろうか。

妙な神頼みを止めてしまうと、ピザが届いた。長期宿泊の予定なので、サービスでシーザサラダも付けてくれた。ぼくはそれらをコーラで流しこんだ。ふんわりした生地は決して不味くなかったが、さっき会ったビジネスマンよりも事務的な食事だった。否、この時間までに食事をこなさなければならぬ、義務的なものかもしれない。どちらにしても味もそっけもなかった。

たばこに火を付けて時計を見た。八時。シャワーを浴びて爪を切ると、どっと疲れが出てきた。髪の毛を雑に乾かして歯を磨くと、百円硬貨をテレビの脇に付いている入口に入れてアダルトチャンネルを見ていた。見たくもない女優が見たくもない男優と絡んでいた。早送りができないので、義務的に見ながら時間経過を待った。雨は止んでいた。ぼくの心は病んでいた。

図書館生活は三日目、上、下に分かれた古い小説を読んだ。内容は、前半部分の平坦さと男女二人の人間描写を細部まで構築して、後半の山場で悲劇があるというものだった。作者は手塩に掛けて育てた男と女を、読者を喜ばせる為に悲劇とした心境はどうなんだろうか。ぼくが考えているよりも淡泊で、主人公を殺してしまうのに何のためらいはないのかもしれないと納得して、閉館時間にはすべて読み終えた。同じ日に上、下が発売され、昭和六十二年に上巻は五版、下巻は八版となっていた。読者はまるで後半部分だけを求めている

増版数だった。

図書館生活は四日目でぼくにアドバイスをくれた若い女性と話をするきっかけが出来た。ぼくは初めて観察するかののように地味な人で、やや度が入っている眼鏡と、薄化粧も良く見ると、童顔で可愛さがあった。話のきっかけは、バンの東京ナンバーと、毎日開館近くの時間から閉館までを過ごすぼくが珍しかったのだ。あるいは、口に出さないだけで、不審者だと思っていたのかもしれない。ぼくは良い方の解釈をした。簡単な自己紹介をし、名前は小坂奈々子と言った。

「私は地元の大学を出たばかりなんです」

「社員としてやっているの？」

「アルバイトになります」

「そうなんだ」

奈々子は他の図書館員に呼ばれると、ごゆっくりしていただきたいと言って仕事に戻った。ぼくは密やかな楽しみが増えたと思った。しばらく本を吟味して、柄にもなく恋愛物語に漬かった。

図書館生活は五日目、朝図書館へ行く前に桜島の見える場所に移動した。海に近い場所であればどこでも見れるのだけれども、遠回りして高台にバンを止めた。鹿児島島の街並が一望できる場所だった。人は豆粒で、建物はミニチュアの模型だった。海の向こうに聳えている桜島。案内ではフェリーが出来ているとのことだが、遠くからみても力強いエネルギーを感じた。島全体が山となり、点在している民家は申し訳なさそうに建っている。唇型の入道雲と桜島の尖った頂上が接吻をしているような景色だった。日がものすごい勢いで登って行くと、唇型の入道雲は他の雲と合体して見えなくなってしまう。ぼくは持参しているメモ帳にこの景色を模写することにした。流動的な入道雲はそのまま描かず、唇型だった過去を思い出しの作業だった。完成品は悪くない。

図書館生活六日目、奈々子を昼食に誘ってみると、快く承諾してくれた。何日も前から計画していたのではなく、ぼったり会った時に、衝動的に誘ったのだ。おかげで力が入らずに話が進んだ。近くにある食堂に行く話はあったものの、身近な職員の目線が気になった。ぼくは生姜焼き定食を頼み、奈々子はサンドイッチのセットを頼んだ。

「ここって噂が広まったりするのかな？」

「大丈夫ですよ。誰も気にしませんから」

「よかった。でも普通気にするでしょ。男と食事していたら」

ぼくの方から誘っておいて、なんでナーバスになっているんだと突っ込みたくなった。知らない土地という開放感から、冷静な判断を忘れられていた。

「皆さん、農民のような人達ですから」

奈々子の話を聞いて行くうちに、農民のような人達というのは褒め言葉だった。

「仕事がやり易いだろうね」

「ええ、とても気に入っています」

料理が運ばれてくると、そちらに集中した。奈々子は大きな口を開けて食べる姿を見せないように、焼いて小麦色となっているサンドイッチを小さくカットして食べた。ぼくは好ましく思いながら見ていた。

九州まで一緒だった仲間の話と、ここまでの道のりを簡単に話した。ぼく一人で九州を縦断してきたことは、まったく意味をなさないと思い、オブラートに包んだ。

「いろんな友達がいるんですね」

「たまたまだよ。それに、ぼくは友達が多いわけではない」

「でも楽しそうです。私にはそこまで仲の良い友達いないかもしれません」

「ぼくも行く前は思っていたよ。実際旅の途中で初めて知ったこと

も沢山あったし」

「じゃあ私にもそこまで仲の良い友達いるかもしれませんって言いなおします」

「いいよ」

奈々子はぼくの話に興味を持ち、ぼくが仲間を誘って旅に出た目的を話した。

「この図書館には、住民が自伝本を出版していて、いくつか置いてあるんです。これからのヒントになるかもしれませんよ」

自伝本と聞いて、遠ざけていた全体小説を思い浮かべた。いささか年の離れた女の子にアドバイスされると気恥ずかしかったが、素直に情報を受け取った。昼休みが終盤にさしかかると、奈々子は立ち上がった。

「ありがとう。参考に見てみるよ」

「はい、わからなければ言ってくださいね」

完全に立ち去ってしまうと、ぼくは奈々子と食事をするために半日我慢したたばこに火を付けた。煙を吸い込むと、ここち良い立ちくらみがあった。

最南端の図書館2

図書館生活は八日目に差し掛かかり、年末を迎え、明後日から休館が続く予定となっていた。奈々子は入口の受付の場所にいなかった。今日は休みなのかと落胆し、そろそろ次の目的への答を出すタイミングでもあった。

奈々子から紹介された自伝本は図書館の片隅にある書架に並んでいた。どれも地味であり、著名な人物が描いた出版物に虐げられたかのようだった。人生が波乱に満ちて、書ききれない程の分厚いものから、語るべき話は殆どないと主張した薄っぺらいものまで様々だった。ぼくは手に取ってはワンセンテンスを読んで棚に戻す動作を繰り返した。他人の自伝は、その人を知らなければ、酷く退屈だったからだ。最後にあきらめの気持ちを込めて著者の氏名すら書かれていない本を取った。『過去からの手記』と題され、つい最近出版されていたものだ。大きなフォントで印刷された文字から言っても、ページ数は分厚い手紙程度であり、自伝だとすれば、かなりの贅肉を削った文書で書かれているか、書くことを絞っていると考えられる。値段も書かれていなければ、出版元は聞いたこともない。ハードカバーというパッケージだけが一人歩きしているように見えた。あえて出版という形体をとった名前のない著者にぼくは興味を持った。実筆がそのまま印刷されていた。電子化したこの時代に、実筆を印刷するのはどのような意図があったのか組取ろうとしても無駄だった。ぼくは、妙に言い訳じみた言い回しの冒頭を読み、引き込まれていった。

自伝と不思議な体験をリアリティーのある事象として昇格するために苦悩している様子が色濃かった。仕事に対する熱意があった。ぼくはそれ程真剣に仕事を考えていた時間はあったのだろうか。ないと言えばそれまでだ。考える間もなく、ぼくはAというバンの記載が気になった。仮にAを黒いボディのバンとしているのが、本

当であれば、ぼくの乗っているバンが、そのころに造られた、『過去からの手記』の著者が設計し、世に送り出した車種と同じ可能性だってある。しかし、あまりにも手がかりが少なすぎた。

書架に戻すと、自伝本で満腹となったぼくは、いつものように小説作品の場所へ戻っていった。残りの時間を勘定して、軽い本をピックアップして読んだ。

閉館時間が近ずくと、案内放送がながれた。ぼくは何故だか悲しい心境となり、帰り支度をした。入口及び出口を指指すと、返却本を書架の戻している奈々子がいた。台車に乗っている数十冊の本は途方もない数だった。

「休み前だから、一斉に返却してくるのよ」

「大変だね」

困った様子もなく淡々と仕事をしていた。邪魔にならないよう意識しながら、ぼくは見守っていた。その意識は無駄だった。

「終わったら行くから、外で待っていてくれる？」

わかったごめんねと言うと、来ていた客は殆ど履けていた。慌てて外に出ると、たばこに火を付けた。すっかり暗くなっている空と、駐車場には数えられる程の車しかなかった。異性を待つ許容時間はどのぐらいだろうと考えた。ぼくは奈々子からいつも何時ぐらいに終わって帰宅をするのかを聞いていなかったし、年末の休館前はどれほど忙しいものであるかの尺度がなかった。情報が絶望的に欠落していた。携帯の着信をチェックしたり、ネットを回覧している時間はあつという間に終わってしまう。時間を潰すアイテムを持ち合わせていないと思いつつ、バンに戻ってラジオや持ってきたCDを聞いて過ごす選択をしなかったのは、ぼくを誘ってくれた奈々子への静かな感謝だった。奈々子がぼくを探して困っている時間を作りたくなかった。農民のような職員にどう思われようと知ったことではない。

三人の職員が別々の時間に出てくるのを見届けると、七時に奈々子が現れた。トレードマークになりそうなメガネを外していた。

「待たせてしまつてごめんなさい」

「いいよ。それよりコンタクトしているの？」

「はい、メガネは仕事中で、プライベートはなるべく外しているんです」

「その方が全然良いよ」

「本当に。来年からメガネ外そうかな」

絶妙なタイミングでタメ口となった。この子は意外と男慣れしているのかもしれない。

「バンで食事出来る場所に連れてってほしいんだけど、いい？」

「もちろん」

ぼく達は、止まっているビジネスホテルの駐車場に車を止めると、奈々子のお勧めで近くのレストランに入った。自家製を売りにしたメニューを出す洋食屋で、夫婦で経営していた。二階を家とした店内は広がった。忘年会承りますというポスターが貼られていた。夫が料理を作り、妻がウェイターをしている。奈々子は上手に年齢を重ねた妻と知り合いだった。

「久しぶりじゃないナナちゃん」

「久しぶりです佐々木さん」

佐々木さんは二人分の水をテーブルに置くと、ぼくの知らない身の上話をしていた。ぼくは聞こうと思っても殆ど頭に残らなかった。

「こちらはナナちゃんの彼氏？」

「ちがいますう。図書館で知り合ったんですけど、東京から来た菅野智也君です」

満更でもなさそうだったので、ぼくは嬉しかった。

「はじめまして、菅野です」

棒読みな自己紹介だった。佐々木さんの笑顔で幾分楽になった。

「そう、遠くから来たのね。ゆっくりして行つてね」

ぼくはハンバーグとライスにサラダ付きで奈々子はカレーにサラダ付でオーダーした。同じくビールを二本頼むと、佐々木さんは厨房の方に戻って行った。

「すごいいい人そうだね」

「うん、友達の両親で、私は大好きなの」

「友達は店にいないのかな？」

「さっきメールしたら、今日はバイトだって。かわいい女の子よ。もしかして期待している？」

「いやいや」

ぼく達はビールで乾杯した。旅のゴールをささやかに祝ってくれた。

「明日からどうするの？」

「まだ考えていないんだ。でも、二日後にはホテルの関係もあるし、戻ろうとは思うんだ。図書館も明日で休みに入るしね」

「そうなんだ」

「奈々子は予定とかあるの？」

「同じく考えていない。でもクリスマスは一人なんだろうな」

「同じく」

ぼく達は料理が出来上がるまで東京での流行り物と鹿児島での流行り物を言い合って楽しんだ。少しのデイレイがあるが、物に関しては大差なかった。週刊誌が一日遅れで発売されるぐらいの差だった。

図書館に通うようになって、規則正しい生活から食欲が戻ったので、自家製ハンバーグは直になくなった。奈々子が食べ終わるまでそっと眺めていた。

「私、人に見られながら食事するのに慣れていないの」

「ごめん、じゃあ横向いているよ」

「助かるわ。横向いてたばこ吸っていて」

「知っていたのか？」

「図書館の外でよく、遠くを見つめながら吸っているでしょ」

「遠くを見つめているかはわからないけど、じゃあ遠慮なく」

たばこに火を付けた。吸い終わってチラ見を見ると、奈々子は食事終わらせて、紙ナプキンで口の周りを拭いていた。

「自伝書を何冊か読んだよ」

「そうなんだ。何かためになる本あった？」

「ためになったかは別として、気になる本があった」

ぼくは『過去からの手記』について覚えている内容を話した。なぜその自伝書が気になったのかは整理がついていなかった。Aというバンの記載は曖昧で、著者からすれば仮にという表現だった。そう思うと感心が希薄になった。それ以外としては、ぼくの家庭環境に似ているのでもなく、バンが故障したことに關して不思議を感じているわけでもない。時間が解決してくれる予感もなかった。時間がたてば、自分の見た夢のように、リアリティーを失い、漠然としたイメージだけが残って、脚色しないと酷く抽象的になり、ひと前で話すネタにもならなくなる。日記を付ける習慣があれば別だが、ぼくにはない。それで奈々子に伝わるのかは不明だった。ただ気になったのだ。

「読んでみないとわからないね。結局、自伝書なのになぜ不思議な体験と過去への償いに要点を置いているのか」

「うん、ぼくも何回か読み返す必要があると思う」

「明日、見てみるわ」

たいして盛り上がらなかった。それもそうだろうと自分に突っ込みを入れた。

「私ね、兄が二人いて、エリートなの」

「どんな職業なの？」

「上が弁護士で下が父親の稼業を継ぐために同じ会社で働いているわ」

「父親の稼業？」

「不動産ね」

「すばらしい家系と言って置こうか」

「言って置く？」 清美は鳩が豆鉄砲だった。

「ぼくの本心は素直にすばらしいと言えないんだよ。特に今は精神状態があまり良い時期じゃない」

「よくわからないけど、お世辞はいらないよ」

言葉に棘があった。

三杯目のビールを頼んだ。今日はあまり飲まないようにする。知りあって直の女性に、口走ってはいけない話をして、それにも気が付く保障がなくなる量を超えてはならないのだ。ぼくと付き合ってきた彼女達は、そんなささやかな遠慮だけを好きになっていたのかもしれない。ビールが運ばれてきた。佐々木さんは素敵な笑顔の残像が目の前に現れるぐらいの早さで立ち去っていく。愛想のない店員ではなく、邪魔をしないよう心掛けているのだろう、育ちの良い女性だと思った。ぼくは横を向いてたばこに火を付けた。

「置いてきぼりなのよ。私だけ」

棘が刺さった原因が判明した。お世辞は万物に通用するものではない。

「気にすることはないんじゃない」

「そうしたいんだけどね。私がやりたい仕事をしているし、両親から文句はないし、いいと思っけていても気になってしまうの」

「わかるよ」

笑顔を作った。奈々子は微笑み返してきた。旨くいつていた。

もの凄い長く目が合っていたかと思えた。ぼくは奈々子となら旨く行きそうな気がした。好きになるには要素が不足しているけれども、今後関係を持続するのに、特別な理由がないように思えた。ぼくが様々な妄想を膨らまそうとしている間、間を持て余した奈々子は、明日は早番だからといい、腰を上げた。佐々木さんにタクシーを呼んでもらうと、近くで待機していたかのような速さで到着した。タクシーで家まで送ろうかと尋ねるところでいいと軽く断られた。棘がなかっただけよかったと思い、奈々子を見送った。さっきの間は恐らく人と接していない時間が作りだしたものだった。対面している人を気遣う行為が希薄になるのだ。ぼくにとっては心地よい間であつても、奈々子にとっては苦痛だったかもしれない。

人と接していない時間は恋愛のタイミングも鈍らせる。携帯番号も、

また会えるかも聞いていなかった。

昼過ぎまで寝てしまったぼくの財布には一万円札一枚と小銭しか残っていなかった。近くの銀行で退職金分の五十万円を卸した。ずっしりとした札束をその場で数えていると、順番待ちしているお婆さんの視線が気になり、その場を立ち去った。荷物がある程度まとめると図書館に向かった。午後三時には奈々子の姿はなかった。控え目な態度で職員に聞いてみると、午前中で仕事おさめですよと言った。ぼくは呆然としたまま、回復を待った。自伝書コーナーで『過去からの手記』がどうしても見つからないと、あきらめた。同じ職員に貸出があったのか、書庫に移動したのかはなぜか聞けなかった。ぼくにとってはそれ程の本だったのだ。

街中を適当にドライブして時間をつぶしていた。目を凝らすとクリスマスにちなんだデコレーションや、ツリーが沢山飾られていた。ぼくはたぶんバンで移動しながら適当な場所で過ごすことになるだろう。幸い奈々子の喪失感はなかった。

過去からの手記その6

過去への償いの後日談を記載する。私は以上の手記を、誰かとの会話形式もとらず、私個人の志向だけで書いたのは、物語性を出さずに、自伝という形式を強調したかったからだ。読み返してみても、カタストロフィーは存在しない。それ故退屈なものを受け取られるかもしれない。それを揺るぎないものとした理由は、父親の話を他の家族よりも多くしている理由と結びつけることができ、死後に見つかった数百項に及ぶ原稿用紙の内容が、私の陳腐な文書とは似ても似つかない位の完成度であったからだ。分量としては、短編に位置し、作品は十程度であった。時には情景を手書きで風景画とし、推敲を重ねて乱雑になった草稿は山のようになっていた。

父親は自分の特殊な資質を私小説という舞台で表現していた。幻想的な舞台を基盤としながらも、リアリティーのある物語の主人公は、まぎれもなく父親であり、今では確かめようのないので、推測になっってしまうが、心の内に秘めたものだった。

評論家でもないのに、その時代に受け入れられ、人々からどのように評価されるかまでの考察は記することができないが、少なくとも私の心は揺さ振っていた。正直なところ、私は手に取って読んでしまうのが怖かった。考え付くだけでも大量に発信された父親への罵詈雑言を、憤怒しているはずだと疑ってしまったからだ。その一部に私が登場しているとは思えなかった。しかし。変色していた原稿用紙に叩きつける憤怒は一切ないのだ。形を変えて、世の中への批評を表現する部分は皆無だった。精神衛生で書かれているわけではない。もしくは、父親にとって罵詈雑言は何も意味をなさない言葉のこえだめであったのかもしれない。私達が小さなことで腹を立てている姿はとて小小さく見えていたといっても過言ではない。あるのは夢に満ち溢れている、極端な表現で言えば、子供のように無垢な人間を描ききっているのだ。原稿用紙の最後に記されている

日付けを見ると、私が生まれる前から、家を出て行くまで様々だった。驚きを隠せなかったのは、父親がそのような趣味があったことを知らなかった私だけではなく、父親以外の全員だった。妹など、原稿用紙を見て、父親がここまで達筆であったことも知らなかった。母親や、今も健在な親戚はそれらの小説を読了すると決まって涙した。私も例外ではなかった。パースナリティーが、人よりも罵詈雑言を受け入れてしまうもので生涯を閉じた父親への懺悔として、涙という償いをした。それでは足りないと思った。幸せな自分を恥じた。父親の遺伝を使用して逃げた自分を恥じた。そんなことで幸せとなった自分と父親を天秤に掛けていることを謝罪した。

私の父親でありながら、終始謎の多い人であった。母親でさえ、そこまで極端に穏やかで無口になった経緯もわからない。昔からであったとしても、祖父がどのように父親のことを思っていたかも知ることが出来ない。他界するまで内緒でかき上げた原稿用紙の意図も不明だった。私は自分の幸せを自負しておきながら、父親のことに関してはなにもわかっていなかったのだ。

わかったことは、父親は他人を恨まず、争いをしなかった。どこを探しても、そこまで人を受け入れられる器を持っている人物はいない。無口で穏やかである性格を受け入れる程、社会には母性がないのだ。社会の歯車に歩調を合わせて生きていくのが、幸せの基準に辿りつく近道であるからだ。

そこで私は確信したのだ。私の開発したAでの不思議な体験と過去への償いをすべて話して、何も言わずに受け入れてくれる人は父親しかいないと。あの時見た生物は、父親が憑依して、私に忠告していたのだと。信じがたい話を記する勇気を、父親が与えてくれたのだと。

それからの私に関して記す項目は少ない。例えて言うなら、久しぶりの居酒屋で、会社の仲間と飲んでいると、二〇代位の若者が何組もいた。

あるデューブルの若者はカラーボールを休みなく、剛速球で投げ合っ

ているような会話のキャッチボールをしているかと思えば、今夜のセックスはどうしようかと当たり前のように話しているカップルがいて、小奇麗な男達は、カクテルをおしゃれに飲んでいる。私は随分年をとったものだと思覚した。

以上が私の思いの丈になる。一晚寝ずに考えて書きかけた文章なので、恥ずかしくて身悶えるかもしれない。

でも、私はこれらの手記を自費で出版したいと考えている。正確に言えば、インターネット上で、格安の自費出版サイトを利用する。私が始めて不思議な体験をした日に出版できればと考えている。例えば誰とも分からない自伝として、読んだ読者が焼却したとしてもかまわない。

どこかの図書館で読まれていることを願って筆を置く。

2008. 7. 猛暑の日より

砂漠の別荘

ビジネスホテルで明日朝までの料金を精算し、午後八時には用意が完了した。自動販売機から市場より値が張る缶ビールを購入してから飲んでいた。半分まで飲んでいると、部屋の電話が鳴った。フロントとのやりとりはさっき完了したばかりだし、どこかの店に出前をダイレクトにしているわけでもなかった。そんなぼくに電話をする人などいないのだ。これ程電話にでるのが億劫な状況はない。ぼくの意見など無視してコールは鳴り続けた。

「はい、もしもし」

「フロントです。菅野様に連絡を取られた方に転送します」

「わかりました。あの…」

どちら様からですかという質問をする前に電話口が切り替わった。聞いたことのある女性の声だった。

「もしもし私です」

「あー、奈々子」

「智也って電話だとかこういう声なんだね」

「ぼくにはわからないよ」

とは言え、反響して遅れて聞こえてきたぼくの声は思っているよりも低かった。やる気のない声だった。若干高めにしよう意識した。

「それもそうか。で用件なんだけど、明日出発だよね？」

「うん。十時までには出るつもり」

「じゃあ、明日は会える？」

「会えるよ」

ぼくは微笑んでいた。運はぼくを離していない。

「それでお願いがあるんだけどいいかな？」

「出来ることなら」

奈々子の息使いが電話から伝わってきた。緊張しているようには

思えない。但し、ぼくをお願いしてもできることは限られているのだ。

「私の別荘に連れてって」

「いいけども、別荘ってどこにあるの？」

「それは明日話すから。じゃあ、待ち合わせは図書館、十時半でいいかな」

「問題ないよ」

「ありがとう、じゃあおやすみ」

「おやすみ」

終始、奈々子ペースで動いていた。それでもぼくは舞い上がっていた。

奈々子の別荘がどこにあるか聞かないまま、ざっくりと地図を眺めていた。

八時に起きると、安いビジネスホテルの食堂で朝食を済ませて、バンの整備をした。ガソリンスタンドで三五リットルのガソリンを投入し、タイヤに空気を入れた。エンジン関連の点検をしてもらい、気の良い店員から特に問題なし判定が出た。東京を出発する前に行った時を思い出す。

十時二十分には図書館前に着いたが駐車所は鎖で通行止めになっていた。適当に路上駐車すると、一台のタクシーが来て、奈々子が下りて来た。ブルーのコートにタートルネック、スカートにスパッツをブーツと合わせていた。今日はメガネを掛けていた。ボストンバックを重そうに持っている、ぼくは荷台を開けて格納した。

「早かったんだね。待ったかな？」

「さっき来たところだよ」

「よかった」

奈々子は助手席に乗るとシートベルトを締めた。

「さて、別荘はどこに行けばいいの？」

「鳥取県よ。砂丘の見える場所にあるの」

「わかった」

一日では行けない距離だった。奈々子もそれを承知だったので特に問題はなかった。バンを発車させ、鹿児島県を出るまでは奈々子のナビでびっくりする位空いている道を進んだ。

「別荘ってなぜ鳥取に建てたのかな？」

「当時、父親は音楽を趣味としていたのよ。アコースティックギターは乾いた場所だととても良い音がするんだって」

「それだけの理由で別荘建てるなんて凄いな」

あまり調子に乗らないようにした。親の七光には敏感なのだ。

道中で立ち寄ったバーの話をして、大人のイケメンバーテンダーの話をした。寄っていくかと誘うと、先を急いでほしいと奈々子は言った。イケメンよりも目的地の早期到着だった。

「別荘にはどれだけ滞在するの？」

「決めてないの。たぶん納得するまで」

「納得する？」

「親から離れたいから。私も智也達の旅の話を聞いて共感したわ。でも私の目的は一昨日までそれだけだったけど」

「昨日、今日は増えた？」

「ええ。とても大事な目的だよ」

奈々子はバックから本を取り出した。運転しているぼくからも『過去からの手記』を取り出したのがわかった。

「内容はまだ覚えているよね？」

「だいたい」

「著者が不思議な体験をした場所も覚えている？」

「確か…鳥取県！」

「その通り」

某クイズ番組司会者のモノマネをしたらしいが似ていなかった。

昼ごはんは、通り掛ったコンビニのおにぎりだけで済ませた。奈々子のペースからすると、かなりタイトな旅になるかもしれない。コーヒーを二杯飲んでたばこを二本吸い、眠気をカットした。バン

を発進させるまでほとんど会話をしなかった。奈々子は気まずさを感じてはいない。この子もぼくと同じく、けっこうな間にも耐えられそうだった。ぼくはラルクアンシエルの『ドライバースハイ』を掛けた。この曲知っていると云った。ジェネレーションギャップは些細なことだから感じるものだから、知っている曲と一緒に聞くのは安心感があつた。

「話を戻すんだけど、その『過去からの手記』に出てくる不思議な体験の場所に何か思入れがあるのかい？」

「うん、この場所を探してみたいと思って」

「探す？ほとんど手がかりがないんだぜ？」

奈々子はバックから何らかのコピーを取り出した。

「少ない時間だけど調べたの。いつかの手がかりは見つかったわ」

「本当か？」

著者が出版されるまで他の人には話をしていなかったと記憶していた。

「著者がどこの誰でというところまではわかってるわ。正確には彼の奥さんに聞いた話なんだけど。彼の自伝書を読んだ話をしたら、快く協力してくれたの」

「奥さんってことは、著者には話をしていないの？」

うーんと唸っていた。気まずい時に使用するアイテムだった。

「著者は失踪中だってことなの。それも本が出版された今年の八月から」

「失踪中？行方不明ってこと」

「ええ。夏季休暇を利用して、母親がいる実家の九州まで戻って、東京に帰るところだった。

著者の母親が住んでいる場所は目と鼻の先だとわかったから、直接あつて話をしてみたかったんだけど、息子が行方不明で、ひどく精神を病んでいるらしいから、奥さんから詮索しないでくれと懇願されたわ。私はしぶしぶ了承した。

んで、車での帰郷だったから、殆ど滞在はできなかったみたいだけ

ど、著者は毎回驚く程早い時間で東京、九州間を往復するらしいわ。具体的な数値は三日みたい。私はそんなことした経験ないからわからない。でも、彼は車関係の仕事をしていたから、込まない道だとか運転に関する勘が鋭かったと言っていた。補足すると、『過去からの手記』には書かれていなかったんだけど、彼の家族は東京に移住していたの。奥さんには八月七日にこれから帰るよと連絡したきりだったらしいの」

「もう四か月にもなるのか」

「失踪中といってもそれほど長い期間連絡も取れないし、搜索願いを出しても全く手掛かりは見つからない状態だから、生命の存在も怪しくなるもの当然だよ。彼は放浪癖もなければ、会社を無断欠勤するような人でもない。そこそこの立場に居た見たいだし、何かあった場合は必ず連絡は怠らないという話よ」

「ぼくも会社に勤めていればそうする」

「うん、でも見つからない。彼が事故を起こしていたり、自殺をしていたりすれば、四か月もの間、彼自身か乗っていた車は見つかるでしょう？」

「ぼくもそう思う」

「でも見つからない。凶悪な犯罪者に向けて、指名手配を全国に展開するようなこともしているらしいの。全国に展開して見つからないってことは、彼がまだ生きていて逃亡している可能性が高いですよ。それで失踪中だと誰もが信じているの。そこで、図書館を利用して、その時期の新聞を調べて記事が載っていた。八月一五日付けの記事には」

奈々子は一息つくくと、コピーを目の前に置いた。

「細かな内容は端折るからね。（株）XXXの会社員堂本正氏（50歳）は八月七日を最後に行方不明となっている。堂本正氏は長期休暇を利用し、九州のXXX市に実家を訪れた後、東京港区に帰宅する最中に何らかの要因で行方不明となった。警察はあらゆる角度から調査を行っている」

「事実みたいだね」

「ええ、その後の調査報告は一回だけなの。九州から東京間、全国と調査を進めているとしか書かれていない。警察が調査のために『過去からの手記』を読んでいることは確実なの。それで不思議な体験をした場所も捜査したらいいわ。でも私たちが持っている情報と同じく、具体的な場所の特定はできていないみたい。彼の救出された時期に関係していた人の特定もできない状態。奥さんもその時には彼の看病をしていたみたいで、そこからも調べてみたらいいんだけど。それで具体的な場所までは知らない。結局捜査は難航して、今では彼の捜査を打ち切りとして、誰かの情報を待っているだけの状態になっているの」

「そうすると、手がかりは今んとこ殆どないわけか」

「そうでもないわ。奥さんは彼の不思議な体験をした場所に執着していた。『過去からの手記』に記載されている通り、小屋がなくなつて、現象について調べても埒が明かないと判断した後、彼はその場所についての執着心はなくなった。それはあくまで奥さんの推測なんだろうけど、信じてもいいと思うわ」

「ならば奥さんがその場所に執着する理由はなくなるんじゃないの？」

「そうね。でもね、八月八日は彼が二十年前に、Aというバンを試運転している際、初めて不思議な体験をした日だったの。九州の鹿児島から出発して東京まで三日とあれば、だいたい八月八日に鳥取にしていると推測出来るでしょ。後はわかるよね？」

「点と線が結ばれた。つまり、著者は自伝書を出版して、改めて書くことで、二十年前の八月八日に起こった現象に関心を持った。或いは東京に帰る車中でたまたま思い出した。それで実際その場所に行つて、神隠しにあった」

「理解が早いね。私もそう思った。奥さんは警察の取り調べに対して、二十年前の八月八日に彼が行方不明になったことまでは話していないの。正確に言えば、忘れていたらしいんだけどね。探しもの

をしていたら著者が自伝本を書く時に使用していたメモを見つけて、八月八日の記載があった。それ以外は酷く個人的な情報ばかりで、手がかりはなかったから警察には言っていないみたい。とすると、私たちの持っている情報が最先端を行っているということになる」「それでもまだ、漠然とし過ぎてはいないか？」

「まずは、彼が運びこまれた病院がある。住所まで教えてくれたわ。緊急だったから、その場所から一番近い病院となるでしょ？」

「うん、じゃあ、そこら辺周辺を探しまわるというのかい？その頃は近くでも、今で言えばとてつもなく遠いかもしれないよ」

何だか途方もない話をしているように思えた。

「可能性はあるわね」

前を向いて運転しているので表情までは伺えないものの、奈々子はぼくに同意しているようには見えない。熊本から福岡に入った。奈々子はしばらく黙っていた。信号が赤となり、ぼくはたばこに火を付けた。

「智也の意見は最もだと思うわ。でも、私がこれから話す内容で気が変わるよ」

「楽しんでない？ってかどういう内容？」

信号が青、出発した。奈々子はたっぷりの間を置いた。

「私の父親はさっき言った理由で別荘を建てた。でも、今はもう居ないんだけど、当時八十歳だった祖父は絶対にその場所へは行かなかった。恐ろしい程の拒否反応だったらしいの。父親は何をするにでも誰かに相談する習性がないのよ。自分の欲求に対して即行動するタイプなの。それでも理由を聞いて、父親もその別荘とは疎遠になってしまったの」

「何かあったのかな？」

「祖父は子供の頃、父親の仕事の関係上、全国を駆け巡るような生活をしていたの。今は廃校になって、あるかどうかもわからなくしまった小学校は、その場所の近くにあった。それで祖父は友達を連れてその場所近くに冒険しに行ったらしいわ。軽い気持ちで行った

のに迷ってしまった。とても霧が強い日だったらしくて、二人で泣きながら学校への道を探していた矢先に目の前で友達が消えた。祖父は奇跡的に助かったらしいんだけど、その友達は結局見つからなかった」

「つまり、奈々子の祖父がその場所で友達を失った。著者が体験した場所でも神隠しの現象が起きた。よって二つは同じ場所で起っていたと」

「そう、私の父親の別荘からそう離れていないわ」

「マジっすか！」

「まだ驚かないで」

奈々子は冷静だった。ぼくは自分だけ驚いてい羞恥心で気持ちを抑えた。

「これは好奇心で聞いた話なんだけどね」

「うん」

「二十年前に著者が試運転にAを使っていた時のナンバーを奥さんが個人的に調べていたの。『過去からの手記』を読んだ後だったらしいんだけど、会社の人に聞いたら調べてくれた見たい。仮ナンバーとして使っていたらしいんだけど、品川「ぬ551—XXX」」

「なんか聞いたことがあるな〜ってこのバンと同じ！」

このノリ、ツッコミを榊原さんに見せてあげたかったというぐらい意識していなかった。ぼく達は堂本正氏と運命の中で結ばれているのかもしれない。二十年前に造られたバンとは思えないのだが、ぼくはこの車の製造に関しては何も知らなかった。安ければいいやという適当な感覚でしかない。堂本正氏は当時から東京で会社員をしていたのなら品川ナンバーでもわかる気がする。でも『過去からの手記』ではAは消えたと記載してあるのだ。リアリティーを出すために、デテールに拘っている箇所があるにも関わらず、会社の業務についてオブラートに包んだ表現としている性格からすると（自社のコンプライアンスのため）、堂本正氏が嘘の記述をしているとは思えない。但し、車なんて考えられないような数が、毎月生産

されている。その中からぼくのバンが一致するなんてどれほどの確率なんだ。気味悪くなった。

「その場所にいる可能性が高い。一刻も早く見つけなければならないと」

「そう。警察よりも情報を持っている私達がね」奈々子はきっぱりと言った。

地元のラジオを掛けた。DJは方言を活用していた。ぼくの知らない最新ヒットソングを警戒な言葉のリズムと共に流していた。

福岡の小倉市に入った時は十時半だった。夕食も取らずに運転し続けるのは、長旅に慣れてきたぼくにとってもこたえた。なんせ行きは九州を三日もかけて縦断したのだから。いつも思うように、帰り道は早い。今回は体感だけでもなく、時間的にも早い。

「そろそろ休まないか？」

「著者は三日で東京まで行くのよ」

「相当タフなんだよ。それに今の状態では、君を事故に巻き込んでも言い訳が立たない」

「ごめん、わかったわ。後私は君ではなくて奈々子だからね。意外と傷付くの」

「奈々子休もう」

バンをファミリーレストランに止めると、ぼくは店のメニューではトップクラスに高額なステーキとライスを、奈々子はクラブハウスのサンドを頼んだ。これだけ長い時間いれば、話していない世間話がなくなってしまう。疲労でお互いへの興味が薄れてくる。料理を黙々と食べた。ドリンクバーでコーラを二杯飲むと幾分ましになった。奈々子はごちそうさまを言うと、行きましようと言った。

「私が運転するからキーを貸して」

部屋の鍵と、実家の鍵と同じリングに収まったキーを渡した。

「き、じゃない、奈々子も疲れているのでは？」

「さっきちょっと寝ていたから大丈夫」

「いつの間に、気が付かなかった」

「そういう才能があるみたいね。私には寝ている気配を消す能力、智也には運転に夢中になって助手席の人が寝ていても気が付かない能力」

「ぼくの方は才能とは呼べないよ」

「悲観しないで、助手席で寝ているだけで怒る人もいるの。大体いつになっても喧嘩の種にするんだよね、そういう人は。私は嫌い」

エンジンを掛けると出発した。運転の勘はいいようだ。ぼくは小倉で別れた仲間の話をした。明日香も清美も元気だろうか。清美の詩はまだ読めないでいた。読んでしまえば清美を思い出してしまいそうだったから。

「私も一緒に旅したかったな」

「じゃあ、今度は一緒に」

「ねえ、智也ってさ」

「うん、何？」

「冷たくて、淡泊で、繊細でズボラ？」

「よくわかったね」

凶星はぼくを傷付けた。自分の人生を後悔しているからだと思った。ぼくは繊細さを見せつけないため、傷付いたことに関しては反論しなかった。

「私は嫌いじゃないよ。むしろ好きかも」

「出世はしない性格だけどね」

「知っている」

関門橋を渡っている最中にどっと疲労した。

ぼくが起きた時には鳥取に入っていた。時間は四時だった。奈々子はラジオを消して無音で運転していたのだ。寝れるように気遣っていたのだろう。奈々子からは眠気を感じない。若さであると思っただが、若くでも年をとっても共通して疲労は訪れる。やるべき命題をこなす責任感が疲労を凌駕しているように見えた。砂丘が見えてきた。ぼやけたぼくの意識からは雪であると勘違いしても可笑しくない。フロントガラスに付いていた夜露が霜に変化していた。近く

で見ると途方もない砂が大地を侵食しているようだった。横目で奈々子を見ると、横顔のラインが綺麗だった。唇を重ねたいという欲求がこみ上げてくる。助手席でリラックスしている分、余計なことまで考えてしまう。もちろんそれは、本能に対して正直になっているだけだった。

山道に入って十分位で奈々子の別荘に付いた。砂丘に近いから温暖なのかという幻想は崩された。吹く風が顔面を切り刻むのではないかと思えるぐらい冷えた。灰が収縮して、意識しても体の震えが収まらない。二階建ての別荘はアメリカの田舎にある住宅にも見えるが、回りの環境からすれば異質だった。環境に順応できていないアウトローだった。ぼくは大きいと言うと奈々子は関心なく頷いた。土地が安いのかと言ってバックからカギを探していた。電気が付いていれば、誰かが住んでいそうな佇まいだった。別荘は両脇を森に囲まれていた。ぼく達の居る位置から別荘があり、その向こう側は綺麗に木々がない。

奈々子は別荘の中心に位置する玄関のドアを開けると、配電盤のブレーカをすべてONにした。ブンという音になると、部屋の電気が一斉に点いた。広い廊下は、奥の階段へと繋がっていた。二階への階段と地下室への階段。脇の壁は六つのドアで埋め尽くされている。天井は三メートルを超えていた。クローゼット並みの靴入れは空だった。黒い傘だけが取り残されていた。奈々子は廊下を通して奥の右側のドアを開けた。二十畳はあった。入口付近に大型テレビとソファにテーブル、カウンター風のキッチン、鎧戸の向こうはバルコニーへと続いていた。生活感がなく無機質で、鮮烈されている部屋だった。ぼくはアパート暮らしをしてからというもの、テレビで放映される芸能人の部屋がこんな感じでの生活をしていて、いつ掃除をしているのか不思議に思っていた。芸能人にはぼくらよりも忙しいスケジュールで仕事をこなしている。家に帰ってくる時間も殆どないだろう。一人で住んでいればなおさら掃除なぞやっている時間もない。それでもほこり一つない部屋を所有しているのだ。奈々子

の父親がやっているようにお手伝いさんを雇っているのだろうか。それとも自分で。考えても無駄だった。

「コーヒーでも入れるわ。それともお酒がいい？」

「お酒がいいな」

奈々子はカウンター奥のキッチンに入ると、セラーからワインを取り出して、オープナーでコルクを抜いた。寒さが和らいで行くのが不思議に思うと、暖房が利いていた。それもぼくのアパートで使っているエアコンのパワーとは比較にならない。北海道で使うような暖房だった。ブレーカをONにすれば快適な空間が再現される。夢のような場所だった。ワインのツマミはクラッカーにビーフジャーキだった。チーズ類は日持ちしないからと奈々子は言って、なぜチーズ？と聞くと、ワインにはチーズでしょ、一般論と言った。軽い乾杯をすると、ワインを口に運んだ。渋みの聞いた赤ワインだった。味覚が優れていないぼくでも長い年月寝かせて置いたものであると感じた。

「高いんでしょう？このワイン」

「わからないわ。とりあえず古そうなものを選んだだけだから」

「銘柄の価値はわからないけど、古いほど高いのはわかる」

一九八八年とえばそこそこ古い。二十年前のワインなんて飲んだことがない。

「飲んでしまえば同じ味だから」

「同感」

テレビも付けずに飲んでいた。別荘の造りは廊下を隔てて対象なだけだという。右左に別れたドアと部屋は全く同じつくりで、家具だけ違う。

「広いだけで何の面白みがないの。とりあえず建てようとした意図が見え見えだわ。私のこともとりあえず育てればいいって考えていたのよ。自分中心のエリートは、仕事や趣味の範囲外には細部にまで拘る余裕がないからしょうがないわね。自分はすごいんだと自信を持っているくせに、大切なものに注力していないことには気が付

かない。世間はそんな部分をみないからね。外面だけ」

「普通の家庭では味わえない闇があるんだね」

「贅沢な悩みだとは思えないわ」

「たぶんぼくもそう言うと思う」

ワインボトルが空になった時点で奈々子はバルコニーに行こうと言った。鎧戸を開けると外は薄ら明るくなっていた。ワインで火照った体を急冷させらてた。バルコニーは木製で、日除けパラソルとウッドテーブルにウッドチェア四組があった。その向こうに広がっているのは海まで見える砂丘だった。全体が見下ろせる場所だ。スキ―場のモーグルコースの斜面を平地にして巨大にしたみたいな光景が一面に広がっている。薄ら明るい空から日が昇ってきた。オレンジ色の光が砂丘のふっくらしたこぶの向こう側から指している。砂丘は少しの間真っ黒となって、やがて全体を照らしだす。寒さを忘れるほど幻想的だった。使い込んだ眼球が蕩けるようだった。

「この時間の景色が好きなの」

「綺麗だ。厭なことを忘れるよ」

バルコニーの敷居に手を掛けて、しばらく二人は立ち竦んでいた。ぼくはそつと奈々子の手に手のひらを載せた。否定も肯定もなかった。空が青くなるまでに時間はかからなかった。

ぼくは気の利いた口説き文句は言わなかった。奈々子なら、その先に進んでも抵抗しないと思う。単純にぼくの勇気が劣化していたのだ。純粹な欲に対して臆病になる。年を取ることの命題なのかもしれない。奈々子はどう思っているか確認できず、心底冷え切った体を暖房で癒した。

「智也は二階の部屋を使って。どこでも良いわ。たぶん最低限の手入れはされていると思うから」

「わかった。後、洗面台と置きた時にシャワーを借りたいんだけどいいかな？」

「ええ、部屋に付いているから使って」

おやすみを言うと、二階へ向かった。驚いたのは、玄関を抜かし

た空間が一階とまったく同じであることだ。ここまで狂いなく同じものを作るのは、違ったものを作るより難易度が高いと思わせる。建築家もロボットではないから。

ぼくは階段から一番奥の角部屋を選んだ。広すぎる部屋には、予想通り無機質な作りだった。部屋の中心にあるドアを開けて洗面台を確認した。もう広さに慣れてしまい、浴槽の広さにも無感動になっていた。お泊り用のブラシと粉で歯を磨いて顔を洗うと、ベットに寝てたぼくを付けた。ぼくはこの生活に慣れてから、東京のアパートに戻って普通の生活ができるのだろうか。生活水準を上げるのに適応するのは容易だが、生活水準を下げるのに適応するのは難しい、何となくわかる。墮落するのは容易で、普通の生活に適応するのは難しいと同じように。

ぼくはうとうとしていた。ドアを開ける音で覚醒した。錠戸を閉め切った暗闇でも奈々子の存在は確認できた。眠れないのかいと尋ねようとした時、奈々子の唇がぼくの唇と重なった。

「今日から調査がんばろうね」

ぼくは何も言えず、奈々子は手を振って部屋を出た。変わっている子だと思った。唇の柔らかな感触が残っていた。ぼくは眠りに落ちる前に恋に落ちた。

起きたのは四時間後だった。酒と興奮のお陰でわけも分らない夢をみて眠りは浅かった。それでも体調は悪くない。ぼくはシャワーを浴びてたぼくに火を付けると近くにいる奈々子の事を思った。キスはぼくを受け入れてくれる合図なのだろうか。それとも、最近の若い子は酔った勢いでキスをするなんて当たり前なのだろうか。若い子の一般論を考えるとやり切れなくなったので地下室へ足を運んだ。地下には五種類のアコースティック、及びエレキギターとベース、ドラムセットにタンバリン、サックスまで揃っていた。防音にコーティングされた壁はスタジオそのものだった。テレキャスターのエレキギターにケーブルを付け、アンプに差し込んだ。高校時代

にやっていたBOΦWYの『BABY ACTION』を引いてみる。指は覚えていた。音も狂ってはいない。カッティングの音が、乾いていた。タイトで鋭利な金属音は僕を夢中にさせた。ソロが上手く引けないと『イメージダウン』のリフにシフトする。やはりソロが弾けない。次に『BAD FEELING』この曲はリフ自体が弾けなかった。ビートルズの曲も、ローリングストーンズの曲もデビッドボウイの曲も、セックスピストルズの曲も断片を引いているだけで、一曲すべてをコピーできるものがなかった。ドラムセットで適当に叩いてみた。ハビートを叩くのがやつとだ。自分の不甲斐なさをスティックで連打して解消した。ダララララララララララララララ

「もうちょっと音ゆるめてくれないかな？」

不機嫌な奈々子が階段から下りて来た。パジャマ姿でも、最低限の身だしなみを完了していた。メガネを掛けないで緩んだ表情は魅力的だった。ぼくは下手な音を出して申し訳ないと謝罪した。

「音楽が好きなの？」

「昔は夢中だったけど、演奏はダメ」

「そうなんだ」

奈々子が言うと、ぼくが繋げっぱなしだったエレキギターを手を取った。ピックを渡すと、ジュリーアンドマリーの『くじら十二号』を完演した。決して簡単な曲ではない。リフ、Aメロ、Bメロは出鱈目に見えてリズムが存在するのだ。ボーカル、ドラム、ベースのアンサンブルはなくとも、完全にコピーしている様子だった。

「すごいじゃないか！」

「バンドをやっていたの」

調子に乗った奈々子はラルクアンシエルの『風に消えないで』と175Rの『ハッピーライフ』を演奏した。

「智也の世代でしょ？」

「全部聞いていたよ」

奈々子はフーと息を付いて、エレキギターをスタンドに置いた。

音楽のセンスは父親の影響だろうか。

「父親はこういう音楽は認めなかった」

「世代が違い過ぎるんだろうね」

「古い洋楽に拘っていたわ。ビーチボーイズだとかニールヤングだとか」

「そんな世代だろうね」

「私は洋楽を殆ど聞かなかった。バンドのメンバーは皆取りつかれたみたいに洋楽だったわ」

「音楽通はそういう傾向があるみたいだけど、ぼくは邦楽の方がいいかな」

「音楽性の違いって致命傷になるの。特に音楽でしか通じ合っていなかったから。外国コンプレックスの塊で、私はついていけなかった。それって父親がその世代の洋楽だけしか聞かないようなもんでしょ？」

「わかる。おじさんが演歌しか聞かないように」

「結局私も邦楽の狭いジャンルしか聞かなくなってしまったの。皆を貶していたけど、私も同じだって思ってたね。それでバンドを止めた。その後はジャンルを分け隔てなく聞けるようになったわ。肩の荷が下りたっていうか、楽になった」

「自分に合った曲、好きな曲を聞いているのが一番体に良いよ」

その通りねと奈々子は言った。

「私は複雑であったり、最初に聞いてなんでこんな曲をつくったのかわからない曲を何度も聞いてゆく内に、好きになることがあるの」

「それは誰でも同じだよ」

「うん、でも何が理由で何度も聞いて好きになったかまでは覚えていない。時間が経つと、何度も聞いてから好きになったプロセスさえ忘れて、この曲は元々好きだったかなってなる。どこが好きで、どの詩がいいかも聞かれると困る。これって音楽家を目指そうとしている人間としては失格なの」

「そういうものかな」

「ええ、音楽家又は芸術家の卵は没頭するから。彼女の誕生日は覚えていなくても、何度も聞いて好きになった曲の細部まで覚えている」

「なるほどね。それでも奈々子は、ぼくから見れば芸術家肌だと思うな」

「音楽家ではなく、芸術家？」

「うん、若い子のイメージから離れている。これは奈々子が老けているってことじゃなく、変わっているってこと。集中力もあるし、興味があると没頭する」

「ありがとう、私そういう褒め言葉が好きなの」

「自分の人生を後悔していないんだね」

奈々子は満面の笑みで頷いた。

カン詰めのある合わせとカップラーメンで朝食兼昼食を済ませた。気温は年末を控え、日に日に下がっていた。防寒対策に、厚手のフアッションとなった。この場所では、お洒落をしてもあまり意味をなさないので。砂丘自体、夜は氷点下になる場合があるのとのことだ。

「まずは廃校の小学校に行きましょう」

砂漠の別荘からバンを発進させた。

ミッドナイトスノー

山道は入り組んでいた。ヘアピンカーブに加えて道幅が恐ろしく狭い場所が続く。昔はあった、この先行き止まりの看板は消えてしまったのではないかと不安になった。軽自動車でも慣れて居なければ通りたくない悪路が満載だった。奈々子は物怖じせず音楽を聴きながらぼくをナビした。落石注意の看板を何度か通り過ぎると川が見えてきた。所々ねじ曲がったガードレールが存在して、ぼくを安心させた。

「あそこに止めて」

奈々子の言う通りにすると、バックから保温性のある水筒を二本取り出した。ガードレールの隙間から、獣道を下って行き、透明度の高い川があった。川辺の石はすべて楕円形だった。裸足になっても足つぼを刺激してくれそうだなと思っていると、奈々子は水筒に水を汲んだ。

「別荘の水道水よりよっぽどマシなの。安全だから心配しないで」と言って一本の水筒をぼくに渡した。ぼくも川の水をすくって飲んでみた。なんとなく安全のような気がした。釣りをしている時間はないわと言わんばかりに早く切り上げた。山道をさらに徐行で三十分進んだ。ここまでの道のりですれ違った車は一台もない。下方に数えられる位の民家が現れた。その集落から人の気配はない。社会から隔離された場所なのかもしれない。線路もなければ、スーパーもなければ商店街もない。文明という観点から、かろうじて数台の軽トラックが存在するだけだ。堂本正が運び込まれた病院も見当たらなかった。奈々子の別荘とは違った意味で生活感が欠如しているのだ。日本昔話の実写映画でのロケ地になると思った。

***小学校と書かれた看板は既にこの世には存在しないもののようにくすんでいた。看板を支えている鉄柱が少しの力でも加えれば折れてしまいそうな頼りなさがあった。雑草が覆い茂った、獣道だ

った場所を進む。野生の熊が生息するのにぴったりの場所だと思ったが他人事だった。奈々子は手を握ってきた。汗をかいている。緊張しているのだと思うと、奈々子が愛おしいと思った。

廃校は存在した。ぼく達はそれを見て手を離れた。窓ガラスは割れまくりで、校庭から伸びた雑草の蔓が建物を侵食していた。元は白い外壁もたはこの油で黄色くなったような色をベースとして、茶色の斑点が加わっていた。サッカーのゴールネットは朽ち果てていて、骨組みがすべて錆びていた。時計のガラスは割れていて、何十年も前より針が三時二十分から進んでいない。暗くなったら絶対に見たくもない場所だった。霊能者がそこに霊がいますと発言すれば、何の疑いもなく信じるだろう。玄関口には立ち入り禁止の看板が雑に転がっていた。躊躇しながら校内を調べると、げた箱は荒れ放題でカビ臭かった。掲示板の紙は禿落ちていた。廊下には窪みがあり、小さな水たまりができている。部屋には生徒用の机が残っていた。どれをとっても使えそうにない机と椅子だった。構造は一学年三組で、一組は三十名で三建てとなっている。どんな悪いヤンキーが校内で暴れたとしても、これほどの廃墟にするやっはいないだろう。満遍なく、絶望的な破壊だった。この学校を建築した人たちは、この様子を見てどう思うのだろうか。古い学校だからなと割り切れるのだろうか。

「あまりいい空気じゃないね」

空気が淀んでいてこの世の場所とは呼びたくない。

息苦しく、物の腐敗臭が漂っていた。

人骨があるかもしれない。

霊能者でなくとも、誰かの声を聞いてしまうかもしれない。

あるいは廃校事態が霊となってぼくらを襲うかもしれない。

何一つとっても、ぼくらに良い作用を与えなかった。

「ねえ、屋上に行こう。お願い」

ぼくは反対する要因がなかった。階段を上って、壊れて無くなっていたドアを通ると屋上だった。予想通りの廃墟だった。地面は長

年の雨が運んできた汚れをすべて吸収していた。それでも校内にいるよりはマシだった。深呼吸をして、屋上から見下ろすと大した発見もなく、たばこに火を付けた。座ってくつろげる場所がみつからなかった。

「これ以上詮索してもしょうがくない？」

「そうね、祖父の友達が消えたのはこの近くだから行ってみよう」
たばこを吸い終えると、奈々子と手を繋いだ。奈々子の手は汗が乾いて冷え切っていた。触ったばくは身震いをするぐらいだった。

「お願いなんだけど、ここを出るまで手を離さないで。そうしないとどこかに行ってしまういそうな気がするの」

「うん、大丈夫だから」

同じ道のりを歩いた。安心できる場所はなかった。立ち寄っては行けない場所が目の前に存在していた。奈々子と繋がっている感触だけが救いだった。

心底冷え切ったばく達は、バンのエンジンを掛けると、暖房を強にした。相変わらず車の通りはない。世界で恋人と二人取り残された心境はこんな感じなのだろうか。頼れるのは自分と相手だけ。悪くないと思った。

「さて、どう探せばいいのやら」

ばくは考えた。堂本正が消えた現象をこのいささか大きな鉄の塊で見つけられるという想像が出来ないのだ。車ではなく、自分の体で自然と接し、それで現象が発生するとは思えない。

「一つ聞いていいかな？」

「うん、何？」

「ぼくらは堂本正の消息を探している。それって同じ現象を体感するってわけではないよね？」

「当たり前よ。祖父の友達や、恐らく堂本正も消えてしまった現象に立ち会ったら、私たちも行方不明となるだけ」

「とすると、消えた場所を探すのではなく、消えた二人がどこへ行ったかを探すできないかな？」

「どうやって？」

「うーん」

相談した結果、地域住民に聞き込みをすることとなった。

その日は地域の土地柄を知るため、周辺を走った。更に山道を奥へ行くと村があった。戻りの道のりを考慮し、何もせずに引き返した。気温は夜にかけて急激に下がり、雲が濃くなってきた。栄えている場所で食料品を大量に買い込むと、別荘に戻った。ブレーカによってすべてが起動した。奈々子は食料品を手際とく特定の場所に収めていく。ぼくはたばこに火を付けると、『過去からの手記』を再読した。その間、奈々子は部屋着として白のセーターにジーンズのスカートになっていた。生足は程良く日焼けしていて、伸びやかだった。

キッチンでパスタを茹で、タラコにバターを絡め、青シソを塗したパスタと、エリンギ、シイタケ、マッシュルームをオリーブオイルでゆでて、醤油風味のパスタを作っていた。手際も良く、得意料理なのだろうと判断した。ホウレン草と山菜にベーコンを炒めたサラダ付きだった。味も悪くない。料理が上手いねというと、照れていた。

「好きなのよ」

「バンドしている人ってやらなそうだからさ」

「偏見だね。かた付けるのは得意じゃないんだけど」

「皿洗い器がある」

「母親もあまり得意じゃないの。後始末が不得意な家系なんだよね。だから、トラブルがあると、穏便にことが進まない。話が拗れてもやっていける自信だけが大きくなるんだよ」

皿洗いと後始末の関連性について考えた。例えば文化祭があったとする。準備段階では期待しながら働く。文化祭当日でピークを迎え、後かた付けは酷く憂鬱となる。料理も同じ。的を得ている。

「皆そんなものでしょ。作り出す過程と完成した時に皆は賛美するけど、後の工程は蔑にしがちなんだ。廃校のように」

「そういう意味だと、自分から進んでかた付けが出来る人は尊敬しちゃうな」

「確かにね。世の中、黙々と作業をこなす脇役を賛美しないから誰もが主役になろうとするんだろうな」

ワイン一本が空になった。ペースが速い。もう一本追加した。

「私って皿洗いも嫌いだし、主役に見えるのかな？」

「中間なんだろうね。主役の両親に守られている脇役、考え方は中間のような気がする」

「智也に嫌われたくないの。今の私が気に入らなかったら、皿洗いもする」

グラスに注がれたワインをこっそり飲んだ。ビールの一気飲みのようなワイルドさがなかった。

「無理に直す必要はないよ。時間を掛けてやればいいと思う。それに、ぼくは奈々子を引きつける魅力があると自信が持てないんだ」

「輝いている魅力はないけれども、私を安心させる魅力はあるわ。それはとても大切な。農民のような人が醸し出す安心とかは別物。挙動不審な人が、ようやく彼女と呼べる人が出来て、浮気もしない絶対しない安心とも違う」

「凡庸から少し外れているとは思う」

「まともである必要はないと思うの。はみ出ている犯罪をしない安全な人はいるわ」

「気が合うのかな？少なくともぼくはそう思う」

「私も同じよ」

目が合うと、奈々子に引き込まれてキスをした。ワインの味がした。ぼくは奈々子のメガネを外すと再びキスをした。舌が絡まり、動かすのがしんどくなるまで続いた。そのまま奈々子と寝るのが自然の流れだった。それを遮断したのは雨が雪に変わる光景だった。鎧戸をガラス窓だけにしていなければ遮断もなかった。頭に来なかったのは、紛れもなく恋の余裕であり、同じ屋根の下で過ごしていれば、次の機会があるという安心感だった。バルコニーからの外の

闇は、雪によって光っていた。ぼく達はワイングラスを持ってバルコニーに出た。雪の結晶は、手に取ると形がわかるぐらい力強かった。降り始めて時間がたっていないのに、ぼく達の足跡は明確に残った。

「砂丘が真っ白になるのよ」

「砂漠に雪が降るなんて見れないよ」

ぼくは奇跡が起こったと思っていた。吐く息が白く、凍ってしまいそうな気温でも、それを凌駕する感激があった。ワイングラスに雪が注がれる。ぼく達は贅沢な環境に乾杯した。

奈々子が寒いという髪に雪がつもった状態で抱き合った。どんな寒さにも耐えられた。

バルコニーから戻ると、ぼくの欲望は頂点に達していた。ガラス窓を閉めた瞬間、奈々子の唇を塞ぎながらセーターに触れた。悴んでしまった手の震えはそれで収まった。体のラインを確認した後、胸へと移した。ゆっくりとした動作で腫物を触るように。セーターによって凹凸が確認しなかったが、しっかりと張りのある胸だった。ウエストのラインも想像以上にしまっていた。それでいて柔らかい感触で、奈々子から声が漏れた。地声でもなく演じているようなわざとらしさもない。ぼくの肉幹へ体の殆どの血液が注入されていた。心臓の脈動と同じリズムで肉幹が脈動しているのがわかる。ズボンとボクサーパンツがそれを抑え込んでいる。ぼくの手は胸から背中に移動し、摩るようにした。奈々子の唇に絡めていたものを耳に移動させて、耳の形を確認した。舌を這わせると

「立っているのが辛い…」

と言い出した奈々子をソファに座らせた。慎重に耳から頬に移動させて、再び口に戻した。

ぼくの手は、奈々子の足へと移動し、スカートの中へと移動させていった。

「お風呂に入らせて」

「このままでいいから」

「ダメなの、お願いだから」

蕩けるような眼から本気の眼にかわった。あまりの頑なさにぼくはしぶしぶ同意した。ぼくは落ち着くためにたばこを吸い、シャワーに入った。肉体は落ち着いていなかった。体全体が踊っているようだった。終始勃起している肉幹は、酔いが覚めてきた状態だとひどく情けないと思った。歯を磨いて奈々子の帰りを待った。雪の夜を待っていると、バスローブに、半乾きの状態の髪の毛を後で束ねていた。さっきのファッションでなく、ちよつと残念だったが、そのバスローブ姿もセクシヤルだった。

「ベットに行こう」

二階へ移動するまで何度もキスをして、階段を転げ落ちそうになった。ぼく達にはそんなスリルさえも楽しんでた。二回の中部屋を使った。なんら変わらない部屋だったけれどもLPプレーヤやカセットプレーヤ、CDプレーヤがあった。音楽は掛けずぼく達はベツトに入り込んだ。部屋の電気を消して、空間が止まった。酷く緊張した。奈々子の方から手を握ると再開した。バスローブのなかは下着だった。レースの白い下着を凝視した。

「そんなに見ないで、はずかしいよ」

「もう少し見させて」

首筋に舌を這わせた。奈々子の声が漏れてくると、ブラに手を掛けて外した。小さい乳頭までもがかわいく見えた。そつと口付けして転がした。奈々子の息が荒くなってきた。肩ほうの手で触れるか触れないかの感触を味わったあと、唇に戻って、奈々子のふとももからパンツの中心に手を移動した。中心は湿っていた。下着の上からもわかるぐらいに溢れていた。周辺を指で撫でた。唇から離すと胸、下腹へと舌を移動させて、感触を確かめた。湿っているパンツを脱がせようとすると、奈々子手で制した。ダメ恥ずかしいといっているながらも、ぼくが粘着質に脱がそうすると抵抗しなくなった。完全に脱がすと、足を閉じた。閉じた足の間から奈々子の中心を探っ

ていく。声とともに閉じた足の力を解いていった。中心は全体的に湿っていて、ベットに染みを作るぐらいだった。それを潤滑油として性を撫で回した。今までとは違う声と、顔を歪めた。指が湿り気でふやけてくると、ぼくは唇を付けた。イヤと言いながらふとももには力が入っていない。徐徐に舌の動作を激しくしていくと絶頂を迎えていた。脱力している奈々子を見ながら服をすべて脱いだ。奈々子はぼくに前戯をしようとかろうじて立ちあがったが。ぼくはいいんだと制した。スルリと中に入った。動かすと直に発射してしまいそうだった。少しの間そのままにしておいた。ぼくは動作を続けている最中に奈々子好きだよとつぶやき、奈々子には聞こえていなかった。すべてはあっという間に終わった。

二人で仰向けとなり、天井を見上げていた。ちょうどぼくの住んでいるアパートの天井と同じ色合いだった。奈々子は寝ているのか判別ができないぐらい静かだ。

「ねえ、急いで就職しなくてもいいと思うんだけど」

「ありがとう。でもぼくには急いで就職と考えてないとダメになりそうなんだ」

「まだしばらくここにいて、私と一緒にいてくれればうれしいの」

「いいのかい？」

「もちろん。どうせ誰も使わない場所なんだし」

「すごく気が楽になったよ」

腕枕をすると、奈々子はぼくの方へ顔を向けた。

「雪は止まないね」

「バンは雪山仕様になっていないからね。この場所から動けなくなるかもしれない。それも最高だと思う」

「私も同じことを考えていたわ」

奈々子は僕の胸に顔を沈めた。

「堂本正の行方探しもこれからね」

ぼくは完全に失念していた。最初からどうでも良いと投げやりだった。そもそも形而上的難題に、ぼく達素人が関与しても、どれほ

どの意味があるのだろうか。何十年もかけて謎の解明に労力を注ぎ、結局あきらめざる負えない難題を、数日で解決するのは不可能だ。恐らく奈々子も認識しているのだろう。それでも立ち向かう奈々子に協力はしたかった。奈々子と暮らせれば、どうでも良いと思った。この瞬間を雪で凍結させて、時間さえも止まってしまえばいい。幸せな時間が、ぼくを少しの間まともにさせた。

雪がぼく達を薄明かりで照らした。奈々子は幸せそうに寝息を立てていた。

奈々子が起きてくるまでにシャワーを浴びてコーヒーを用意しておいた。購入した食パンをトーストし、レタスとトマト、ハムをスライスして、マスタードソースとケチャップを調味料にサンドする。斜め半分にカットすればそここのサンドイッチになった。バスローブ姿の奈々子が現れた。ぼくは奈々子の体を想像できた。それだけで下半身は熱を帯びた。足を組んで変化を隠した。隣あってソファに座り、コーヒーを飲んだ。お腹が減っていた二人はサンドイッチを平らげた。腹八分目の感覚も悪くなかった。すべては奈々子と一緒にいるおかげだった。雪原となった砂丘には今もなお雪が降り注いでいた。バルコニーに積もった雪は十センチぐらいまで達し、FPGAのデータシートと同じぐらいの厚さがあった。気温が低下していることで溶ける前兆がない。

「閉じ込められるかもね」

奈々子は不安がつていなかった。試しているのかもしれない。

「大丈夫でしょ。『シャイニング』みたいなことは起こらないよ」

「何それ」

「冗談。でも奈々子と一緒にならしばらく動けなくてもかまわないよ」
「ありがとう」

雰囲気に蕩けていると時間は高速で過ぎた。午後になってやっと止んだ雪を解かす太陽は重厚な雲で隠れている。待つしかなかった。堂本正の新聞記事にはモノクロの写真が載っていた。小さくて顔の特徴をとらえづらい。じっくり見て、ようやく昔は男前だったとい

う印象があった。それでも、知人に堂本正と言わずにこの写真を見せたらわからないと言わせるぐらいだろう。奈々子は酷く遅いネットに関連記事を調べ、ぼくはタウンページで市役所や、学校付近の住民に片っ端から当たった。市役所は取り合ってはくれず、一人だけ知っているというおばさんあるいはおばあさんがいた。電話口ではどこかで聞いた覚えがあると言いつつも、なかなか思い出せず、ぼくを十分程度待たせた後に語ってくれた。

蒲田キヌは七十七歳で、主人の蒲田益男八十五歳は今年の十月に死去していた。彼は堂本正を二十年前に救出した関係者だという。住所を教えてもらい、詳しい話は直接あつて聞くことになった。ぼくたちが行けるのは数日後だというと、その間に調べてみるそうだ。

「すごいじゃない。関係者の一人が見つかったのね！」

「でも本人はいないんだよ」

「大きな進歩よ。堂本正の奥さんも辿り付けなかったんだもの。私達には運以上の何かがあるんだよ」

「確かに偶然にしてはすごいな」

奈々子のご機嫌だった。ぼくと一夜を共にした時よりも嬉しそうで複雑だった。堂本正の消息が見つかってしまえばぼくだけを見てくれるだろう。今は期待して堂本正を探せばいいと思った。

昨日と同じ服装だった奈々子はバルコニーからガラス度を隔てて外の雪を見ていた。ぼくは後から抱きしめて、奈々子はぼくの手を握る。しばらくその状態になると、下半身の硬直を悟られないよう腰を離し、奈々子のセーターから手を入れて胸に触れた。身を振った奈々子のセータを脱がせ、黒い下着だった。キスをしながらソファに移動した。ブラも外してしまうと乳頭に舌を這わせた。

「ちょっと待って」

「今日はシャワーを浴びなくていい。このままがいいんだ」

奈々子はぼくの接実な訴えに諦めたようだった。

「私のお願ひも聞いて。今度は智也の体を見せて」

ぼくは自然ダイエットに成功し、腹もやっと人前で見せられるぐら

いになったものの、こんな明るいところではさすがに恥ずかしかった。それでもここで引いてしまつては勢いが途切れてしまう。わかつたといつて服を脱いでズボンだけになった。奈々子はぼくの上半身を穴が空くほど見ていた。どうだ？ともきける自信がない。奈々子の手はぼくのズボンの突起を撫でて、乳首に舌を絡ませた。声を上げそうになるのを堪えた。ズボンを剥いてしまうと、ボクサーパンツ姿になったぼくをまた凝視した。

「そんなに真剣に見られてもこまるよ」

「お願い見せて」

ボクサーパンツを脱がした。ぼくの突起した肉幹が現れ、奈々子は口付けし三度付けては離す動作を繰り返すと、ふくんだ。技巧なのか、素面のせいなのか、発射の前兆は直に表れた。腰をずらして奈々子の上下運動を制すると、

「私の口に出しても大丈夫だから」

ぼくは気を抜いたところで発射した。奈々子は難なく飲み込んでしまった。ぼくは奈々子をソファに座らせると、M字開脚を要求し、スカートからの下着を見た。黒のパンツの中心に手を合わせると、うっすら湿っていた。ぼくは奈々子の清止を振り切つて黒いパンツを脱がせた。湿った性器が露わになった。明るい状態では全部が見えた。やめてという言葉が無視してぼくは性器を広げて舐めた。森の香りがした。ちょうど山道から廃墟となった学校までの道のりで感じたものだった。ぼくの肉幹は完全に力を取り戻していた。奈々子の表情も全体の体も性器もすべてリアルに見ることが出来る。どれをとっても最高だった。乾燥していた唇が奈々子の愛液で潤い、ぼく達は繋がった。体と体を合わせた状態で上下運動を行い、揺れる視界の中でも奈々子を見ていた。眉間に皺を寄せている奈々子はかわいくもありセクシャルだった。キスをしたまま発射した。

「智也のこと本気で好きになっちゃった」

「うれしいよ。ぼくも同じことを考えていた」

ぼくたちの雪は完全に溶けていた。

失踪と失速

雪解けは三日後だった。太陽が現れても、バンで走れるようになるには二日かかった。クリスマスは別荘内で閉じ込められる羽目になったが、ぼく達には関係なかった。少なくとも、恋人とのクリスマススイブで、デイズニーランドや、高級ホテルの宿泊、クロムハーツのアクセサリーをプレゼントされるよりも、雪山の別荘でのんびり過ごしているほうが贅沢に思えた。結局は蒲田キヌ以外の情報は得られなかった。バンを発進させて出発した。

蒲田キヌから教えてもらった住所を辿った。前にぼく達が見下ろしていた集落から幾分はなれた場所だった。田面という変わった苗字の表札を通り過ぎ、過疎化しているものの、残った雪をかいている老人を見るとほととした。その老人に住所を聞いた。目と鼻の先だった。どこから来たのかと尋ねられ、東京の中野区からと答えるかどうか？と反応があった。ぼくは山菜が一杯取れるところだよと答え、いいところに住んでいると言われた。通り過ぎると、奈々子は嘘つきと苦笑いしながら突っ込んできた。蒲田キヌの家は田圃を進んだ先にあった。人が通れる程の通路前にバンを止めた。一面を田圃に覆われた家。バックには山が聳えてる。木造だった。縁側があり、障子がある。庭に芝犬を飼っていた。敷居の役割を果たしていないブロックには蒲田という表札があった。ぼくがすいませんという、芝犬は起きて不思議そうにぼくらを見ていた。奈々子は蒲田キヌさんいない？と話しかけ、芝犬は首を傾げた。反応はなかった。ぼくらが困っていると、芝犬が家の中に向かって吠えた。はいはいと声がした。現れたのは腰が曲ったおばあちゃんだった。黒い袴に灰色のモンペを着ていた。ぼくが電話口であばさんと間違えたのは年齢の割にはきはきした対応だった。

「すいません、菅野智也です。堂本正さんについて聞きました」

「私は付添の小坂奈々子と申します」

「あらー、夫婦だったのね。あがってあがって」

夫婦ではありませんと言おうとした時は家の中に消えていた。身のこなしも早かった。芝犬は落ち着いて座っていた。奈々子は顔を赤らめたまま無口だった。

ぼく達は堀炬燵に案内された。突き抜けとなっている隣の部屋には囲炉裏があった。天井から吊るされている鍋と、家宝とされている刀に掛け軸、線香の香りがぼく達を落ち着かせた。蒲田キヌは玄米茶を出してくれた。

「早速なんですが」

「まあまあゆっくりしていきな。急いでも見つかりはせんよ。わたしが関わったわけじゃないからね。あんた葉っぱを吸うんだろ。縁側で一服したらどう？」

「はあ」

ぼくは蒲田キヌのペースに乗せられてたばこに火を付けた。ガラス製の灰皿にはマルボロの吸い殻が二本あった。マルボロがこの近くに売っているのであれば、場所を教えてほしかった。

「主人が吸っていたものじゃ。残っていて悪いね」

「大丈夫ですよ」

「胃がんだった。毎日煙を吸い込んでいたのに、胃がんで死んだんじゃ。わからないもんだね」

庭に居る芝犬がしっぽを振っていた。奈々子は歩み寄って頭を撫でた。芝犬は目を閉じてうっとりしていた。たばこを吸い終わると、蒲田キヌの話を持った。急いではいけない。今のぼくにうってつけだった。

「堂本正という男はちょうどあなたぐらいの年だったかな。主人が農作物を運搬している時に、たまたま見つけたんじゃ」

「たまたまと言いましても、誰も使っていない小屋に居たと聞いておりますが？」

「ああ、昔は休憩所に使っておったわい。わたしはいったことがな

いんで場所はわからないんだわ。小屋の先に綺麗な水が取れる川が流れおったからの。主人はそれを飲みたくなつたと言っておった」

「今はその小屋はないと」

「誰もしばらく使わなかったから、いつ消えたかまではわからん。主人が行って見たら、何も無くなっていたと怒っておったわい。それが確か：二年前」

ぼくは考えた。蒲田キヌは消えたことに関して疑いはないようだ。たばこに火をつけた。

「この場所はよく人が消える現象はあるんですか？」

奈々子は芝犬の相手を済ませると、会話に加わった。

「わたしが子どもの頃だから、戦中の話じゃ」

蒲田キヌはそういうと、玄米茶で喉を潤した。そして続けた。

「この場所は子供の疎開場所として指定されておった。近くにある小学校もけっこうな大きさだったわい。今は使われてないんじゃないやろ。うな。いろんな場所から来た子供があふれておった。賑やかでも住居が足りんぐらいだったわい。安全なのじゃな。ここは。わたしも小学生で、戦争とは無縁の生活を送っておったわい。そんな場所であるから、普通は開発されていき、大きな村として変わるじゃろ。でもそうはならなかった」

「何かが起こったと？」

「話がわかるの。そうなんじゃ。神隠しが起こったわい。小学生が校庭を出て遊んでいると、突然いなくなつて、見つからない話があったんじゃ。皆の両親は相当心配しておった。政府なんぞ、戦時中は米兵を倒すことばかりを考えておったし、戦争が終わったら復旧のことばかり考えおった。神隠しなんざ言い伝えじゃ。そこらへんの崖から落ちてしまえば、誰も調査できないぐらい無力じゃったよ。それで人々はどんどん離れていった。残ったのは我々のような地元民だけじゃ。過疎が進めば若い連中は働くために出て行ってしまう。そうなる、誰も戻ろうとはしないんじゃないや。便利な場所に慣れてしまったら、不便な場所になんか帰ってこんだろう。結局はそういう

悪循環で神隠しが起こったと断言ができんわい。誰も証明なんぞしている暇もないかなの」

「そうでしたか」

ぼく達は考え込んだ。場所のわりに大きな小学校も、過疎が進んでしまった経緯もわかった。しかし、子供が消えたという原因が遭難なのか本当に消えてしまったのかさえもわからない。

「堂本正さんの話に戻りますが、病院に運んだ時のことを聞いていませんか？」

「たまたま主人が日記を書いておったんじゃ。酷い無口な人でね。死ぬ直前に誰か知らない人から連絡があって堂本正の話を聞きたいと言われたらしいんじゃが、知らんの一点張りだった。これが日記じゃ」

紙自体は風化していた。旧仮名遣いで書かれた日記だった。昔の作家の草稿のようだった。ぼくにはだいたいしか読めそうにない。

「平成一年、八月某日、ここに若者を見つけたと書いておる。読みあげるとな」

目を細めて黙読していた。蒲田キヌは頷くと続けた。

「川へ続く道の小屋で若者を見つけた。私は軽トラックで荷物を運んでいる最中で、ふと立ち寄ったのだ。辺りには何も見当たらない。近くの民家からけっこう離れていたから、歩いたにしてもなぜこの場所にいるんだと興味をもった。窓を叩いて若者を起こそうとした。若者は虚ろな目で訴えていた。衰弱しているのがわかったのはそれからだった。私は大丈夫かという問いかけをしたものの、若者はうんとかああしか言わない。私の言葉は殆ど届いていなかったと考えられる。私は衰弱しきった若者を動かしていいものかと考えた末、置き去りにするよりも時間が早いと考え、近くの病院まで搬送したと書いておる」

「そこに何か書いてありませんか？例えば若者が何かを言っていたとか？」

「この項はそれまでじゃ。次を読んでみると」

目を細めて黙読していた。蒲田キヌは頷くと続けた。先ほどの動作と一寸の狂いもなく同じだった。

「病院で手当てを受けた若者は意識がしっかりして、私へのお礼をいってくれた。あんな場所に歩いていくのは危険だと忠告すると、奇妙なことを言っていた。私のバンは知らないか？」と。私はここまですぐに私も頭に来てしまった。命の恩人である私が知らないと言っているのに、まだ疑うのかと。記憶喪失という言葉で医師に聞いた時にやっと気持ちは収まった。若者には妻がいたので、後はまかせていた」

「やはりバンが消えたと言っていましたか」

「大筋は『過去からの手記』と差異ないわね」

ぼく達は行き詰まった。病院も今は使われていないという。存在するかどうかもわからない。但し、ぼくと奈々子は廃病院へは足を運びたくなかった。廃校よりもやばい雰囲気があったからだ。

「そもそも、堂本正という青年は行方不明なんじゃろ？」

「はい。私達はその人を探しに来ました。後私の祖父の友達もこの近くで消えたと聞いています」

「そうじゃったか。ならばあまり詮索せんほうがええ。時代は変わったにせよ、同じことが起きておるんじゃ。お前さん達もいずれ巻き込まれる。悪い予感がするんじゃよ。わたしはここに長年住んでいるからわかるんじゃ。疎開をしてきた子供たちが消えていったのは偶然じゃない」

ぼく達は何も言えなかった。芝犬が餌を催促していた。その目は一点の曇りもなかった。

調査は滞った。ぼく達は車内で言葉を失い、辛うじて別荘に戻った。お互いセックスをするよりも一人で考えて次の行動を示す必要があった。

次の日、十一時に起きると、奈々子はぼくの知らない内に去っていた。別荘の部屋を調べた。ほとんど同じ造りの部屋は、同じ場所を

何回も調べているようで混乱した。ぼくに非協力的であり、人が隠れる場所はいくらでもあった。しかし奈々子がぼくとかくれんぼをしようなんていう遊び心があるとは思えない。最後に地下室を調べた。楽器だけが存在していた。ぼくが奈々子と呼ぶ声は時間と比例して爆音となったが、何の反応もなかった。バンだけが存在している。

考えてみた。彼女が居そうな場所、趣味、くせ、嗜好等。思いつかなかった。女性の月に一度訪れる不安定な時期であったのも要因だったのだろうか。冷静に考えている暇もなかった。もしかすると、奈々子が一人で調査して、彼女の祖父のように、堂本正のように消えてしまうのではないか。彼女の祖父は何十年もの間見つからないのだ。ひどく現実離れしているというのに、それが、一番可能性が高いと思えてきた。

バルコニーに出て叫んだ。

「戻ってきてくれ奈々子！」

何度も叫んだ。ロックバンドがライブの途中でサビを何回もリピートするように。

砂丘は晴天とコラボレーションして綺麗だった。

先に見える海は太陽の光で輝いていた。

リゾート気分で砂丘を歩いている人々はぼくの叫びに気が付いていないようだ。

ぼくは無力だった。

たった一人、砂漠の見える別荘で佇んでいるだけだ。

「ちくしょう」

と叫ぶと、急いでバンに乗り込んで発進させた。急発進でタイヤが悲鳴を上げ、荷物は遠心力に耐えきれず車内をダンスしていた。山道を猛スピードで駆け抜ける。どうせ対向車はいないんだ。飛ばして誰よりも早く見つけなければ、本当に居なくなってしまう。道路脇の木々にぶつかりそうになる。バンで雑草を踏み倒しても感触はなかった。ガードレールの無い斜面もスピードを緩めることがなか

った。獣と化したぼくは行くあてもなく突き進んだ。どうすればいい。どこで消えたんだ。考えてもしかたがなかった。立ち止まってしまうばく自身の意識もなくなってしまふような気がした。捜査中に通らなかつた道を選択し、枯れ果てた森を進んだ。幾分雪が残っていてタイヤがスリップする。気にせず走つた、どのぐらい走つたのかわからなくなつた矢先、バンのエンジンがピタツと止まつた。速度メーターが0になり、ブレーキなしでもタイヤの回転が止まつた。車にブレーカが付いていて、OFFにしたらこうなるのだろう。それでも原因がわからなかつた。ガソリンは半分近く残っているし、オーバヒートする気温でもなければ、タイヤのパンクもない。おおよそ車の故障の要因を探ってみたが、どれも当てはまらなかつた。

謎の生物との対談

何度もエンジンを掛けた。キーを回しても、無音だった。あきらめるまでに時間はかからなかった。ぼくは呆然とし、呆然としている時間を持て余すようになる、携帯電話を取り出し、電波が届かないことを確認すると、必要最小限の荷物をバックに入れ、バンを乗り捨てた。来た道をタイヤの後を辿って歩いた。ぼくの集中力は突然途切れた。信じられないぐらいの距離だった。荷物と奈々子の行方不明がどっと疲れに出た。荷物の上や切り株の上に座り込みながら歩いた。日が沈むまでに戻らなければ、漆黒の闇になる。そうすると、身の危険が発生する。遭難の恐怖を覚えたのは子供の頃だった。とはいえ子供の頃だから迷子だった。実家から車で二十分程度のデパートに母親と買い物をしに行き、ぼくは休んでいると母親はいろんな場所で買い物をした。持てあましていたぼくは母親を探しに行き、結局迷子となってしまうのだ。探している最中は無我夢中だった。ようやく母親の姿らしきものが見えて、声を掛けようとした矢先に振り向かれ、まったく違う人だった。ぼくは走った。店員に話を聞かれた時は泣いていた。デパートの迷子案内でようやく再開したのだ。

その頃の方がよっぽど恐怖だろうとおもいつつ、迷子案内がないこの場所では誰も助けしてくれそうにない。探しに来たぼくが、まず自分の身の安全を確保してからという状況は悲しすぎた。

精神的疲労がピークに差し掛かった時だった。遠くに気配がした。近付いていくと、きつねとしか言いようがない。動物研究家ではないから、持っている情報を引っ張ってくると、きつねだった。まあ、自然で覆われた場所だし、きつねがいてもおかしくないだろうと思った。きつねのほうがこんな所になぜ人間が！と驚いているのだろう。ぼくが近付いても身動きしなかった。顔には愛嬌があつてぼくを安心させた。今はきつねに縋りたい気持ちだった。心の中で思っ

た。

『奈々子って子知っているかい？』

そうすると、きつねの鼻が微動した。くしゃみでもしたいんだろうか。顔を横に振ってぼくの方を体ごと向けた。

『ここにはいない』きつねは心に呼びかけて来た。

「はっ、えっえええ！」

山全体に響くような声を出した。ぼくはやばい薬でも飲んでしまったのかと考えたが思い当たらなかった。正常なんだと意識した。

『そんな大声を出すな。落ち付け。心で語ればわかる』

ぼくは深呼吸をした。笑おうとしたが顔がひきつただけだった。『悪かった、って伝わっている？』

『ああ、お前の言っている人は来ていない。お前の身近に手がかりがあるのではないかな。そんなに焦っているのは、肝心なものが見えてこないぞ』

『急いで探しているんだ、急にきえちゃって、すまん、落ち着こう』
『やっとわかって来たようだな』

きつねは後足を追って座った。ぼくはたばこに火を付けた。ぼくは『過去からの手記』の内容を思い出した。堂本正よりも鮮明な映像として捉えることができ、薄い霧が幻想性を少し高めているだけだ。これは紛れもなく現実だった。

『お前と似たような年齢の男を知っているようだな。彼もここに来た』

『じゃあ、あんたがその人を消したの？』

『違う』

『というと？』

きつねは目を掻いた。溜息を付いているようだった。

『きつねは何も関与していないんだよ。彼等は勝手に形而上的な言い伝えに脅えているだけだ。そのような容疑を掛けられるのは不愉快だよ。きつねはそんな魔術は使えん』

『とすると、ぼく達が詮索すると言われて怯えていただけってこ

と』

『あるいはその通りであり、間違ってもいる。人はそれぞれ感じ方が違うようだからな』

『間違っている？』

『例えば、詮索するなど言われてはいそうしますと従う人もいれば、逆に火が付いてしまう人もいる。そういうことだ』

『では奈々子が消えたのも、堂本正が消えたのも同じではないと』

『あっきも言った通り、奈々子というものが消えた理由はお前の身近にある。後で考えてみると良い。堂本正は…』

ぼくは考えた。別荘に戻ってもう一度探してディテールを探して見るしかない。堂本正の答を待った。

『死んだ』

「えええっ、まじで！」

ぼくは倒れそうになった。今までの詮索は水の泡か？と思いつつも、このきつねを信じて良いものか。

『分かっているんだ。お前が仕事を失って、東京から仲間五人で旅をしてきて、鹿児島に着くまで一人となって、仲間を手に入れてここまで来た。喪失感もわかる。だがそれらを再び手に入れることは難航することも』

『信じるよ。それで、堂本正はなんで死んだのかな？』

『確かに、最近この場所に来ていた。何もないことを確認して、彼は幻覚性について考えていた。自分は二十年前に同じ場所に立ち、空腹で幻覚性のキノコを食べたのではないかと考えていた。彼の取った行動はそこらへんの危ないキノコを食べまくっていた。そして気がおかしくなり自殺という形になった』

『ちよつと待て。自殺にしても、車はどこにあるんだよ。二十年前のバン、最近の堂本正が乗っていた乗用車、それにぼくのバンだつて理由もわからず故障しているんだ』

『お前の言っている車はすべて同じものだ。二十年前のバン、最近のバン、今のバンは同時期に乗られていないだろう？』

堂本正が居なくなった八月に乗っていた車がバンだとすると、確かに時期はかぶらない。でも待ってくれ。待ってくれ。待ってくれ。『わかったから、待ってくれ。仮にそうだったでしょう。でも二十年前のバンは堂本正が故障したんだと言っているんだ。そして消えてしまっただけ見つからなかったともね。そうすると最近のついていたバンが同じであればわかるだろ。それに、堂本正が死んだあとに残ったバンがなぜ東京で売られているんだよ？』

『それは簡単なことだ、なぜなら…』

きつねが言おうとした瞬間に銃声が聞こえた。かなり近くだった。きつねは過剰反応して、その場を立ち去ろうとした。

『ちよっと待ってくれ！』

逃げ脚は早かった。きつねは森に消えていった。銃声は遠ざかった。

足が可笑しくなる位あるくと、別荘に付いた。その間はなににも考えられなかった。暗くなった道を正しいかどうか不安になりながらようやく辿りついたのだ。玄関には奈々子の香りがした。あのきつねの言う通り、戻っていると思い駆け付けた。ダイニングのテーブルにはこんな置き手紙があった。

私は日常の生活に戻るよ。

ちよっと父親の体調が悪くてね。こんな私でも心配するの。

正確には聞いてから凄く心配になった。私の好奇心のせいじゃないかと思っているの。

智也にもやばいことに巻き込んでしまったみたい。

蒲田キヌさんの言う通り、詮索は止めよう。私たちも少なからず可笑しくなるわ。

部屋はいくらでも使っているけど、出て行く時は、鍵を例の場所

に置いてね。

月に一度お手伝いさんが来るけれども、ちゃんと話をすれば問題ないから。

智也と過ごせた時間は楽しかった。好きだよ（ピースマーク）

それじゃ

別れの言葉をメールか置き手紙で言われた男のコンテストがあると
するなら、ぼくはかなり良い順位になると思う。

完全なる孤独

奈々子の喪失ときつねの出現、堂本正の死、バンの謎はぼくを混乱させていた。コーヒーを入れて、たばこを吸うと、幾分居座ることが出来た。どうやらぼくは、気が付かない間に誰か近くにいないと落ち着かない人間になっていたらしい。好きな相手とあらばなおさらだった。ある時、同僚に飲んだ席で話をしたことを思い出した。

「菅野君って、付き合った子何人なの？」

「七人だけど」

「そんなにいるの！俺なんか三人だよ」

負けを認めた兵士になっていた。同僚の女の子にモテる基準は人数だった。

学生時代、女の子にモテた男はあらゆるジャンルを超えたヒーローであり、その当事者は自信に満ち溢れていた。ある時はぼくも夢中になったし、自信に繋がるんだと信じていた。しかし、生涯セックスをしなかった偉人もいれば、奥さん以外の女性と付き合ったことがない社長（社長になってから金で複数の女性を買ったことは別）もいる。

つまり、本質が変わらない限り、ぼくには何も自信を与えないのだ。

奈々子の別荘でソファに寝転んだ。ぼくは決して何かをやり遂げるプロセスに慣れ過ぎていた。このままだと、考えすぎたあげく、デカダンスな生活に立戻りそうだった。

携帯メールを見た。着信は迷惑メール十通のみ。ふと奈々子のメールアドレスを知らないことに気が付いた。恋愛を休み過ぎていたのだろう。そしてぼくは過去に縛られているのだと思う。十年間携帯の電話番号とメールアドレスを変えなかった。その有害な代償を考えた。

番号非通知着信…約五十件

エロサイトからの勧誘メール…約五百件

月収三十万を超えるアルバイトからの勧誘メール…約百件

架空のエッチな女の子からの、サイトを通じたメール…約千件

架空旅行券当選通知…三件

架空請求…五件（総額は三十万円）

どれを取っても社会悪の一部だった。弱きものから詐欺で金を巻き上げる悪魔だった。ぼくは迷惑メールが理由でアドレスを変えるのも嫌だった。ぼくは二カ月前にフィッシング詐欺に引っ掛かった。エロサイトからの勧誘メールに記載されているアドレスからネットアクセスする。アクセスしたサイトの適当なボタンをクリックすればもうお終いだった。『会員になって頂きありがとうございます』というメッセージが届き、即座に請求が来る。一定期間内に銀行で指定の口座に振込を行わなければ金額は倍増し、それでも無視していると自宅へ回収に行く、若しくは勤めている会社に回収しに行く、私たちは不当なことは一切していないので、裁判されても問題ないといった内容のメールが届く。個人情報流出が当たりまえの世の中なので、知識がなければ本気で悩んで払い込んでしまう場合もある。ぼくも悩んだ口だった。今はそれらをぶっ壊してやりたかった。着信メールには直に連絡しろという内容が書かれていた。連絡した。東京ナンバー。もちろん偽名で。

「XXXの高山です」

野太い声だった。それでも魯鈍な印象はない。

「高下と申します。請求のことなのですが」

「お宅のメールアドレスは何ですか？」

ぼくは教えた。偽名とメールアドレスはリンクしていないようだった。

「滞納は困るんだよね」

「すいません、ぼくお金がないもので」

ぼくは弱者を演出した。相手を増長する意図があった。

「あんたの都合でしょ？高下さんね、こっちは仕事なんだ。金は返

して貰わなくてはならない」

「わかってはいますが」

高山がため息をつく。電話口の向こうから声がした。声というよりは罵声だった。

『ふざけんなコノヤロー。舐めてんじゃねえ』

「振込先を提示しているんだから、今日中に払ってくれ。親にでも借りればなんとかなるだろ」

高圧的になった。弱者を脅して抵抗心をなくす作戦のようだった。ぼくはこんな遣り方をして警察に捕まるのが怖くないのだろうかと思った。高山という男も常識はあるのだと思うが、裁判で勝てるという自信はどこからくるのだろうか。

『ぶっ殺してやる』罵声が聞こえた。

「そ、そこをなんとか」

「いや待てん。今日中に振り込まなければ、お宅か会社にまで回収係を行かせる。調べはついていないからな」

「ちょっと待ってください」

ガシャンと切られた。今日中に九万円を東京支店の銀行に振り込まなければ、ぼくの生活は滅茶苦茶になる予定だった。ぼくはあり合わせのパスタを作り、ワインを一本開けて寝た。

次の日は電話で起こされた。一五回のコールが鳴るのを不機嫌に眺めていた。出なかった。シャワーをあびてたばこを吸っていると、同じ番号からだった。三回目のコールで出た。

「XXXXの高山だ。降り込んでないみたいだな。今、お前の家の近くに回収係がいる。回収係の訪問費用は五万だ」

「高すぎませんか？」

ぼくはあくびをしながら答えた。五万の理由については教えてくれなかった。酷く怒っていた。

「嘘だと思っているのか。もう曲がり角に来ているんだぞ。後はお前の会社に行くよう仕込んである。上司に言えば肩代りぐらいはし

てくれるだろう」

ハツタリだった。ぼくのアパートまでの道のりを曖昧にすることで、知らないことを露呈させないようにしていた。ぼくの会社なぞないのだ。所詮詐欺なんてそんなものだ。ぼくには失うものがない。「はいはい、お疲れさまです。じゃあ上司かぼくの親に肩代わりしてもらってください」

ぼくは頭を掻いた。

「後悔しても知らんぞ」

凄味方は筋の人かもしれないなかった。しかし、筋の人がこんなセコイ詐欺をするとも思えなかった。あらゆるシステムが網羅されている現代に、このような杜撰なシステムで生き抜いていく会社があること自体信じがたい。ネット上でのシステムはなかなかのものだった。

「わかりました。裁判をしましょうか。ぼくには九万十五万のお金を御社のようなところに払う義務はないと考えております」

「裁判か、まあいい。それでもな、もうお前の自宅と職場に着く頃だ。面と向かって話をしよう」

まだ楽しんで見たかったが思いつかなかった。もう少し頭を良くすべきだった。

「あの、先程からぼくの自宅だの、会社だの言っておりますが、ぼくは今、東京に住んでいませんよ。失業中ですから、会社なんてのもありません。だからもし回収係の方が探しまわっている要でしたら、知らせてあげてください。まあ、そんな人いるとは思えません」

高山の息使いが荒くなってきた。

「どこかの組がからんではないだろうか？」

憶えているのだろうか。

「絡んではいませんよ。一般人です。強いていうなら京都のXXX組の幹部なら知りあいです」

言葉に窮していた。裏社会が絡んでないと知ってほっとしているの

かもしれない。

「俺は暇じゃないんだ。時間の無駄だ。それでも請求額は払ってもらう。絶対に」

「こうしませんか？ぼくは今何もしない状態です。心もカラです。XXの高山さんのお勤めしている会社を調べて来週にでも行きます。でもあんまり刺激はしないでくださいね。ぼくはそちらの迷惑メールで非常に悩みましたから、銃か爆弾をお土産に持つていくかもしれません。心がカラですから、高山さんの会社を粉々にして自殺するかもしれません。それも悪くないでしょ？」

「話にならない相手のようだな」

ガシャンと切られた。ぼくはリダイヤルした。高山が出て、ぼくがさっきの続きをと言った瞬間切られた。立て続けに三回リダイヤルしたが出なかった。携帯電話を床に投げ捨てた。最低の相手と最低のぼくは同じだった。

そのようにして僕の二日は過ぎて行つた。例えばぼくがタレントでテレビで武勇伝を語ってくださいと質問される番組放送の前、自分の経験談として二択の内一つを選ぶとすると、前者が架空請求サイトとのバトルであり、後者がオナニーを一日十回試みて、六回発車し、七回目で自分の右手の爪でペニスを切つて、血を流していた中学時代とすると、後者の方を選択するに違いない。

奈々子の別荘を出て最寄の駅まで歩いた。鈍行で当てもなく北を目指した。

時には時間の感覚も忘れて、只管歩いた。終電が無くなる時間も電車の来る間隔も、人口の多い街とは比較にならない。夜明けまで待てる程温暖な季節ではなかった。体力をすべて使い果たして二駅分しか進んでいないこともあった。ようやく宿泊施設に付いた時は、自分の顔を鏡に映して愕然とした。まるで病人だった。

電車の旅で新聞を見て、七日間のニュースをまとめた。

▼架空請求の闇サイトを社会悪とした評論家が、架空請求の闇サイト経営者の部下Zに殺された。Zはその後、警察に捕まる前に自殺

した。

▼自殺率は世界でもワーストの国であるという関連記事があった。

▼都心のど真ん中で三世帯分の人を殺した犯人の動機は幸せな人であれば誰でもよかった。

▼経済悪化の救済措置が却下された。原因は措置する側も不景気だから。

▼暗いニュースの中、明るい話題ですと言ったキャスターは某有名タレントが結婚したことを満面の笑みで答えた。

この国は本当に安全なのだろうか？情報を冷静に判断して記事にするのではなく、現状を

革新して改善すべきではないのか。ぼくが口論した闇サイトのシステムより高度で、悪質なものは数えきれないだろう。正義とは、そういう状況を止めると呼び掛けるだけでいいのか。正義とは、殺人に対して、時間を掛けまくって裁判し、大抵の犯罪者は数年で更生しいずれ世の中に出ていいのか。

ぼくにはそれを語り合う仲間もいなかった。

完全なる孤独がぼくを襲った。

新たな道

旅から半年が達ち、則之と明日香は付き合うようになった。人生初の交際は、半年という時間でもテンションが落ちなかった。明日香の過去についてはすべて受け止めることが出来ているし、自分がいろいろなことの影響を受けて、心が開いてきたことの感謝はいつまでの忘れないつもりだ。掛け替えのない相手と巡り合うとこんなに毎日が楽しいんだと実感していた。友達も何人か出来た。則之は部屋で明日香とのデートの時間を待っていた。今日は明日香が則之の部屋に泊まりに来る約束だった。パソコン関係の機器に埋め尽くされた部屋は、一般人の模範のような部屋に模様替えした。人の数が慢性的に不足している企業に就職し、三カ月が経った。会社の雰囲気には慣れて、仕事を着実にこなしていた。持っている知識を駆使して、そこそこの仕事が回ってくるようにもなった。これからだと則之は思っていた。

郵便受けにカサツという音がした。則之は確認するために外に出た。智也からの手紙だった。部屋に戻ってソファに座ると封を開けた。

元気かな。明日香からめでたく則之と付き合うようになったと知らせがあったよ。

おめでとう。彼女とは旨く行っているかい？

ぼくは皆と別れた後、鹿児島に行ったんだ。一人のドライブは少々つまらなかったな。仲間の影響は大きかった。ぼくだけでは到底成し遂げられた旅ではなかったよ。もちろん誰かが欠けてもダメだった。そういう意味では目的を果たすための作業をしていたよ。意地だったと思う。ぼくは何故こんなこととしてまで進んでいるのだと、自分に問いかけないよう心掛けていた。それらが心に住みついてしまえば、あきらめるのは簡単だと考えていたから。

思い返してみると、皆が居なくなる前に心が籠った言葉を言ってあ

げればよかったと思っているよ。結果オーライみたいところがあつただけど、明日香に則之の相手をしてくれと頼んだのは僕だし、少なからず二人が傷付いた時は本当に申し訳ないと思った。武史にも絶対成功しろよと言っていない。彼とは連絡とっていないけど、あいつのことだから京都で旨くやっているんだろ。清美が体調を崩した時も、小倉の病院で明日香に看病任せっきりだったし、気のきいた言葉を言えずに出発してしまった。でも皆と一緒に旅に出て本当に良かったと思っている。紛れもなくぼくの宝物となつたし、掛け替えのない時間だった。皆も同じだと嬉しいな。

鹿児島に行く前は、とびっきりのイケメンが経営しているバーに入つたんだ。あまり繁盛していないとは思うんだけど、女の子が、彼を目当てで固定客になっていた。彼みたいなカッコイイ大人になりたいと思いつつ、鏡に写つた自分を見て無理だと判断するのは悲しいよ。危なく警察官に捕まりそうになつた時はひゃつとしたけどね。理由は酔っ払って、川にワインの瓶を投げ込んだだけ。くだらないでしょ。

鹿児島では、ある図書館に毎日通つたな。あんなに集中して本を読んだのは久しぶりだったよ。その内、受付の女の子と仲良くなつて、彼女の別荘にまでいく関係になつたんだ。別荘にまでいくきっかけについては長くなるから、今度会つた時に話すよ。形而上的過ぎて伝わらないかもしれないけど。別荘は鳥取砂丘の近くにあるんだけどね。雪が降って三日閉じ込められたりもしたんだけど、あんな幸せな時間はないと思うぐらいだったな。クリスマスは最高の思い出が作れた。でも彼女は先に帰郷してしまつたんだ。置き手紙を見た時は泣いたな。それで、途中皆で旅したバンが故障しちゃつたんだ。たぶん修理に出しても直せないと思うから乗り捨てた。何かぼくが関わると、皆どこか行ってしまうみたい。

不幸を呼びよせるのかもしれないね。確かなのは、何かに夢中になると、肝心なことを忘れてしまう傾向があつて、それがどれだけ大切なものを失ってしまうかを痛感したよ。手放したくない人は、い

つも手を握っている必要があるし、過去を後悔しないようにするには、自分の納得いく決断をしなければならぬ。そんなことを考えていた。

その後については得に話をするまでもないな。孤独という感覚だけが付きまとうようになった。東京でも無人島でも、近所の付き合いが親密な所でも、ぼく自身がだれかとコミットする意思がなければどこでも孤独になる。逆に、携帯電話もメールもなくでも孤独から開放されることは出来る。ここ何か月かはあちこち電車で旅をしていて、適当に滞在している。もうすぐ貯金が底をついてしまうから、そろそろぼくの長い休みを終わらせようと思うんだ。でも心配はしなくていいよ。今は結構追い詰められた状況だし、そういう状況だと力が出る性格だからさ。適当に職を探してみる。やる気も充電されているし。

客観的に、読み返してみても、三十路の人間が描く内容としては、あまりに幼い精神状態の描写だと思う。それでも、難しい言葉を使用せず、ぼくが持っている生の言葉を伝えたかったので許してね。長くならないうちに筆を置きます。

皆の居場所がわかったら、この手紙を回しておいてね。

それではまた！

菅野智也

則之は読み返すと、インターホンが鳴った。

「いらっしやい」

「お邪魔しま〜す」

明日香はソファに座ると、智也からの手紙に気が付いた。

「読んでみなよ」

と則之は言った。

ニューウェーブ

ぼくは波が見える海辺にいた。

空は曇っていて、東京の空色のようだった。

塩の匂いは自然と落ち着かせた。

漁師もいなければ、二つほど存在する海の家は閉鎖されている。

どこかの海水浴なのだろうが、名前さえもわからなかった。

幸い人の影もなく、カモメが泣いているだけだった。

おかげで、ぼくが一人海を見つめていても、自殺志願者だと心配されずに済んだ。

もちろんぼくは自殺志願者ではなく、たそがれているだけだ。

空気を吸った。

目をつぶれば一緒に旅をした仲間の顔が克明に描かれていた。

どの顔もみな表情豊かで、目の前に存在しているもおかしくない。

急に声が聞きたくなり、両親に電話しようと思うとバッテリー切れだった。

そもそも何か月も通話料金を滞納していれば、携帯事態が機能停止しているはずだ。

波を見つめていると、衝動的に一番高い波へ携帯を投げつけた。

ぼくはすべてを失い、すべてを最初からスタートさせるべきだろう。その波にニューウェーブと名付けた。

ぼくの生まれた年と同年代として、音楽的技巧というよりもアイデアで、シックではなくアバンギャルドなファクションで、時には暴力を衝動と変えて音楽にぶつけて時代をリードしていた流れ。古びて見えないのは逸脱していたからなのだろう。

今思い出してみても、ぼくのなかでは自然として存在していた。

少しでも音楽に触れてみた時間が昨日のように思える。

ぼくにも勢いがあれば再生し、時代を旨く渡れる可能性はある。もう一度、声を出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0044g/>

ニューウェーブ

2010年10月10日13時57分発行